Re:ゼロから始めるグランドオーダー

タイガ原

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
第六特異点、聖都での戦いを終えた藤丸立香。第二次臨戦態勢で待機していた彼に、炎上汚染都市冬木、特異点Ｆ――あるいは特異点Ｘで起こっているという異常が告げられる。――今回は、どのような困難が待ち受けているのか。

＊

賢者シャウラと接触を試みるために監視塔プレアデスを訪れていたスバルであったが、微睡みから覚醒するとそこは炎上する都市。この場所でも『死に戻り』を発動し、彼は大いなる壁に挑む。――今回は、どのような絶望が待ち受けているのか。

＊

「何、で・・・ アレが」
「――そこまでよ、悪党」
「どうするんですかナツキさん!?」
「――し、師匠ッ！」
「説明なさい、バルス」
「スバル、くん・・・」
「ベティーを信じるかしら」

「オタク、もしかして死んだことある？」
「おいおい、不用意に近付くんじゃ・・・」
「Ｉ ａｍ ｔｈｅ ｂｏｎｅ ｏｆ ｍｙ ｓｗｏｒｄ・・・」

「タイミング合わせるぞ、マシュ！」
「はい、先輩！」

「Ｆａｔｅ／ＧｒａｎｄＯｒｄｅｒ、リゼロコラボイベント！『Ｃｉｒｃｕｌａｔｉｏｎ　ｉｎ　ｔｈｅ　Ｓｉｎｇｕｌａｒｉｔｙ　―純白は死の輪廻と共に―』好評配信中！　ビクトリー！」
「び、びくとりー！」
※架空のイベントです。

目次

第１話「それぞれの非常事態」 1
第２話「漸近する運命の交差」 8
第３話「再会する純白の――」 14
第４話「魔術礼装・カルデア戦闘服」 22
第５話「邂逅と衝突」 28
第６話「禁則事項と在らざる手」 35
第７話「盾の少年と盾の少女」 42
第８話「サーキュレーション」 48
第９話「クリスタル・セカンド」 54
第１０話「水晶破壊任務・青の壱」 59
第１１話「漆黒の王、現る」 65
第１２話「アイスブレイク」 71
第１３話「さあばんと」 82
第１４話「闇を裂く」 89
第１５話「異世界の魔法」 96
第１６話「水晶破壊任務・青の弐」 103
第１７話「ひとりじゃなにもできないから」 109
第１８話「分断」 116
第１９話「モノクロの世界」 121
第２０話「三つの壁」 128
第２１話「二つ目の一番星」 135
第２２話「忘れた頃に」 141
第２３話「過去からの来訪者」 147
第２４話「道化」 154

第２５話　「裏」　161
第２６話　「使えるものは全部使って」　168

第1話　「それぞれの非常事態」

「あー……暑(あち)い……」
「どッこもかしこも燃えてやがンなァ。ほんとにここが大将の生まれッ育った場所だってのかよォ」
「実際にはここじゃねえし、燃えてもいなかったんだがな。どうなってんだこりゃ」
　燃える街。あちこちに倒壊している建物は、確かに現代日本のものだ。広範囲が燃えていることと、建物が倒壊していることを除けば、スバルの見知った日本の風景であることには間違いない。
「いやまあ、そんだけ除けば、最早別物だけどな……」
「ちょちょ、ちょっと待って下さいよナツキさ――うわっ熱っ!?　鉄が焼けてるんですかこれ!?」
　久方ぶりに帰ってきた日本の景色に、懐かしさ以上にその変わりように驚いていた所、後ろからその歩みを止める声が掛かる。露出した鉄骨をうっかり掴んでしまったらしい。
「何だ、いたのかオットー」
「オットー兄ィは影が薄いッからなァ。すぐ見失ッちまう」
「だからこの扱いなんとかなりませんかねえ!?」

＊

「……キュ、フォウ?」
「おはよう、フォウくん……それにマシュも」
「はい。おはようございます、先輩」
　人理継続保証機関フィニス・カルデア、その一室――藤丸立香のマイルーム。現在、第七特異点へのレイシフト証明待ち――第二次臨戦態勢で待機中。
　――何か、夢を見たような。
「先輩?　どうかしましたか?」
「いや……ちょっと。夢を……見た気がする」
「夢……ですか?　その、夢と言うと……」
　マシュの表情が少し翳(かげ)る。当然と言えば当然である。サーヴァン

トとマスターは同じ夢を見る。正しくは、夢を通じてマスターはサーヴァントの記憶を見る。
藤丸にとっては、それはマシュのものであったり、あるいはカルデアに数多くいる英霊達の誰かのものであったり。
――あるいは、厳窟王の時のような悪夢。
「そうだな……騒がしいって言うか、賑やかって言うか・・・ そんな夢だったような。どっちかと言えば、楽しい雰囲気の夢だったと思う」
「そ、そうなのですか？ でしたら、その……良かったです」
マシュの顔から緊張が抜ける。心配して貰えるのは嬉しいことでもあるけれど、夢を見たと言うだけでここまで心配させてしまうというのは、心苦しくもあった。
「マシュ、朝ごはんはもう食べた？」
「いえ、まだ朝食は食べていないのです。ですので、先輩とご一緒出来たらな、と。出来たら……でいいのですけど」
「もちろん。行こうか、マシュ」
にこっと微笑んで言う。それを受けて、マシュの表情も柔らかになる。それだけで、今日一日頑張れるというものだ。

＊

食堂へ行くと、ふわりと良い匂いが鼻腔をくすぐった。その匂いから献立を予想出来そうだが、何も考えずその匂いに浸っている方が幸せだった。
「おや、マスターにマシュ君。朝食かね？ もう少しで出来るので、座って待っているといい」
見ると、アーチャー、エミヤが厨房でその腕を振るっていた。戦闘時にも頼りになる彼ではあるが、キッチン担当としての印象の方が強い。
「おう！ 嬢ちゃんにマスターじゃねえか！」
声を掛けてきたのは、ランサーのクー・フーリン。エミヤと仲は良くないらしいが、エミヤの作る食事は気に入っているらしく、食堂では高い頻度で見かける。
「クー・フーリンさんも朝食ですか？」

「おおよ。アーチャーの飯は絶品だからな。ちょくちょく食いたくなるんだよ」
「……はあ。本来、サーヴァントに食事は必要ないのだがな」
「そりゃそうだけどよ、美味い飯はいいもんだろ？　それにお前さん、セイバーには喜んで作ってやってるじゃねえか」
「……く、それを言うか、貴様……！」
　仲は良くないと本人達は言うが、こうして傍から見ていると、むしろ仲が良さそうに見える。微笑ましい…　と言うと、怒られるかもしれないけど。
＊
「ん、やっぱり美味しい」
「はい、たいへん美味です。いつもありがとうございます、エミヤ先輩」
　ご飯も美味しい、そしてそれを美味しそうに食べるマシュの幸せそうな顔も可愛い。こんな最高の後輩がいる俺は本当に幸せ者だ。
「そういえばエミヤ、最近白米多め？」
「うむ。俵殿が来てくれたお陰で、食料の貯蔵量を心配せずとも良くなったのでな。それに、マスターも日本人だ。やはり、慣れ親しんだ白米の方がよかろう」
　俵さんが「美味しいお米がどーん、どーん！」と言っている様子が思い起こされた。エミヤの心遣いが胸にグッとくる。
　正直言うとカルデアに来る前は、朝食はパン派だったのだが。まあそれも、時間のない朝にサッと食べられるからなのだけど。
「あれ、管制室から通信だ……Ｄｒ．ロマン？」
『おはよう、藤丸くん。いきなりで悪いんだけど、今すぐ管制室まで来てくれるかな』
「はい、分かりました」
　なんだろう。第七特異点へのレイシフト証明が完了した――と言うには、ロマンに緊張が欠けていた。おそらく、別の問題だろう。
＊
「よく来てくれたね、藤丸くん。あれ、マシュも一緒だったのか。もし

や朝食の途中だった……とか？」
　管制室で微笑みとともに藤丸らを迎えたのは、ロマニ・アーキマン――通称、Ｄｒ．ロマン。アトラス院でホームズが言っていたことが気にかかるが、気にしても仕方がない。
「はい。先輩とご一緒にエミヤ先輩の朝食を頂いていました。その、たいへん心苦しかったのですが、残った分はタッパーに詰めていただいて……」
「温め直しても美味しく食べられるから、って言ってたね…　悪いことをしたかも。ロマン？」
「あわわ……これは悪いことをしちゃったぞう……うん、ごめん、反省します……」
　こんな、ちょっとしたことにあたふたしているロマンを見ていると、やっぱり、『どうしているのか分からないが、事件とは無関係の、別にいてもいなくてもいい傍迷惑な謎の人物』というのが、一番「らしい」と思う。
「ところでドクター、今回はどういった問題が？」
「……そうだね。じゃあ、本題に入ろう」

＊

　現在スバル達は、魔女教の権能への対抗策として、『賢者』シャウラと接触を試みようとし――ここ、プレアデス監視塔へと辿り着いた。
　が、肝心の『賢者』は目的の情報を持ってはおらず、それどころか、スバルを『お師様』と――『大賢人』フリューゲルだと言う。
　しかし、ここまでの苦労が徒労だった訳ではない。ここはプレアデス監視塔――またの名を、大図書館プレイアデス。その書庫に眠る情報を手に入れるため、スバル達は『試験』に挑む。
　三層『タイゲタ』の試験。
『――シャウラに滅ぼされし英雄、彼の者の最も輝かしきに触れよ』
　この試験を、スバルが元いた世界の知識――星座に関する知識を使い、見事切り抜けた。だが――、
　二層『エレクトラ』の試験。
『――天剣に至りし愚者、彼の者の許しを得よ』

初代剣聖、レイド・アストレアの登場。どうにかこうにか、彼から勝利をもぎ取ったと思いきや、認められたのは実際に戦ったエミリアだけ。

その後、ユリウスの件もあって――

「――邪魔するぞ」

首を振り、ユリウスへの配慮を打ち切ると、スバルは扉を押し開け、緑部屋の中へと足を踏み入れる。ぼんやり、淡い光によって照らされる室内は、相変わらず多量の緑に支配されており、蔦で編まれたベッドの上には二人の少女が寝かされている。

手前のベッドにアナスタシア、そして奥のベッドにレムの二人だ。

「そして、一番奥にはお前がいると」

「――――」

見舞いにやってきたスバルを見上げ、小さく喉を鳴らしたのはパトラッシュだ。漆黒の地竜は、まるでスバルがくることを知っていたかのように自然な態度。

おそらく、察しのいいパトラッシュはスバルがくるのがわかっていたのだろう。自然と、自分の寝そべる蔦の寝床を半分開け、スバルが座るスペースを開けている。

「お前ってヤツは本当に……傷も、だいぶよさそうだな」

苦笑し、スバルはパトラッシュの黒い鱗を掌でなぞった。

地下での餓馬王との一戦、その負傷の形跡も三日間の治療でかなり良くなっている様子だ。元々、パトラッシュは自分の不調をスバルに悟らせないようにするところがあるが、今回は強がりではなく、順調に回復してくれているらしい。

「本当に、この部屋の精霊様々だ。感謝してもしきれねぇや。この部屋がなかったら、どんだけ大変なことになってたかわかりゃしねぇし」

パトラッシュの負傷を幸いだったとは口が裂けても言わないが、アウグリア砂丘を乗り越えるための被害は最小限に抑えられたのは事実だ。

一行の負傷者はスバルとパトラッシュの二名だけ。それも、この緑

部屋の効果で無事に取り返せる範囲、上々以上の成果といえる。
二層の『試験』で負傷したユリウスとアナスタシアの治療も含め、緑部屋の存在には救われ通しだ。まるで、誰かがこのために誂えてくれていたかと思うほど。
「さて」
パトラッシュともひとしきり親愛を確かめたところで、スバルは一度、軽く深呼吸してから奥の寝台――レムの下へと向かった。
ベッド脇にスバルが立つと、しゅるしゅると音を立てて蔦が集まり、寝台のすぐ横に座るための椅子を作り出してくれる。
「至れり尽くせりにも程があるな」
緑部屋の精霊に感謝が尽きないと言ったばかりでこれだ。これではまるで、よくしてもらうためにおべっかを使ったみたいではないか。
そんなつもりではなかった、とだけ断り、スバルは寝台の横につく。
「レムが夜を焦がれた、なんてユリウスは言ってたが……」
それは間違いだ。
だって何のことはない。レムに、こうして誰にも邪魔されずに話せる時間を待ち焦がれていたのは、彼女の方ではなく、きっとスバルの方なのだから。

＊

「異常が見られたのは、特異点X――フユキだ。これまでも、異常がある度に、藤丸くんには何度か行ってもらってたんだけど……」
「今回は特殊、ってことですか？」
ロマンの言う通り、あの炎上汚染都市――冬木には、何度も異常があった。いや、異常というのなら、今現在も燃え続けていることこそが、最大の異常ではあるのだけれど。
「――ああ。それで、その異常なんだけど……」
「そこは私から説明しよう！」
「ダ・ヴィンチちゃん!?」
いきなり現れた万能の天才。しかし、それにも慣れたものだ。第六特異点では、ものすごく頼りになる姿を見せてくれた。――それだけ

に、自爆した時の絶望感も大きかったが。
「いかにも。万能の天才ダ・ヴィンチちゃんさ。さて、今回の異変だけどね――簡単に言うなら、ループしている」
「ループ・・・？」
「そう、ループだ。しかも周期が一定しない上に、今のところ明確な法則も見出せない。……このままループが続けば、シバへの負荷も強くなる。出来るだけ迅速に、異変の解消を頼むよ？」
「はい！」
身が引き締まる。今回は――いや、今回も、重要な作戦であることに違いはないのだ。と、ぐだぐだやらハロウィンやらの記憶を彼方へと忘却した。シバへの負荷が強くなるということは、第七特異点への証明を妨げる可能性もあるということだ。
「そう。聖杯探索（グランドオーダー）を円滑に進めるための作戦だ。つまり、これもまたグランドオーダーさ。しかし、今回は本当に特殊なケースだ。何が起こるかわからないから、マシュ以外にもサポート役として何騎かサーヴァントを連れていくといい」
「サポート役……はい、わかりました」
「作戦開始は1時間後だ。それまでにサーヴァントを見繕っておいてくれたまえ」

＊

――スバルが異変に気付いたのは、尋常ではない暑さに、額を伝う汗が目の中に入ったからだ。
慌ててそれを拭い、目を開けると――、
「寝てた、のか？　いや、それより――どこだ、ここ？」
今の今までスバルがいた緑部屋とは、全く違う景色が眼前に広がっていた。

第2話　「漸近する運命の交差」

「――ここ、もしかして日本、か？」

その予想に、明確な根拠があった訳ではない。なんとなく、倒壊している建物をみて、そうかもしれないと思っただけだ。日本以外という線も考えられたが――どちらにせよ、スバルの元いた世界だ。

「『試験』の一環…　いや、それにしちゃ急すぎる」

もともと、この試験は墓所での『試練』と似たようなところがある。なので、同じようなことが起こっても不思議はないのだが――、

二層『エレクトラ』の試験――

『――天剣に至りし愚者、彼の者の許しを得よ』

レイド・アストレアの許しを得る――その試験がまだ終わっていないのだから、新しい試験が始まるとは考えにくい。あの『棒振り』が、幻術かなにかを使って見せている夢、と考えれば試験内容と矛盾はしないが、そんな回りくどいことをするとは思えなかった。

「それとは関係なく、別の厄介事に巻き込まれた…　ってのが有力か？　いや――それより」

他の皆は、と辺りを見回そうとしたところで、スバルはあることに気が付いた。

――かしゃん。かしゃん。かしゃん。かしゃん。

「なん、だアレ…」

スバルが目にしたのは、死者への冒涜だった。既に死した者――骸骨が、歩き回っている。プリステラのことが思い出された。既に白骨化しており、元の人間が分からないのがせめてもの救い――とは思わない。

「う――うわっ!?」

骸骨の中の一体が、こちらに向けて矢を放ってきた。ギリギリのところで躱すことは出来たが――、

「気付かれてる、か。畜生」

岩陰、と言うよりは崩れた壁に隠れる。このまま、こちらへの関心を失って離れてくれるのが理想なのだが。

――かしゃん。かしゃん。かしゃん。かしゃん。
「近付いてきてるじゃねえか……！」
このままやり過ごすのは不可能と悟る。向こうがある程度近付いたのを見計らい、スバルは腰の鞭に手をかける。
「う、らぁ！」
思い切り腕を振りぬき――逃げるための時間稼ぎ、くらいに思っていた鞭の一撃だったが、思いのほか効果的だったようだ。骨の腕は外れ、地に落ちた。
「おらぁ！　もいっちょ！」
二回、三回と鞭の攻撃をぶつけると、骸骨はその活動を完全に停止した。そんなつもりはなかったが、『時間を稼ぐのはいいが、別にアレを倒してしまってもかまわんのだろう？』を、実現できた形になる。
「とと、油断はしないようにしねえと……」
周りに警戒しようとして――もう手遅れと気付く。囲まれている。弓を持った骸骨だけではなく、剣、槍を持った骸骨が、合わせて３０ほど、スバルの周りに集まってきていた。
――弓が、四方八方からスバルへと殺到した。
「がっ…」
動けなくなったスバルを、骸骨が蹂躙する。剣で斬られ、槍で突かれ、骸骨たちの重みで呆気なく潰された。
＊
サーヴァントを見繕えとの指示に従い、藤丸はカルデアの廊下を歩いていた。頼りになるサーヴァントが着いてきてくれればいいのだが。
「冬木で、ループ、か……」
「ヒヒヒ、そりゃまた、聞き捨てならない話ですねえ。マスター？」
「アンリマユ……久し振り、かな？『残骸事件』以来だっけ？」
残骸事件――そう呼んでいるのは、ある時冬木で起こった出来事のことだ。アンリマユによく似た微弱な霊基、アンリマユが自らの残骸と称したシャドウサーヴァント。それが、２０００以上も現れた事件だ。その事件は、アンリマユの協力を得て、無事に解決した。

「もしかして、今回もキミ絡み？　……そう言えば、ドクターが……アンリには、冬木限定で『死んでもやり直せる』スキルを持っていた可能性がある……とか言ってた気が」
「いやいや、違いますよ？　今回は俺とはなんの関係もないですって。いやホント。でも、確実にオレが役に立てる案件なのは間違いない。もちろん、連れてってくれますよね、マスター？」
「まあ……そう言うなら。でも、今回は他のサーヴァントも連れてくからね？」
「ああ、そこは問題ない。今回は、戦闘では役に立ちそうにないですからね」
と、それだけ言うとアンリはどこかに言ってしまった。「1時間後にはオレも行きますからねー」と言い残して。

＊

「――で、ここに戻ってくる訳か」
スバルの眼前に広がるのは、先程と変わらず炎上する炎の都市だった。今回のループは、この場所が舞台となるという訳だ。
死ぬ寸前の事を思い出そうとして、身震いする。生者を求めて徘徊する、死者への冒涜――その姿を思い出しただけで、死の恐怖が蘇る。
「と、ともかく、見つかんねえように……」
先程は暫く考え込むのに使っていた時間を、移動のために使う。崩れた壁などに隠れつつ、スバルは移動する。どこへ行けばいいのかも分からないので、闇雲に動くことになるが、動いていなければ前回と同様になるのは明白だった。
それにしても、暑い。燃えているのだから当然といえば当然なのだが、ここに来るより前と環境が大きく違っていることもあって、かなり体に負担をかけていた。
「……ふぅ、ひとまずこの辺にはいない、か……？」
かろうじて原型を保っている建物の中に入り、中に骸骨のような敵性存在がいないことを確認する。
「うわっ!?　だ、誰ですか!?」
――どうやら、先客がいたらしい。

「第一村人……というか、生存者か？　あー、俺は怪しいもんじゃなくて――いやちょっとまて」
第一村人、もとい第一生存者が、スバルを凝視する。同じくスバルも、その生存者をじっと見つめる。中肉中背、ギャルゲーの主人公ほどに長くのばされた灰色の髪。その見た目は、スバルのよく知る人物に似ていて――
「って、オットー!?　本物!?」
「ええ!?　ナツキさん!?　本物!?」
＊
「頼りになるサーヴァントか……」
アヴェンジャー、アンリマユがついてくることは決まったが、それ以外に――あと、一騎か二騎、頼りになる英霊が来てくれるといいのだけど。
冬木と言うことなので、縁深いセイバーオルタに頼んでみた。ダメでした。なんでも、ハンバーガー食いの新記録に挑戦するとか。いや、異常事態を優先してほしいんですけどね。オルタさんだから仕方ない。
強いサーヴァント、ということで大きい方の金ピカ王様にも頼んでみました。断られました。そりゃそうだ。
ラムセス二世にも頼んでみました。めちゃくちゃ強いひとなので。断られました。そりゃそうだ。
黒い方のジャンヌは――どうにか来てもらおうとして褒め殺しにしたのがまずかった。余計に怒らせてしまった…　まあ、戦闘時のほんの一時になら呼んでいいらしい。ほんの少しだけのデレである。
「ええと……あと聞いてないのは……」
指折り数えて、しかし数え切れるわけもないと投げ出す。もうすぐで1時間だ。早いところ、サーヴァントを見繕わなければ――と、食堂に顔を出す。朝飯時なので、何騎かサーヴァントがいてもおかしくはない。
「おうマスター。さっきの呼び出し、なんだったんだ？」
何人か、と思ったのだけれど、今日はクー・フーリンしかいないみ

たいだ。あとはカルデアスタッフさん達が数人、朝食をとっているくらい。
「えーと、それがね……」
＊
「オットー！　何してんだよこんな所で！」
「そりゃこっちのセリフですよナツキさん！　監視塔に行ってたんじゃないんですか!?」
　オットーの言う通り、スバルは――いや、スバルたちは、確かにプレアデス監視塔へ辿り着き、その試験に挑んでいる途中――だったのだが。
「俺だって、まだよくわかんねえんだよ……」
「ナツキさんもですか……話を聞いてみようにも、『言霊の加護』が効く相手がいなくて……」
「あの骸骨は？」
「意思がないみたいです。いくら呼びかけても反応がなくて」
　知り合いと出会えたのはいいが、あの骸骨相手に『言霊の加護』なしのオットーではあまり期待は出来ない。それと、あの塔にいたから飛ばされたと言うわけでもないらしいこともわかった。何せ、同行していないオットーが呼ばれているのだ。
「……なんか失礼なこと思ってません？」
「あん？　気のせいじゃね？」
　兎も角、何か行動を起こさないことには何も始まらない。あの骸骨たちに見つからないように周囲の探索をするのが、状況の打開に繋がるだろう。
「今んとこ、どっちも非戦闘員だからな。武闘派内政官はいるけど」
「それ、ナツキさんしか言いませんからね……？」
＊
「ほーん、冬木でねえ。いいぜ、俺がついて行ってやるよ。正直、暴れ足りなかったところだ」
　カルデアの兄貴分が、一緒に特異点Ｘに行くことに同意してくれた。アイルランドの光の御子が一緒とあらば、これ程心強いものもな

い。しかも、それだけではない。
「……話は聞いていた。私も同行しよう。本来ならば、私はそこのランサーと共に行動するなど御免なのだがね」
カルデアの厨房担当（アーチャー・エミヤ）も、一緒に来てくれると言うことだった。彼は、厨房に立っている姿ばかりが印象として強いが、やはりサーヴァント。戦闘時にも、多いに活躍してくれる。
「二人とも……！　ありがとう！」
＊
「サポートサーヴァント登録――アヴェンジャー、アンリマユ。アーチャー、エミヤ。ランサー、クー・フーリン。――登録完了。レイシフト証明を開始する」
淡々と、サポートサーヴァントの登録を告げるのは、ロマニ・アーキマンだ。普段ふわっとしている彼が真面目な雰囲気になると、こちらも身が引き締まる。
『アンサモンプログラム？スタート。
霊子変換を開始？します』
アナウンスが流れる。レイシフトをする度に聞いた、幾度目かになるいつものアナウンス。
『レイシフト開始まで？あと3、2、1……』
『全行程？完了（クリア）。
？グランドオーダー？実証を？開始？します』

第3話　「再会する純白の――」

「レイシフト、成功です。先輩、お身体は……」
「全然平気。マシュは？」
「平気です。デミ・サーヴァントですので！」
『両者のバイタル、正常。問題はなさそうだね』
　ロマニからの通信。ふわふわとした彼の声音は、特異点という異常な場所であっても、緊張が解れる。緊張感が無くなるのは困るのだけれど。
「ふむ。しかし、特にこれと言って異常があるようには見えないな。ランサー、そちらはどうかね？」
「ああ？　同じだよ。なんにせよ、辺りを探索しないことには始まらなさそうだ」
　エミヤ、クーフーリンの二人とも見解は同様。やはり、周囲の探索をする所から始めることになるか。ついでに、もう一人のサーヴァントの見解を聞いてみることに――
「あれ？　アンリは？」
「ここにいますよ、マスター？」
　ぬらり、と藤丸の影から影そのもののような、人型の黒いものが現れる。
「うわっビックリした！　影に溶け込まないでよ！」
「ヒヒヒ。ちょっとした悪戯心ですよ。でもまあ、影に潜んでたのがオレで良かったでしょう？　もっとヤベーもんが潜んでなかっただけ儲けもんでショウ！」
「フォウ!?　フォフォウ!?」
「おや、フォウさん。今回も、フォウさんは同行してくれるのですね。たいへん心強いです」
　同じく藤丸の影に隠れていたフォウくんが驚きの声を上げる。フォウの言葉はわからないけれど、おそらく「それはアンリが許される理由にはならないだろう!?」とかそんな感じのニュアンスだろう。多分。大いに同意。あとマシュがかわいい。

「と、ともかくっ。辺りの探索に当たりましょう。今回の作戦（オーダー）は、謎のループ現象の原因究明、そしてその解決です。張り切って行きましょう！」
「うん。頑張ろう！」
＊
オットーと再会を果たしたスバル。が、状況が好転した訳ではない。むしろ、あの骨たちに見つかる可能性が高くなったと言えなくもない。
「はあ……最初に会ったのがオットーか」
「役立たずですみませんねえ!?」
「役立たずだなんてそんな。お前はエミリア陣営の頼れる武闘派内政官殿だろ？　頭から爪先まで頼りきりだっつの」
「というかそもそも、内政官って戦うものじゃないですよねナツキさん……？」
オットーの言葉を背に、建物の外をこっそりと窺う。見たところ、あの骨たちが近くにいる様子は見られないが――、
「なんだ、アレ」
「ちょ、ちょっとナツキさん!?」
――見てしまった。居ても立っても居られなくて、その場から駆け出していた。人影のようなものが多く見られた。早く避難させなければ。
「……ぁ？　これ、石像か？」
人の形をした石像が、数十体。いや、精巧に出来すぎている。人間が石になったと言う方が、まだ納得出来る。
「なあオットー、これ」
「石化した人間……ですかね。いえ、これだけのものを作れる職人がいる可能性も否定できるわけではないんですが」
「人間が、石化……」
衝撃を与えれば、すぐに砕け散ってしまいそうだ。ちょうど、凍らされて砕かれたスバル自身のように。――身震いがする。過去のこと、それも死に様を思い出すものではない。

「――ナツキさん！」
「ああオットー、すまん。いきなり飛び出しちまって」
「そうじゃありません！　後ろです後ろ！」
「後ろ――？」
　焦った様子のオットーの言葉を受け、後ろを振り向く。そこには――影が立っていた。大きめの人のようなカタチをした、揺らめく影。
　直感で、それが恐ろしいものだと分かる。ともすれば、あの腸刈り（エルザ）とも変わらぬ――、
「がっ、ごふ」
　その刹那だった。その影の手から、鎖に繋がれた短剣のようなものが、スバル目掛けて放たれていた。
「ナツキさん!?」
「油断大敵、ってことか……よ」
　胸に突き刺さった短剣に、どこか見覚えがあるような――という思いは確信を得ないまま、スバルの意識は途絶えた。

＊

　――かしゃん。かしゃん。かしゃん。
「敵性体、スケルトンタイプ複数！　迎撃します！　マスター、指示を！」
「よし来た！」
　マシュが盾を持ち上げ、エミヤが双剣を手にする。クーフーリンが槍を構え、アンリマユは足を交差させ頭の後ろで手を組んでいる。頼むから働いてくれアンリ。
「マシュとクーフーリンは各個撃破しつつ時間稼ぎ！　エミヤは固有結界（無限の剣製）の準備を！　アンリは、アンリは……適当に！」
「はいはーい。じゃあ、ほかの皆さんが打ち漏らしたやつをちまちまと殴ることにしましょう！」
　アンリも、完全にやる気がない訳ではないようで安心した。それでも、積極的に動く気はないようだが。まあ仕方ない、自他ともに認める最弱英霊だ。
「先輩！　そちらに――！」

一体一体の強さは大したことはないようだが、やはり数が多い。マシュとクーフーリンでは捌ききれない分が、抜け出てきてこちらに襲いかかる。
「おぉら、よ！　マスターには手出しさせませんよっと！」
右歯噛咬（ザリチェ）でスケルトンの攻撃を受け止め、武器を絡めとる。左歯噛咬（タルウィ）でその武器を破壊。最後にアンリがスケルトンの頭蓋に蹴りを食らわせ、その動きを停止させた。
「ヒヒ。オレみたいな三流サーヴァントでも、これくらいはできるんですよ。マスターが気前よく種火と素材をぶち込んで、散々連れ回してくれましたからね！」
「ちょっと後悔してるって言ったら？」
「おおっと！　こりゃ名誉挽回のチャンス！　そこら辺の骨どもには、マスターに指一本たりとも触れさせませんよっと！」
アンリの動きが、ほんの少し積極的になる。しかし、それだけでは戦況は大きく変わらない。
「おい、アーチャー！　準備は終わらねえのか！」
「音を上げるのが早いなランサー。耐久、持久力には自信があるものだと思っていたが。私の思い違いだったかね？」
「言ってる場合か！　できるんならさっさとしろ！」
エミヤとクーフーリンは、こんな時でも通常運転だ。エミヤは普通に気のいいお兄さん、あるいは面倒見のいいお母さんなのだけれど、クーフーリンなど一部のサーヴァントに対しては、皮肉めいたことを言うことが多い。仲が悪いと言うわけでもないと思うが。
「私が、時間を稼ぎます！　真名、開帳――宝具、展開します！
『今は遙か理想の城（ロード・キャメロット）』！」
盾の少女（えいゆう）の呼び声に呼応し、白亜の城が現れる。穢れなき白。一切の傷無き壁が、波のように押し寄せるスケルトンを押しとどめる。
「長くは保（も）ちません！　ですから――」
「ああ。十分だ、マシュ君。あとは私に任せてくれたまえ――
『体は剣で出来ている（I am the bone of my sword）』」
エミヤの詠唱。覚悟と、彼が通ってきた道を表現するような言葉。

それを推し量ることも出来ないが――並大抵のものでなかったことは確かだ。
「Ｓｏ，ａｓ　Ｉ　ｐｒａｙ――『無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）』！」
景色が塗り替えられる。魔術の最奥、心象風景で世界を塗りつぶすもの。固有結界――『剣』の起源を持った彼の心象、無限に剣の突き立つ荒野。
「全投影連続層写（ソードバレルフルオープン）！」
無数の剣が空中に投影され、スケルトンへと飛んでゆく。突き立つ剣がひとりでに大地から抜かれ、スケルトンたちを葬り去ってゆく。
「こんな所か。戦闘終了だ、マスター」
固有結界が解かれる。元の景色へと引き戻されたそこには、既に敵性体（スケルトン）の姿はなかった。
「みんなありがとう！　お疲れ様！」
＊
「また死んだ、か」
胸のあたりをさすって、傷がないことを確認する。辺りを見回して、ここが最初の地点であることを理解。また死に戻りをしたことになる。
「オットーがあっちにいる、ってのは分かってるんだが」
考えなしに同じことを繰り返すのは、スバルとしては避けたかった。ひとまず、オットーがいた方向とは真逆の方向に向かう。もしかすると、知っている人物が他にもいるかもしれない。
――かしゃん。
「おっと」
何度目かに耳にする音。その音が聞こえる方向を確認し、壁を上手く使って骨の群れに存在を悟られないようにする。どうやら、それほど感覚が鋭敏という訳でもないらしい。
音が遠くに離れたのを確認、駆け出す。できるだけ距離を取って、出来れば二度と出くわしたくない。
「はぁ、はあ」
ある程度走ったところで、一休みして深呼吸。焼け付くような空気

が一気に肺に入り込み、咳き込む。体力はそれなりに付いてきたはずだが、こんな酷い環境下ではやはり体力の消耗も早い。
「オットーは、1人で大丈夫……だよな」
あれで、オットーは存外にしぶとい男だ。そうでなければ、エミリア陣営で内政官になるようなこともなかっただろう。
「ふぅ、はあ」
もう一度深呼吸。熱気が肺を灼く。盛大に咳き込んで、少しでもマシな所はないかと近くの建物に入る。建物の中は比較的空気の温度は低い。それでも暑いことに変わりはないが。
「ん？　なんだあれ。白い毛布……クッション？」
建物の片隅に放置されている、白い毛布、あるいはふかふかのクッションのようなものを発見する。それなりに疲れてきたところだ。少しでも疲れを取れたらと思い、それに近付く。
――手を伸ばそうとして、気付いた。気付いた時には、もう手遅れだった。
「――あ」
もぞりもぞりと蠢動する白い毛の塊。毛布などではなく、握り拳ほどの大きさの白い小さな毛玉のようなものが、一箇所により集まってそう見えていただけ。
ひとつひとつの白い毛玉それぞれが、赤い二つの丸い眼をスバルに向けた。その時点で、スバルの命運は定まっていた。
「――が、っ」
どうして、と。なぜこれがこんな所に、と。そんなことを考える暇など与えてはくれなかった。それは――大兎。多兎、転じて大兎。あの時確かに全滅させたはずで――
「――――」
その場に倒れ込んだ時点で、声帯は既になかった。ぷすりぷすりと、情けなく空気が漏れ出るだけ。両の腕、両の脚から伝わってくるＳＯＳ（げきつう）に、意識を手放すことも許されない。
痛みは、時と共に無くなっていく。否、痛みを感じていた部位が無くなっているだけだ。痛む部位は少しづつ腕、脚から胴へと移動す

る。
肉が抉られる。骨が齧られる。脳が焼け付くほどの痛みに、思考が白く染まる。
「――――」
叫ぶことも出来ない。気絶さえできない。その痛みを甘んじて受け続けるしかなかった。痛い、痛い、痛い、痛い。「痛い」がゲシュタルト崩壊を起こし、感じなくなる。その脳をさらなる痛みで殴りつけられ、思考が正常に戻る。痛みに正面から向き合わせられ、またも思考は狂乱に堕ちる。
「――――」
口腔内を食い尽くしたものが、喉から体内に侵入する。食道の壁を齧りながら、胃にたどり着き内側から喰い破っていく。
腕を食い尽くしたものが、そのまま胴を食い漁る。骨も肉も隔てなく、平等にこの獣の食欲を満たす食料にすぎない。
脚を食い尽くしたものが、肛門から侵入し腸を貪る。被食物に尊厳などなく、ただただひたすらに食い荒らされるのみ。
「――――」
目を喰われ、耳を喰われ、脳髄を喰われ、腕を喰われ、脚を喰われた。喰われている、喰われていく。
そこにあるのは、最早ナツキ・スバルなどではない。ただの肉片。兎の群に貪り食われるものである以上の意味など、その肉片には存在しなかった。
＊
「どう？　何かあった？」
「いえ。現時点では、ループ現象の原因となるような異変等は発見できません」
エミヤ、クーフーリン、マシュ。それとアンリがいてくれるので、藤丸の身にさほどの危険は今の所はない。しかし、異変が見つからない。これまでと何ら変わらない、燃え続ける街があるだけだ。
「うーん……あれ、うさぎ？」
ぴょこぴょこと体を動かす白い毛玉。それをうさぎだと気付いた

のは、やはりその大きな耳が特徴的だったからだ。
　長い二本の耳に、白くふわふわな毛並みを持つ小動物。赤い二つの丸い眼が特徴的で、もそもそと口を動かしながらせわしない仕草であたりを見回し、藤丸を見上げると小さい頭を傾けて、高い声で鳴いてみせた。
「フォウウウウ……」
「あはは。心配しなくてもマスコットの座を奪われたりしないって」
　フォウがうさぎに対して敵意のようなものを向ける。確かにうさぎは可愛いけれど、フォウくんはフォウくんだ。カルデアのマスコットにして頼れるランナー。彼の地位が揺るがされることはないだろう。
「兎か。それもかなり小さいな。よくもまあこの炎上都市で生き残っていたものだ。どこかで飼われていたのが逃げ出したか？　いや、ここにはもう人は住んでいないんだったか」
「うさぎって、けっこう可愛いですよね。俺、小学校で飼育委員をやってた時は一度も触らせてもらえなかったんですけど……ほら、おいでおいで」
「おいおい、不用意に近付くんじゃ……」
　ちょいちょい、とうさぎに手招きする。うさぎは小さな赤く丸い眼をこちらに向けると、またも高い声で鳴いてみせた。クーフーリンの制止はあったが、既に手遅れ。兎は藤丸へ向けてぴょん、と飛びつき

――

「ガ――」
　藤丸の口から、声が漏れ出ていた。

第４話「魔術礼装・カルデア戦闘服」

「ガ――」

飛びついてくる白い兎。その目はやたらと殺意(しょくよく)に満ちていて、その鋭い牙を藤丸に向ける。そう気付いた時には、もう間に合わ――

「――ンド！」

間に合わ――なくなる所だった。藤丸がそれに気付いたのは、ある種の直感、あるいはここまでの経験ゆえか。咄嗟に礼装を起動し、『ガンド』を目の前の兎に向かって撃ち込んだ。

カルデア戦闘服を着ていて良かった、とつくづく思う。カルデア技術の粋を集めて作成された戦闘服。ルーン魔術を利用した『ガンド』は、他のエネミーと同様に、目の前の兎の動きを縛り付けた。

「はぁ、はあ・・・」

額から玉のような汗が零れ落ちる。一瞬、死すら覚悟したほどの殺気。ガンドが遅れていたら、腕が無くなっていてもおかしくなかった。

「不用意に近付くなって言ったろ、マスター。だがまあ、悪くない反応だった。無事に済んだってならそれに越したことはないだろうよ」

そう言って、クーフーリンは動けなくなっている兎を槍で一突き。小さな断末魔とともに、その場に小さな血溜まりが出来た。

「すみません、先輩。私がついていながら、あれを危険なものと気付けませんでした。動物が冬木(ここ)で生きている、と言うだけで十分に警戒に値すると言うのに・・・」

『いや、それはこちらにも非があるよ、マシュ。済まなかった藤丸くん。こちらでも、あれを危険なものと判断できなかった。藤丸くんの咄嗟の反応がなければ、ここで終わっていてもおかしくなかった』

確かに、飛びついて牙を向けてくるまで、ただの兎と同様に見えていた。あれが危険なエネミーだとは到底思えなかったが、カルデアの探知でもそうだったのか。

『うん、あの兎自体は大して強い訳じゃない。魔力反応は本当に微弱で、その特異点に満ちる魔力で掻き消される程度だ。でも今回は不意

打ちみたいなものだったからね』
「しぬかとおもった」
『・・・ 本当にごめん。とりあえず、あの兎は解析に掛けておくよ。結果が出たら知らせるから』
＊
意識が戻り、一番に脳裏に浮かんだのは死の直前の感覚だった。身体中が食われていく感覚。自分の体が、ただの肉片へと貶められていく感覚だ。
「う・・・ ぶ、おえ」
腹の中のものを全てぶちまけ、それでも足りないと胃液を絞り出す。それに伴う痛みなど、死ぬ間際の痛みに較べてしまえば、無いも同然だった。
「何、で・・・ アレが」
忘れられない。忘れるはずもないあの姿。大兎。多兎――転じて大兎。スバルと、ベアトリスとで殲滅したハズの魔獣。ベアトリスが溜め込んでいた魔力を全て使い切ってまで殲滅したアレが――なぜ、こんなところに。
「・・・ クソ」
口に付いた胃液を袖で乱暴に拭う。うじうじ考えていても仕方がない。ともかくこの場所を動かなければ。それから、さっきの場所には二度と行かないように。
「せめて、誰が来てるのかさえ分かれば・・・」
頼りになる奴と合流出来るのに、と。現状スバル一人ではほとんど何も出来ない。相手があの骨だと、一体ならばともかく複数に囲まれると、
「囲まれる、と――」
――かしゃん。かしゃん。かしゃん。かしゃん。かしゃんかしゃんかしゃんかしゃんかしゃかしゃかしゃかしゃかしゃかしゃかしゃかしゃかしゃ。
「ぐ、が・・・」
油断、していた。この場所に留まっていればすぐに囲まれるという

事実は、ここに来てから全く変化していないと言うのに。
蹂躙される。
骨の波が、ナツキスバルを呑み込んでいく。
＊
「召喚サークル、設置します」
マシュの持つラウンドシールド、円卓由来の盾を起点として、召喚陣が敷かれる。カルデアとの物資のやり取り、藤丸の使役するサーヴァントの『影』の召喚などを円滑にするためのものだ。
「あれ？　前にも設置しなかったっけ？」
「はい。ですが、以前設置したものは既に効果を失っているようなので」
単に時間経過による劣化か、それとも常に炎上しているこの特異点の性質ゆえか。ともかく、これでさらなる戦力の向上が見込めるという訳だ。
「・・・　その、エミヤさんにクーフーリンさん、・・・　あと、アンリマユさんがいらっしゃるのは心強いのですが、やはりできるだけ戦力は多い方がいいかと・・・」
「なに、正しい判断だ。気にする必要はない。我々だけでは、マスターを守りきれる保証はないのでね。もちろん、最善を尽くしてはいるが」
「いつもありがとう、エミヤ。頼りにしてるよ」
戦闘面もそうだが、主に食事に関して。エミヤがいてくれるおかげで、いつも美味しい食事ができている。長いグランドオーダーの旅、その精神を支えてくれているものの一つだ。それ以外だとマシュの笑顔とか。
『――話の途中ですまないが、スケルトンの群れだ！　それだけじゃない、後ろにシャドウサーヴァントも控えている！　くれぐれも、油断はしないようにね！』
と、そんな所にロマニからの通信が入る。
「よし！　じゃあ・・・　戦闘だ！」
今回のレイシフトでは初の、サーヴァントの影を使役する戦闘だ。

先程までとは別に、さらに影たちへの指示もしなくてはならない。より早い頭の回転が求められる。

＊

「今回、難易度高くねえか・・・？」

スタート地点から既に死の危険が潜んでいるので、死に戻りをして直ぐに行動しなければならないようだ。いや、わかり切っていたことではある。単に、その前の『死』があまりにも酷いものだっただけで。

すぐに移動を開始する。あの場所に限らず、1つの場所に留まっていれば死は免れない。早いところ、誰か戦闘を任せられる者と合流しなければ。

「いつにも増してキツいな・・・」

生存の難易度、死に戻りと死の間隔が短いのもそうだが、何よりこの環境が辛い。常に燃えているこの空間は、呼吸も辛く体力の消耗が早い。

同じ場所には長くとどまれないのに、こまめに休憩を取らねば普通に倒れてしまいそうだ。

「・・・オットーと合流するか？」

現在、居場所が分かっている者はオットーのみ。というか、それ以外の人物はここに居るのかすら分からない。であれば、わかっているオットーと合流した方がいいのでは。

切り抜けられるかということ以前に、そろそろ精神的に不味い頃合いだ。独り言ばかりだと思考がドツボに嵌る。

「なんにしろ、早くここを動かないとな」

とりあえずはまだ行っていない方向へ。オットーと合流するのは、もう少し周りを探索してからでもいいだろう。

――かしゃん。

「おっと」

音の聞こえた方とは逆の方向へと進路を変える。何度も殺されたせいで、小さな音でも聞き逃さないようになってきた。ちょっとしたトラウマみたいなものだ。

――かしゃん。

「今度はあっち側へ…」
――かしゃん。
「今度は…」
音が聞こえる度に、それを避けるように進路を変える。あまりにもその回数が多かったので、最初の位置からどう進んだか把握できない。
「途中までは覚えてたんだがな」
がりがりと頭を掻き、独り言を零しつつまた耳が音を拾う。同じように、逆の方向へと進み――遂に、燃える建物ばかりの景色から解放される。
「おお…？　川、だ」
向こう岸を見れば、こちら側とはまた様子の違った建物の残骸が見られる。街を大きく二分する川のようだった。
「ん？」
流れる川を見渡していれば、もちろん見えてくるものがある。橋だ。さらによくよく見れば、その橋は――
「あの橋…　もしかするとここは…」

＊

「タイミング合わせるぞ、マシュ！」
「――はい、先輩！」
マシュが白亜の城壁（ロード・キャメロット）を展開するのに合わせ、影のひとつ――白き聖女（ジャンヌ・ダルク）が、同胞（リュミノジテ・エテルネッル）を守護する旗を発動させ、波のように押し寄せるスケルトンを押し留める。
「エミヤ！」
「いいだろう！」
エミヤが無限の剣（アンリミテッド・ブレイド・ワークス）を内包した固有結界を展開する。無数の剣による多方向からの攻撃は、スケルトンでは避けられない。
さらにその上から、もうひとつの影――サンタ姿（ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリィ）をした小聖女の、大量のプレゼント（ラ・グラスフィール・ノエル）が降り注ぐ。
「クー・フーリン！」
「任せな！」

呼び出した三つのサーヴァントの影、その最後のひとつ――竜の魔女（ジャンヌ・ダルク・オルタ）が、その宝具――憎悪（ラ・グロンド・メント・デュ・ヘイン）によって磨かれた魂の咆哮を、後方のシャドウサーヴァントに叩き込む。

さらにそこへ――

「その心臓――貫い受ける！」

クー・フーリンの呪い（ゲイ・ボルク）の朱槍が突き刺さる。霊核を貫かれたシャドウサーヴァントの霊基は砕け散った。

「へぇ、いやあやっぱり英霊のお歴々は凄いねぇ！　オレの出番が全くなかった！　なあマスター！」

「頼りになる仲間だよ。もちろんアンリもね」

「嬉しいこと言ってくれるねぇ！　んじゃ、どっかでしっかり役にたたなくっちゃあな」

スケルトンを全て打ち倒し、その後ろに控えていたシャドウサーヴァントも消滅した。ひとまずは戦闘終了だ。

「…」

「マシュ？　どうかした？」

「その、エネミーが…　いつもより多いような…」

確かにそうだ。この特異点にスケルトンが多くいるのはわかりきっていたことだが、これ程――波のように押し寄せるほどではなかった。

『うん。それに、攻撃性も通常のものより高い。今回の異常になんらかの形で関わっているのは確かだろうね』

「そう言えばドクター、解析の結果は出た？」

『ごめん。まだかかりそうだ。あの兎、どうにも特殊みたいでね』

明らかに普通の兎でないことはわかっていたが、解析の結果がすぐには出ないとなると、魔術的にも特殊なものということか。

『ともかく、こちらは解析を進めておく。君たちには、引き続き調査をお願いするよ』

第５話　「邂逅と衝突」

「・・・　む？」
「どうしたの？」
　ドクターロマンの指示に従い、特異点Ｆの探索を続けている中、エミヤが何かに気付き立ち止まった。
「妙なものを見つけた。私が先行して確認に向かうので、マスター達は後に続いてくれ」
『妙なもの？　こっちでは観測できてないけど・・・』
「本当か？　多少距離があるとは言え、あれほどのものが観測に引っ掛からないはずはないと思うのだが」
『そう言われてもなあ・・・』
　ドクターからは頼りなく弱々しい声が返ってきた。エミヤが何を見つけたのかは分からないが、ともかく近くに行って確認してみないことには始まらない。
　エミヤが先行し、それに続く形でクー・フーリン。その後ろにアンリマユが続き、更にその後ろにはマシュが藤丸を抱えて続く。
　冬木の街を駆けるサーヴァントたち。赤い外套を脱ぎ髪を下ろしたアーチャー、半裸短髪のランサー、ボロ布を着たアヴェンジャー、そして可愛い後輩シールダー。
　マシュは左手で盾を持ち、右手で藤丸を支えている。藤丸は両腕でしがみついており、必然的に色々と距離が近くなる。
　マシュの豊かな胸は藤丸の脚に触れており、顔はマシュの髪が揺れる度に藤丸の頬に触れるほど近い。
　マシュの綺麗な瞳に意識が行く。整った鼻筋、白くて柔らかそうな頬、距離のせいか妙に艶っぽく見える唇に、心を奪われる。そして、その視線に気付いたマシュが頬を赤らめる。
「そ、その、先輩、そんなに見つめられると・・・」
　――嗚呼、マシュが今日も可愛い。
「おいマスター、着いたぞ」
　クー・フーリン（ランサー）の声で、甘ったるい幻想（ユメ）から現実に引き戻される。

「嬢ちゃんとイチャイチャするのも結構だが、警戒は忘れるなよ？」
「・・・ 反省します」
マシュの可愛さのあまり、熱に浮かされたように冷静さを欠いていたようだ。いけないいけない。今までの特異点でもあったことだが、いいかげんに直した方がいいかもしれない。何せ次は古代バビロニア、神代の領域に足を踏み込もうと言うのだから。
「ええと、それで、これが・・・」
「ああ、私が発見した〈妙なもの〉だ」
目の前には地面に突き刺さった柱のような、あるいは地面から生えてきた樹のようにも見える、真っ赤で透き通った水晶（クリスタル）。
『こちらも、映像で確認できたよ。ただ――』
「ただ、何？」
『魔力反応が一切検知されない。こっちの故障って訳でもなければ、それが単なる工芸品や建築の類でもないのは自明なんだけど』
明らかに魔術関連のものであるのに、魔力反応が全くない――どういうことだ？
「だからこそ妙だと考えたのだが・・・ 何かわかるか？」
『うん。魔力の反応はないけど、その代わりに生命反応がある』
生命反応と聞いて、まさかこの水晶が生きているのか――と思いかけたが、すぐに改める。その水晶の中心あたりに、女性がいるのがわかった。
神秘的な雰囲気と、赤い水晶の中にあってもなお分かるほどの美しい銀髪。閉じられた瞼と睫毛が、その奥に秘め隠した瞳への探究心を掻き立てる。
そして、銀色の髪から覗く尖った耳が、彼女が只人ではないことを示している。であれば、この魔性じみた美貌も頷ける。
彼女は、この水晶に閉じ込められているのか。
「助けた方が・・・」
「待て、マスター。あれが危険なものであるから封印している、という可能性もある。あれがそうでないと断言出来ぬ以上、その提案には賛成しかねるな」

「・・・ごめん。軽率だった」
軽率だったのと、あの美貌にあてられたということもあるだろう。マシュ至上主義の藤丸にとって、マシュに勝る女性などいないとは言え、藤丸の理性を揺るがすには十分だった。
『生命反応も至って安定しているからね。眠っているようなものだから、すぐに救出しなくちゃ命に関わる、なんてことも無い。焦る必要はないと思うよ？』
ドクターの横で何かしらの作業をしているらしいダ・ヴィンチちゃんが、そう口を挟んだ。彼女・・・彼？　も、かなりの美貌の持ち主の筈なのだが、あまり魅力を感じないのはその精神性によるものか。
『うーむ。やっぱり、それ以外におかしな所は見当たらないなあ。とりあえず、探索を続――』
「が、るァァァァァ――！」
「!?」
突然、どこからか獣の叫び声のようなものが聞こえた。いや、獣っぽくはあるものの、人の声だ。誰かが、恐らくはあのスケルトンと交戦している。
「先輩、今の声は・・・！」
「ああ。人の声だ！　助けに行こう！」
「・・・はい！　マスター！」
声のした方へと走っていくと、驚くべき光景が視界に入った。二人の男を守る、一人の男の姿だ。
『ヒュウ！　凄いぞ彼、たった一人であの数のエネミーを押し留めている！　しかもあれはサーヴァントじゃない、生身の人間だ！』
「え・・・!?　で、ですがやはり、後ろの二人を守りながらでは押し留めるのが精一杯のようです！　加勢に入ります、マスター、指示を！」
マシュが信頼を寄せてくれていることを、素直に嬉しく思う。その信頼に応えられるだけのマスターに、自分はなれているだろうか。
「とりあえず・・・クー・フーリン！　投げる方のゲイボルクを集団のど真ん中にお願い！　敵を散らしてくれ！」
「おうよ！」

「令呪のサポートは？」
「必要ねえ！　行くぞ――『突き穿つ死翔の槍』！」
　敵の心臓を確実に刺し貫く対人宝具ではなく、多くの敵を標的とする対軍宝具。呪いの朱槍はスケルトンの数を減らし、更に軍団を前と後ろとに二分する。
　前の軍団は未だ高密度で三人の男に襲いかかっているが、後ろの軍団は比較的バラバラに散っている。
「アンリとエミヤは後ろの軍団、散ってるやつを各個撃破、お願い！」
「了解した」
「ほいほいーっと」
　長距離狙撃と近接戦闘どちらも出来るエミヤ、高い敏捷のアンリマユ。特にアンリマユは、前の『残骸事件』の時に、多数の雑魚を相手取った経験がある。
「俺とマシュで前の軍団を後方から叩く！　クー・フーリンは、後ろの軍団が前の軍団に合流しないよう、押し留めておいてくれ！　ちょっと無茶かもだけど、お願い！」
「ハ！　こんなもん、師匠のシゴキに比べりゃ無茶でもなんでもねえ！　任せとけマスター！」
　やはり彼は頼もしい。霊基がキャスターであってもランサーであっても、また若い姿やオルタであっても、彼の頼もしさは変わらない。
「マシュ、行くぞ！」
「はい！　突撃します！」
　マシュがスケルトンの背後へ突っ込んでいく。そして藤丸は、カルデアにいるサーヴァントの影を三体、召喚する。
　あまり広範囲の攻撃手段を持っているサーヴァントでは、あの三人を巻き込んでしまう可能性がある。規模が対軍以上の宝具を持たず、かつ多数の敵を相手取るだけの地力を持った英雄を。
「ビリー！」
　アーチャー、ビリー・ザ・キッド。
「書文先生！」

ランサー、李書文。
「・・・ 沖田さん！」
セイバー、沖田総司。
皆、派手な攻撃こそ出来ぬものの、強力なサーヴァントだ。今の状況に合ったサーヴァントを選び取ったと言えよう。
「そぅらッ！」
ビリーは得意の早撃ちで次々とスケルトンの頭蓋に銃弾を叩き込み、粉砕していく。その姿はさながら――否。早撃ちの代名詞たる彼を何に例えられよう。
「呵呵（カカ）！」
李書文は笑い声とともに敵を砕いてゆく。常に強敵との戦いを求める彼には、この戦いは物足りないかもしれない。眼前の敵を槍で貫き、背後から迫る敵には、槍から手を離し八極拳を喰らわせる。
「・・・ ッ！」
沖田総司は声も出さず、ただただ驚異的な速さでアサシンの如く敵を屠ってゆく。ぐっ、と踏み込み、一歩目で音を越える。二歩目で無間に至り、三歩目――絶刀。
有り得ざる速さの突きは、三段でありながら同時に繰り出される対人魔剣。三つの突きはしかし同箇所に存在し、事象崩壊を引き起こした切っ先はあらゆるものを消し飛ばす。
「ありがとう、みんな。お疲れ様！」
スケルトン達を倒し尽くし、視界が開けるとともに影のサーヴァントたちはカルデアへと退去していく。
驚異的なのはあの男だ。こちらが半分削る間に、もう半分を単騎で片付けてしまっていた。
「オォ・・・ てめェッが、親玉かァ――！」
「えっ、おい、ガーフィール!?」
金髪の、虎のような少年が、マシュに肉薄する。
「くっ――!?」
右の拳を咄嗟に盾で防ぐも、その膂力は圧倒的だ。強い振動が盾越しに伝わり、大きく後退させられる。発言から察するに、こちらがス

ケルトンの群れの後方から現れたため、敵の新手と勘違いしているらしい。
「先輩、どうしたら・・・」
「出来るだけ傷付けずに大人しくさせる！」
「ずいッぶん余裕かましてくれンじゃァねェか、あァ!?」
　再度拳が迫る。今度は咄嗟にではなく、盾を地面に固定、しっかりと踏み込んで盾を支える、完全な防御体勢だ。その拳を受け止め、微動だにしない。
「なァ――!?」
「了解しました、マスター！　峰打ちですね！」
「盾のどこに峰があるッてンだ、オォ!?」
　金色の虎が咆哮する。それだけで、非力な藤丸（マスター）は吹き飛ばされてしまいそうだ。
「く、先輩・・・！」
「盾に峰はないよね、普通」
「き、急に冷静にならないでください！」
　頬を染めるマシュは可愛いなあ――いや、マシュは頬を染めなくても可愛いに決まってるだろ――いやいや、そんなこと考えてる場合じゃない。
　そうしている間にも、相手は次の攻撃に移ろうとしている。

「ま、待て待て！　ガーフィール！」
「なンで止めンっだ、大将」
「その人たちは味方だ。気付いてなかったんだろうが、ガイコツの数減らすの、手伝ってくれてたんだよ」
　その言葉を聞いて、ガーフィールと呼ばれた少年は拳を下ろした。
「・・・すまねェ、頭に血ィが上（のぼ）ッてた」
　ガーフィールはこちらに頭を下げた。さっきまでの勢いがまるで嘘のようだ。
「いやー、マジ助かった！　サンキュな！　ここが神戸だって事までは分かったんだが、なんで燃えてんのか、なんでガイコツが闊歩して

んのか、ワケのわかんねえ事ばっかで…」
「いえ、助けになれたのなら何よりです。ですが、あの… 神戸、ですか？」
「おう！ 超人気ゲームの舞台、その元にもなった神戸大橋があったからな。すぐにわかったぜ」
「あの… 確かに、神戸にはあの大橋とよく似た橋があると、データベースで閲覧した記憶がありますが…」
「え!? 嘘、マジで？ 大恥じゃん俺ぇ！ 穴があったら入りたいーっ！」
　彼はそう言って、顔を赤くして恥ずかしがる。
「え、じゃあちょっと待って？ 神戸じゃないってんなら、ここはどこなんだ？」
「はい。ここは特異点F、日本の地方都市――フユキです」
「フユキ！ あーあーなるほどぉ。ここってばフユキだったのか。フユキ、冬木、冬木――」
　そう、口の中で転がすように、あるいは咀嚼するように、何度か繰り返し、そして。
「――冬木ぃ!?」
　心底驚いたように、再びそれを口に出した。

第６話　「禁則事項と在らざる手」

スバルは、急に与えられた信じ難い情報を前に、それを脳内で整理することに必死になっていた。
「待て、冬木って、マジであの冬木？」
「『あの』が何を指すのかは分かりかねますが……はい。ここは冬木で間違いないはずです」
大盾を携えた少女がそう答える。スバルとしては、確かに引っかかってはいたのだ――どこかで見たことがあるような、盾を持った少女。それから、彼女が後ろの少年を『マスター』と呼んだことも。
そこまで考えて、スバルは別のことに気付く。
「その、後ろにいるのって……」
後方の群れと交戦していた三人。スバルがガーフィールを諌めたあたりで、こちらに戻ってきていた。さして気に留めてはいなかったのだが、よくよく見れば気付くことがある。
まず一人は、赤い外套こそなく、髪も下ろしているが、その特徴的な眉の形、見間違うはずもない。
もう一人、青いタイツは全身を覆ってはおらず半裸で、短髪だが、何よりもその手に持つ朱（あか）い槍。
最後の一人に至っては、見たことのある姿そのままだ。
「アーチャーに、ランサー!?　アヴェンジャーまで!?」
もうこの時点で、ここが冬木であることも、サーヴァントが実在することも疑ってはいない。コスプレという線もないではなかったが、コスプレイヤーがあれほどの戦闘力を持っているものか。
「えっと……エミヤ達のこと、知ってるの？」
「真名呼びなのか!?　いや知ってるも何も、あの『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ』――」
ｎｉｇｈｔ、と続けようとして、それが不可能であることに気付く。世界が静止して――いや、静止しているのはスバル自身だ。
――どこからか、手が伸びてくる。
その手は、スバルの肉体を容易くすり抜けて、その一番奥、どくん

どくんと脈打つそれを。
――心臓を。
「――っ!?」
現実へと回帰する。体が動く安堵、解放感。それでも、苦痛はなお残った。
「嘘、だろ……？　禁則事項が増えてんじゃねえか……」
「大丈夫ですか!?　どこかお怪我でも……」
盾の少女がこちらを心配して駆け寄ってくる。だが、それどころではない。
「問題ねえ。心臓を握り潰された気がしただけだ。それより、またあいつらが来る」
――かしゃん。かしゃん。
スバルの『匂い』が強くなったからであろう。こちらへと向かってくる足音が、どんどんと増えてきている。
『気を付けてくれ、藤丸くん！　スケルトンの数はさっきほどじゃないけど、シャドウサーヴァントが複数体いるぞ！』
「了解！　迎撃だ、マシュ！　みんな！」
「はい！　戦闘準備、完了。行けます！」
少年の掛け声とともに、盾の少女とサーヴァント達が駆けてゆく。
「ガーフィール！　お前も……」
「おォよ、言われッなくてもやッてやらァ」
＊
そして藤丸は――三体の影を召喚する。
「百貌さん！」
――アサシン、百貌のハサン・サッバーハ。
「アヴィケブロン！」
――キャスター、アヴィケブロン。
「ゴールデン！」
――バーサーカー、坂田金時。
皆、対多数を相手にするのに長けたサーヴァントたち。スケルトンの群れを前に、その力を揮（ふる）う。

百貌のハサンは、その数を利用してスケルトンを各個撃破して行く。ただ、人格によって差があるようで、『怪腕のゴズール』『迅速のマクール』などは上手くやっているようだが、『基底のザイード』あたりは微妙だ。敵の攻撃を躱すことばかりに集中しないで欲しい。

アヴィケブロンの作った即席のゴーレムは、敵を撃破しては自壊してゆく。それでもその力は凄まじく、頼もしい。

「……ふむ。やはり即席ではこんなものか」

金時（ゴールデン）は、見ていて爽快だ。まるで無双系ゲームの如く、その鉞（マサカリ）――黄金喰い（ゴールデンイーター）で敵を薙ぎ払ってゆく。

「ゴールデン……タイフーン!!」

エミヤ、クー・フーリン、アンリマユ、マシュ。そして、ガーフィールがそれぞれスケルトンを倒して、数が少なくなってきている。そろそろ後ろのシャドウサーヴァントが出張ってくる頃合い。

それを見て、藤丸は魔術礼装に魔力を通す。

「礼装起動（プラグ・セット）――『オーダーチェンジ』！」

魔術礼装、カルデア戦闘服の機能の一つ――オーダーチェンジ。指定は百貌のハサン。令呪による転移とはまた違う、対象がサーヴァントの『影』であるからこそ可能となる、強制的な撤退と召喚の同時行使。

「ドレイク船長！」

――ライダー、フランシス・ドレイク。

「いける？」

「もちろんさね」

「よし。みんな、射線から退避！」

ドレイクの正面、数騎のシャドウサーヴァントとの間にいるサーヴァント達を避難させる。

「それで――令呪を以て命ずる、ライダー！　宝具、『黄金鹿と嵐の夜（ゴールデン・ワイルドハント）』を解放せよ！」

「あいよ！」

令呪による命令に、快活な声が返ってくる。

「う、ぐっ……！」

令呪を使ったことで、身体中の魔術回路を走る魔力。そして、それに伴う痛み。慣れてきてはいるが、痛みがなくなる訳では無い。
現れる黄金の鹿号（ゴールデンハインド）。そして展開される、船団の亡霊たち。
ワイルド（嵐）ハント（の化身）たるドレイクの号令に応え、船団は一斉砲撃。令呪の後押し（バックアップ）によるブーストを受けた、その圧倒的火力で敵を殲滅する。
残るは深手を負ったシャドウサーヴァントのみ。それも、エミヤ達やガーフィールがトドメを刺した。
「シャドウサーヴァントって、普通のサーヴァントと同じように、神秘のない攻撃は効かないはずだよね？」
単純に疑問に思った藤丸はドクターに問い掛ける。
『うん。魔力反応こそ無いけど、彼も何らかの神秘を行使しているんだろう。あるいは、彼自身が神秘の塊なのかもだ』
ドクターの言葉を受けて、ガーフィールの戦闘を思い出す。拳法を修めているという風ではなく、純粋に力強かった。魔術による身体強化でもないらしいとくれば、彼自身が神秘である、ということは納得できる。
「ともあれ、これで戦闘終了だ」

＊

「紹介が遅れて申し訳ねえ！　俺の名前はナツキ・スバル！　万物不当の一文無しにして、天地未踏の異世界帰り！　ってことで、ヨロシク！」
「ええっと……？」
『ふむふむ。興味深いね』
「興味深いって……何が？」
通信の向こうから、ダ・ヴィンチちゃんが話し掛けて来た。かの天才が興味を示すからには、なにか意味があるのだろう。
『異世界、それに、〈万物不当〉や〈天地未踏〉といった耳慣れない言葉。細かくはあるが、私たちの世界との相違点と……』
「やめて!?　俺の適当な発言を真面目に考察しないで!?　そんな言葉ねえから！」
「ダ・ヴィンチちゃん？　わかっててからかったでしょ……」

『さあ、それはどうだろう？』
　にっこりと、あるいは、にやりとしているようにも取れる笑顔。初対面からそんな対応をされると、藤丸としても困る。
「しっかし……」
『どうかしたかい？』
「いいや、なんでもねぇ。ある奴にちょっとばかし声が似てて、あんまり嬉しくない記憶を思い出しちまうってだけ」
『ふうん？』
　スバルの言葉にダ・ヴィンチちゃんはほんの少し疑問を浮かべるも、そこまで興味が湧かなかったのかそれ以上は詮索しなかった。
「えっと、オットー・スーウェンと申します。以後、お見知り置きを」
「あ、これはこれはご丁寧に」
　灰色の髪をした、どこか頼りなさげな青年だ。見た目から、どこか苦労人らしき雰囲気を感じる。ロビンフッドから不真面目さを抜いたらこんな感じかもしれない。
「俺様ァ、ガーフィール・ティンゼルだ。さっきは……」
「もう済んだことだし、気にしないで」
　ガーフィール・ティンゼル――彼の凄まじい強さは既に目の当たりにした。彼から受ける印象は、若くて落ち着きのないベオウルフ、といったところか。
「デミ・サーヴァントのマシュ・キリエライトと申します。こちらは、マスターの――」
「藤丸立香です。よろしく」
　カルデアを代表し、マスターである藤丸と、そのサーヴァントであるマシュが自己紹介。ぺこりと頭を下げ、その後で三人の顔を見やる。うち二人、オットーとガーフィールはまだ気を許していないようだ。
「デミ……？　ところで、アーチャー達のマスターは来てないのか？」
「……うん？　エミヤ達のマスターなら俺だけど」
「はぁ!?　普通サーヴァントは一人一騎じゃ……」
　彼は目を丸くして声を荒げる。そう言われても、藤丸からすれば

サーヴァントが一人一騎というのは、むしろ特殊事例だ。それこそ、孔明――を宿した、ロード・エルメロイⅡ世と共に行った１９９４年の冬木くらいのものだ。
「あ、いや、でも〈だがここに例外が存在する〉ってのはよくあることだしな……」
「あの、すみません。スバルさん、でよろしいでしょうか」
「え？　ああ。菜月（ナツキ）が苗字で昴（スバル）が名前。好きに呼んでくれ」
ブツブツと独り言を言う彼にマシュが話を切り出す。名前からして、彼も藤丸と同じく日本人のようだ。それはともかく、マシュはスバルに何か聞きたいことがあるようだ。
「では、スバルさん。サーヴァントをご存知のようでした。それから、フェイト、との発言。スバルさんは……私たちの、カルデアの英霊召喚システム〈フェイト〉のことを知っているのですか？」
「カル、デア……？　いや、俺は聖杯戦争を知ってる、ってだけだ」
スバルは、慎重に言葉を選ぶ。今回新しく追加された禁句（タブー）に抵触しないようにするためだ。
この禁句について、ある程度予測はついている。今までに発した言葉のうち、『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』だけが引っかかった。それ以外は全てセーフ。これを踏まえて考えれば、自ずと答えは見えてくる。
要は、この世界――Ｆａｔｅ世界、あるいは型月（ナスバース）世界について、それを虚構（フィクション）であるとする発言、いわゆる『メタ発言』となりうるものに規制がかかっている、と推測できる。
「聖杯戦争……それは、過去に一度冬木（ここ）で行われたという？」
「……一度？　いや、俺が知ってるのは、過去に五回あったうちの、第四次と第五次の聖杯戦争だ」
正直、この辺りの発言はスレスレだ。あまり詳しすぎると、禁句と判断されかねない。
「過去に五回……？　それって……」
「……はい。ロード・エルメロイⅡ世さんと共に行った、１９９４年の冬木。あれが、五回のうちの四度目だったかと」

この男、どうにも巻き込まれたただの一般人、という訳ではないようだ。どうにも底が知れない。
「ナツキ・スバル、あなたは一体……」
『はいはいまあまあ、その辺で。立ち話もなんだし、腰を落ち着けるところ……は、あるか微妙かな？　学校あたりは少しは落ち着けそうだけど、ともかく話の続きは屋内で。あんまり外で立ち止まってると、敵に囲まれるよ？』
とまあ、ダ・ヴィンチちゃんの助言で、話し合いは一旦中断することになったのだった。

第7話「盾の少年と盾の少女」

情報交換をする為に選ばれた場所は、学校だった。スバルの言うところによると、ここは穂村原学園と言うらしい。

「特異点、レイシフト、人理修復、魔術王、魔神柱……お前、ホンットにすげえ冒険してきたんだな!?」

それが、ざっくりとこちらの事情を話した際のスバルの反応だった。対して、向こうの事情を聞いたこちらの反応はと言えば――

『な、な、なんだってぇえ!? スバルくん、それってつまり、異世界召喚ってやつじゃないのかーい!?』

「異世界初見の俺みたいな反応だな……」

ロマニの反応が最も大きかった。それにしても驚き過ぎなような気もする。藤丸はこの世界に『魔術』なるものが実際に存在すると知った時の方がよっぽど驚きだった。

「え、ええと、ドクター? 何故そんなに興奮してらっしゃるのか、よく分からないのですが……」

『だって異世界だぞぅ!? ……いや、そうか。マシュは〈そういうの〉はあんまり読まないか。そういうボクも、そこまで熱狂的って訳でもないんだけどね。それより、現代日本人の藤丸くんがあんまり驚いてないのが意外だな』

「えっ、いや、だって俺の境遇も似たようなとこあるし……」

『うーん、わかってもらえないか……そういうファンタジー的な〈異世界〉の存在って、魔術的にけっこう凄いことなんだけど……』

ロマニに共感する人は少ない。魔術と『そういう文化』の両方に通じているのはロマニくらいのものだ。

「大将たちが何を話してんだかわッかんねエンだがよ、オットー兄ィはどうだ?」

「ざっくりとはわかりますよ。内容はぶっ飛びすぎてて理解が追いつきませんが。まあ、ここが大瀑布の向こう側であることは間違いなさそうです。……ナツキさんの大掛かりなドッキリとかでなければ、ですけど」

「大将の場合、それが割とありッそうだから困ンだよな」
「ですよねぇ……」
謎の集団と話しているスバルの背を見やる。同郷、同年代の相手ということもあって、心なしか、どこか楽しそうに見える。
「で、何なンだ、あいつら」
「世界を救う為の旅の一団、らしいですよ。あなたを止められるだけあって、実力もかなりのものです」
「……へェ、すッげェじゃねえか」
ガーフィールが眼を輝かせる。英雄譚を好む彼の事だ。あの一団は生きた英雄そのもの。ガーフィールの心も沸き立つというものだ。
「だから、さっきみたいなことはもうやめてくださいね。わかってやったでしょう？」
「なンだよ、バレてたのか。盾使いとあっちゃァ、一度はやってみたかったンでな」
「でしょうね。ナツキさんもわかってて話を合わせてくれましたから、後で謝っておいてください」

＊

「それで？　彼らが異世界からの賓客――正確には、彼だけは出戻りか。それはわかったが、彼が聖杯戦争を知っている理由はまだ聞いていないのではないかね？」
至極真っ当な正論がエミヤから藤丸に突き刺さる。そう言えばそうだった。話が弾んで脱線するのは藤丸のせいなのか、はたまたスバルのせいなのか。
「詳しいことは言えねえんだけど……千里眼みたいなもんだと思ってくれ。それで聖杯戦争を見たんだ」
「……ふむ。異世界由来の力、という訳か」
「まあ、そんなところだ」
口からでまかせで誤魔化す。禁則が掛かっている以上、スバルは適当なことを言っておくしかない。幸い、カルデアの一行にとって異世界は未知の領域だ。いくらでも誤魔化しようがある。
「んで、さっき言った通り俺達は気付いたらこっちに迷い込んで来た

んだけど、そっちはなんか目的があるんだろ？　俺達が帰る手掛かりになるかもしれねえし、手伝えることなら手伝うぜ」
『んー……ま、いっか！　巻き込むのは正直気が引けるけど、これだけ関わってしまったんだ。行動を共にした方がいいだろう』
　ダ・ヴィンチちゃんがスバルの提案を呑む。思惑としては、保護と監視、それと異世界への好奇心と言ったところだろうか。
『今回の目的（オーダー）は、ここ特異点Ｆで起こっているループ現象の原因究明と解決さ。観測領域が広がりすぎて観測機器に負荷がかかっていてね』
「ループ、現象……？」
『何か心当たりでも？』
「いや、その……」
　悪寒が背筋を伝う。心当たりしかなかった。どう考えてもそれはスバルによるもの。つまり、行動次第では彼らが敵に回る可能性もあるということ。
「そりゃちょっとシャレになんねえぞ……」
　ラインハルトを敵に回す程ではなかろうが、どっこいどっこいと言ったところ。勝ちの目が見えないことに違いはない。
「心当たりはあるっちゃある、けど今は……」
『語るべき時ではない、とか？　あっはっは、どこぞの探偵みたいなことを言うなあ！』
「いや、言ったのダ・ヴィンチちゃんだよ？」
　あのキャスターの顔が脳裏に浮かぶ。第六特異点、アトラス院で彼の言った言葉が今も引っかかってはいるが、今はそんなことを気にしている暇はない。
「同行者の隠し事なんていつもの事だし、そんなに気にしなくてもいいよ」
「……そうなのか？」
「うん。それより異世界の話をもっと聞きたい。俺も、特異点の話とかするからさ」
＊

「いやぁ、やっぱすげえなあ、お前。世界を救うってなかなかできる事じゃないぜ」
「スバルだって凄いよ、エミリアって人を王にする為に頑張ってるんでしょ？　俺にはそっちは出来そうにないよ。『何かを為そうとする』のと『それを阻止する』のは、やっぱり別の能力だと思う」
「そういうもんか？」
「そういうもんじゃない？」
＊
「楽しッそうだなァ、大将」
「ですね。あの調子だとまだかかりそうです」
「……そうッかよォ、じゃァ、少し行ってくらァ」
「え、ちょっと!?」
　立ち上がり、ずんずんと歩いていく。その瞳は真っ直ぐに盾の少女を見据えている。
「なァ、マシュ……だとか言ッたか？」
「は、はい。どうかなさったのですか？　え、と……ガーフィール、さん」
「その、なンだ……」
　空気が張りつめ、場に緊張が走る。黄金の虎と、清廉なる騎士を宿した少女が相対する。
「お、俺様の、師匠になっちゃァくれねェか！」
「……は、はい？」
　マシュが困惑の色を顔に示す。目の前で頭を下げる虎に、どう対応したものか、と慌てる。
「同じッ盾使いとして……！」
「なるほど。それは、盾だったのですね」
　マシュが、ガーフィールの腕に装着された金属具を見て、そう言う。だが、しかし。
「それが、盾……？」
「先輩、彼が盾だと言うのなら形状に関係なくそれは盾です。こればかりは、いくら先輩でも譲れません。盾とは心の有り様です」

珍しくマシュが熱くなる。藤丸はその意気に圧され、口を閉じる。
「立ってください、ガーフィールさん。いえ、ガーフ君！」
「お、おォ……」
「私が教えられることなどほんの少しですが、それでも教えを請うというのなら！」
マシュの意思が灼熱する。教えを請われるという、マシュにも珍しい体験が彼女を奮い立たせる。
「ガーフ君、盾のどこに峰があるのか、と言っていましたね？」
「あ、あァ」
「盾に峰があるわけではありません。心に峰があるのです、ガーフ君。盾とは心の有り様です。ですから、盾でも峰打ちが出来ます」
よく分からない理屈だ。それでいて、何故か説得力に満ちている。
「盾での峰打ちの仕方を教えましょう。私に教えられるのはそれくらいのものです」
「よッくわッかんねェけど、おォ。やッてやろォじゃねェか」
マシュとガーフィールが校舎の外へと出て行く。守りが薄くなるのは少しばかり不安だが、まあ他にも頼りになるサーヴァントが控えている。
＊
教室の窓から、校庭で何やら峰打ちの練習に励むマシュとガーフィールが見える。
「なんか、すまねえな」
「気にしないで。マシュもイキイキしてるし」
実際、あれ程イキイキしたマシュはあまり見られるものでは無い。それこそ、レオニダス二世を前にした時くらいのものだ。
「それはそうと、エミリアさんってどんな人なの？」
「なんだ、いきなりだな」
「スバルが王にしようと頑張ってるらしいから、ちょっと気になって」
「そうだな、エミリアたんは――」
＊
「それで――」

「ちょっと待ってまだ続けるの!?」
物凄い熱量でエミリアと言う人について語るスバル。その内容にはノーコメントとして、それだけ彼がエミリアを想っているのはわかる。藤丸にとってのマシュのようなものだろうか。それならば、これだけの熱もあって然るべきというものだ。
「ちょっと気になったんだけど――そのエミリアって人、もしかしたらここに来る途中で見たかもしれない」
「は？　え、エミリアも来てるのか…!?」
動揺が顔に浮かぶ。彼にとってはあまり好ましくはない状況、と言うことだろうか。確かに、大事な人に危ない目にあって欲しくはない。マシュに守られてばかりなのも、本音を言えばどうにかしたい。
「エミヤ、どう思う？」
「彼の話を聞く限りでは、あの水晶に封じられていた女性でほぼ間違いないだろう。となれば――」
彼女をあの水晶から解き放っても構わない、ということ。であれば、彼女を助け出さない訳には行かない。彼――スバルも、そのつもりのようだ。
「エミリアを助けたい。そっちの目的とは外れちまうかもしれねえが、どうか手を貸してほしい」
「もちろん！　いいよね、ドクター？」
『そうだね。正直、手掛かりは現状それくらいしかない。多少の危険は覚悟しないと』
エミヤやクー・フーリン、ダ・ヴィンチちゃんも異論はないようだ。マシュとガーフィールにも声を掛けて、すぐにでも助けに向かおう。
「よし、行こう！　エミリアさんを助けに！」
「よし、行くぞ！　エミリアを救いに！」

第8話　「サーキュレーション」

燃え盛る街を歩く。ただしこれまでと違い、明確な『助ける』という目的がある。それだけで、心は幾分上向きになった。
「オタク、ちょいといいかい？」
「どわぁ!?」
ぬるり、とスバルの目の前に影が現れる。アヴェンジャーだ。気配遮断というわけでもないだろうが、真っ黒な彼はそれだけで気付きにくい。
「な、なんか用か？　アヴェンジャー」
「わざわざクラス名で呼ぶ理由は――まあ、聞かないでおくとして、アヴェンジャーはオレ以外にもいる。真名で呼んでくれていいんだぜ？」
「ああ、アンリ、マユ……他のアヴェンジャーって？」
「まず反転聖女。第一特異点の話は聞いたろ？」
第一特異点――ジル・ド・レェの造った竜の魔女が邪竜を率いてフランスをめちゃくちゃにした、とか。
「ジャンヌ・オルタ……元々『ルーラー』とかいうクラスだったって聞いたけど、そもそもそのクラスも初耳なんだよな」
「へぇ、アンタの知識も完全じゃないのな」
「らしいな。知らないことの方が多いくらいだ」
スバルの知る範囲は第四次と第五次、アンリマユの話、それから月の聖杯戦争くらい。それ以外に関しては、全くの未知だ。
「で、そのルーラーだったオルタは、なんやかんやあってアヴェンジャーとしてカルデアに召喚されたとかなんとか。オレもよくは知らないんですけどね！」
からからと笑う影。ノリとしては割と喋りやすい方なのは分かるのだが、妙に引っかかるものがある。
「あとは厳窟王とかいうやつ？　なんかいつの間にかいたらしいし、殆ど姿も見せねえからカルデアでも知ってるのはマスターとオレらくらいで」

「厳窟王……って、マジか。モンテ・クリスト伯だろ？　確かに復讐者だな」
「お、なに？　割とそういうの詳しい感じ？」
「時間だけはいくらでもあったからな」
　何もしてこなかった期間も、まあ本を読んだりはしていた。ジャンルはお察しだが。それはそうと、彼は何故話しかけてきたのだろう。
　考えてもみれば、アヴェンジャー……アンリマユとは、共通項が多い。ノリの軽さとか、戦闘能力のなさとか、それと――
「あぁ、そうそう、ナツキ・スバルだったっけ？　オタク、もしかして死んだことある？」
　と。声の調子を変えずに、いきなり核心を突いてきた。
「……いやいや、なんでそんなこと」
「んー、なんでって言われると困るんだが……雰囲気とか、目とか？　なーんか、『死』を知ってるって感じだ」
　そう、ループ能力。スバルは『死に戻り』と呼ぶそれを、彼はあの『永遠の四日間』を。最も大きな共通項がそれだ。
　そして、彼らはそのループ現象を止めるためにここに来ている、と来た。あまりにも符号しすぎている。
「サーヴァント連中ならおかしくはないんだがな。例外はいるが、英霊の座に登録されるんだから必ず一度は死んでる。他の聖杯戦争の記憶があれば、プラスしてもう数回はあるか？　だけどアンタは英霊じゃないし、そもそもその程度じゃないだろう？」
「……っ、お前」
　同類の気配を感じ取った、あるいは同族のニオイを嗅ぎ取った、ということか。
「まあ、マスターには言いませんし、もちろん他のヤツらにも言わねえんで安心してくだサイ！　バレた時に話せる範囲で話せばそれでいいと思いますよ？」
　彼にとってはそこまで重要な会話でもなかったようだが――エミリアを助けに行く道中の無駄に気分が重くなった。似たもの同士な気もしていたが、そんな気も失せた。

＊

「――これが」

スバルは赤い水晶に掌で触れる。表面は滑らかで、炎の中にありながら割と冷たい。

エミリアに目を向ける。このように水晶に閉じ込められて――もしかすると、氷の中で眠っていた時もこんな感じだったのだろうか。

「つっても、氷じゃねえから溶かすって訳にもいかねえしな」

そも、炎に包まれたこの環境で形を保っているのだ。たとえこれが氷であったとて、溶かすのは容易ではなかろう。

「ンなら、ぶち壊すッしかねェな」

「エミリアが傷つかないように頼む」

「おォよ」

ガーフィールは拳を握りしめる。踏み込んで大きく振りかぶり、その拳を水晶目掛け叩きつける。

「――あン？」

困惑の声を漏らす。当人にとっては、この一撃で破壊してしまえるつもりだったのだろう。しかし、水晶は僅かに罅割（ひびわ）れただけだった。彼の思うより、この構造物は丈夫なようだった。それだけではない。

「なんだ……？」

水晶が発光する。罅割れは徐々に修復されていき、数秒後には完全に塞がった。異様な光景に、一同は息を呑む。

『君たちの前方で、急な生命力の上昇を確認した！　閉じ込められている彼女のものじゃなく、まず間違いなく水晶そのものからの反応だ！』

「え――それは、どういう？」

てっきり、彼女が中にいるために、その座標から生命力が感知されているのだとばかり。それでは、その言い方では水晶が生きているかのようではないか。

『だけど、かなり不自然な生命力だ。本来はもっと複雑なものなんだけど、これはその一端を切り取っただけみたいな――』

その瞬間、水晶が一際強い光を放ち、ドクターの言葉が途中で遮ら

れた。
そして次の瞬間、赤い光線が皆を襲った。
かの聖剣（エクスカリバー）のような大きな光ではなく、何条もの細い光線が、それぞれの心臓を穿たんと迫る。
まずカルデアのサーヴァント達は――当然、自らのマスターを最優先に守護する。自らの身を守るのはその次。
藤丸、スバル、オットーは、自身を守ることさえ満足には出来ず、もちろん他を守ることなど出来ない。
そして、ガーフィールは自らの身を守り、その次に――スバルを守るか、オットーを守るか。
そんな問いを投げかけられれば、どちらを優先するのではなく、『沈黙』を選ぶべきだ――が、その状況が実際に目の前で起きていれば、何もせず動かない選択肢などない。
ただ、ガーフィールにとってスバルとオットー、どちらを優先するか、明確な答えは彼の中にはない。だから、彼がどちらかを優先したのであれば、それは別の要素によるもの。
だから、理由などそれだけ。
彼の方が近くにいた、それだけだ。
＊
「ナ……ナツキさん!?」
守られたのはオットーだった。さもありなん、カルデア一行に心を開いていたスバルと、それほどでもなかったオットーとガーフィール。必然的に、位置関係がそうなるのは当然の成り行きだ。
「う、ぐ」
胸に大穴が空いている。血がどくどくと流出し、どう見ても生きていられる量ではない。いや、それ以前にもう心臓が無くなっている。
きれいさっぱり、跡形もなく。
「くそッ……！　目ェ開けろよ、大将ォッ！」
ガーフィールが何かを――恐らくは治癒を――しようとして、しかしどうにもならない。
「スバ、ル」

目の前で起こったことに理解が追いつかない。心のどこかで、彼は大丈夫だと思っていた。なのに、なのに、こんなにあっさりと。
「もう、手遅れです。これいじょ――」
オットーが無為に治癒を続けるガーフィールを諌める。しかしその言葉は最後まで紡がれなかった。何故、と思って藤丸がそちらを見る。
「え……？」
止まっていたのはオットーの言葉だけではない。彼の身体も、いや、ガーフィールの体も、もっと言えば、この空間、この特異点全体が、カルデアの一行を除き、全てが静止していた。
『ループ現象！　新しい領域が構築された！』
「こんな時に……！」
一難去らぬうちにまた一難。藤丸は血が流れるほどに唇を噛む。何も出来なかった。何もやらなかった。守られていただけだった。悔しさで身が裂かれそうになる。
「マスター、気持ちは分かるが――」
「……ごめん。大丈夫」
エミヤがこちらを心配してくれる。いや、違うか。出来なかったことに囚われるな、カルデアのマスターとしての働きを全うしろ、という事。要はいつもの説教だ。
「……そうか」
エミヤの声がまた一段低くなる。失望させてしまっただろうか。彼にそう思わせてしまうのは、心苦しい。
「先輩」
「大丈夫だよ、マシュ。ちゃんとするから」
「ですが……」
マシュの表情が暗くなる。マシュはどんな顔でも可愛いし最高だけれど、そんな悲しい顔をさせてしまう自分に嫌気がさす。
『藤丸くん、こんな時で悪いけど――いいニュースと悪いニュースがある。どっちから聞きたい？』
「え、じゃあ……悪い方で」

『わかった。悪いニュースだけれど、さっきループ現象が起こったって言ったよね？』
「それは、はい。言いました」
ループ現象――ここに調査をしに来た目的。その原因の究明と解決の為に、ここに来ている。
『現在、君たちは最新よりひとつ古い領域に取り残されている。それで、ここからが悪いニュースなんだけど――』
現状、この時点で悪い状況なのだが、これ以上があるというのか。勘弁して欲しい。
『古い領域から順番に消えている。このままだと、古い領域に取り残された君たちが、その消滅に巻き込まれる可能性がある』
「……いいニュースは？」
『古い領域から消えてるから、これ以上シバに負荷がかからない、ってことなんだけど……』
絶望した。そんな状況でどうしろと言うのか。どうしようもない。
「その、ドクター。レイシフトは出来ないのですか？」
『この状態でのレイシフトは危険すぎるんだ。ノイズが多すぎて、意味消失の危険性が普段とは比べ物にならない。それしかないってなれば、まあやるしかないんだけど……』
「そんな……」
皆が絶望する中、一騎（ひとり）だけそうでない者がいた。彼はテクテクとナツキ・スバルの遺体に歩いていき、あろう事か大穴の空いた胸から、体内に手を突っ込んだ。
「アンリ、何を!?」
「まあ黙って見てなって。オレなりにこの状況を打開する手段があるってことですよ」
アンリマユという影が明確な人の形に変わっていく。赤いバンダナを身に付け、特徴的な刺青を身体中に刻んだ姿に。
そして、バンダナが解け、毛髪と刺青が青く発光する。
「――『四夜の終末』」

第9話　「クリスタル・セカンド」

「げほっ、ごえ」
　汗で霞む目を拭い、胸に手を当てて心音を確認する。今回は、あの赤い光に胸を貫かれて死んだらしい。
「――！　――！」
　ぼんやりと思い出す声。死に際に、必死になってスバルを治癒しようとしていたガーフィールの声。
「――ル！　――バル！」
　俺がオットーと固まって一箇所にいれば、あるいは――などと、益体のない思考をめぐらせる。
「……今回は、割といい感じだと思ったんだが」
　まだ目が霞んでいる。ぼやけた視界に、彼ら――カルデアの一行の幻が映る。ああ、あるいは。ここ、最初の地点で彼らがいれば、また違う展開になったのやも――
「スバル!!」
「うひぇっ!?　藤丸!?」
　がっしりと肩を掴まれている。スバルを呼ぶその姿は間違いなく藤丸だ。『死に戻り』をしたのであれば、彼がスバルを覚えていることも、この場所に彼がいるのもありえない。であるならば。
「……もしかして俺、死に損なったか？」
『いいや？　間違いなく君は死んだはずだよ？』
　虚空に問いかけたスバルに、思いもよらぬ方向から返答が飛んできた。
「え、と……ダ・ヴィンチ？」
　レオナルド・ダ・ヴィンチ――現界に当たって自らをモナ・リザに作り替えたとかいう変人。万能の天才、だと言うが。
『そう、ダ・ヴィンチちゃんさ。いやしかし、君がループ前の記憶を持っているとは意外――いや、私からしてみればそう意外でもないんだけどね？』
「……」

スバルには驚きだった。カルデアが『死に戻り』――『ループ現象』を、外から観測しているらしいことはわかっていたが、実際に自分以外に死に戻り前の記憶を持った者を見る、というのは不思議な感覚だった。

『さて』

その目に射竦められる。彼女――彼の前では、全てがお見通しな気さえしてくる。実際、わかっているのだろう。

『ナツキ・スバル――君が、このループ現象の原因で間違いないね？』

心臓がびくんと跳ねる。石かと思うほどに硬くなった唾を飲み込んで、ゆっくりと息を吐く。

「……なんで、そう思った？」

『なんでもなにも、ループ現象の話を出した時に心当たりがあると言っていただろう？　その時点で断定するとまでは行かなくても、疑うくらいはするさ』

「それは、まあ、確かに」

納得してしまう。誰だって、俺だってあの状況ならとりあえずナツキ・スバルを疑う。全く隠せていなかったわけだ。

『そもそも、藤丸くん達はどうやってそこに行ったと思う？』

「え……いや、どうやってって言われても……」

『君が死んで、藤丸くん達は時の止まった古い世界に取り残された。古い領域から消えていき、その消滅に巻き込まれるかもしれない――そんな状態だった』

「時が、止まった？　古い世界だって？」

死に戻りの原理は、まだよくわかっていない。単なる時間遡行なのか、平行世界移動なのか。しかし、カルデアという外から観測できる要素があれば、その原理を紐解くことも出来るのだろうか。

『まるで、君の死と同時に世界も死んでしまったかのようにぴたりと止まってしまってね。私達カルデアだけがそれに置いていかれた』

「なら、どうやって」

よく分からない。外から死に戻りを観測できるならば、そこに干渉することは出来るのではないか。それこそ――

「レイシフトとか言うやつか……？」
『レイシフトは危険度が高すぎて出来なかった。アヴェンジャー、アンリマユが――君の死体に、何かをした。現在、君達は同調している』
アヴェンジャーと目が合った。ぞわりと背筋に寒気が走り、冷や汗が頬を伝う。
「オレの中にあった『残り』と、オタクが上手いこと共鳴した。オタクがループ能力を使えば、オレ達も一緒に移動する」
「……使う？」
まさかとは思うが、またか。ロズワールの時のように、やり直しをしている所まではわかっても、それが『死に戻り』とまではわかっていないのか。
「だから、ループ能力は使わないで欲しい。出来ることがあるなら協力するから」
「藤丸……」
使わないで欲しい、と言われたってスバルにはどうにも出来ない。死に戻りは死に戻りだ。元々スバルの思い通りになるものでもない。
『あっはっは！　藤丸くんも酷なお願いをするものだ。スバルくんのその能力、操作不能（アンコントローラブル）なんだろう？　君の死がトリガーになってると見たが、どうだろう？』
「……それは」
『その反応は肯定と受け取ろう。　それから、言動にいくらか制約があるね？』
驚きっぱなしだ。天才というのは、こういうものか。それらしい人物には何人か会ったが、こいつは飛び抜けている。
『何かを言いかけて顔を歪めていたし、その後のエネミーの出現を言い当ててもいた。この二つ――何らかの苦痛と敵性存在の引き寄せが、制約を破った際のペナルティといったところかな？』
「……すげえな、ダ・ヴィンチちゃん」
『お？　初めてそう呼んでくれたね？　これで、ちゃんと協力関係になれると言うことかな？』

「協力、関係？」
　意外な言葉が出た。てっきり、これがバレてしまえば完全に敵対するか、保護という名目で監視下に置かれるか、だと思っていたのだが。
『君をこちらで保護できれば手っ取り早いんだけどね。レイシフトでは現地の人間を連れ帰ったりとか出来ないから』
「あ、そうなんだ……」
『君がこのループの原因なのは確かだが、君や君の仲間達がここに来ているのにも理由、原因があるはずだ。それを探るためにも、協力関係を結んだ方がいいと思うけど？』
　ダ・ヴィンチの言葉を受け、藤丸の顔がぱっと明るくなる。話して感じた印象通り、お人好しだ。俺と敵対するのが、それだけ嫌だったらしい。
　そして、その提案に対するスバルの返答はもちろん――
「願ってもねえよ。よろしく頼むぜ、藤丸」

＊

　スバルの情報を元に、探索を再開することに。とりあえずは、ガーフィールとオットーを回収し、エミリアさんを助けることが目標だ。
　スバルが死なないよう、護衛としてエミヤを付ける。彼なら、多彩な方法で守ってくれるだろう。
「……その、スバルさん」
「どうかしたか？」
「前回のことは、全て無かったことに？」
　沈痛な表情のマシュ。ああ、そうか。ガーフィールに教えていたことは、全て無かったことになる。その事に心を痛めているのか。
「……スバルさんは、こんなことを何度も？」
「慣れねえけど、慣れねえことに慣れた。これがなきゃどうにもならないことだってあったし、その辺は割り切って……」
　割り切ってる、だろうか。ただの強がりな気もするが。実際、割り切れてないことはままある。が、わざわざ言うことでもないだろう。
「お前達の旅だってさ、みんなの記憶に残らないんだろ？　なら、俺と似たようなもんじゃないのか？」

「で、ですが！　覚えていて下さる人は沢山います！　ドクターに、ダ・ヴィンチちゃんに、スタッフさんたち……それに、記録には残っているので、サーヴァントの皆さんも閲覧することは出来るんです！
ですが、スバルさんはたった一人で……！」
「……はは。なんか、新鮮だな」
これまで、死に戻りを知っているのはロズワールや、あの性悪魔女（エキドナ）くらいのものだった。
エキドナとの『茶会』で彼女に全て（死に戻り）を吐露して、助けられたこともあった。しかし、アレの裏には理解し難いものがあったのも事実。
だから、こんな風に言われることなんて――
「あ、れ」
涙が零れる。自分以外に死に戻りを知る者が現れることで、自分で自分の境遇を客観的に見てしまった。正直、割と辛い。こんな内容のラノベとかあったら途中で読めなくなるレベルだ。
「馬鹿か俺は。いや、馬鹿だ俺は」
乱暴に涙を拭う。自分の境遇なんて顧みてる場合じゃない。まだ、エミリアを助けられていないのだから。
「とりあえず、ガーフィールを回収しに行く。オットーはその後。んで、次にエミリアだ」
「オットーって人、ほっといていいの？」
「しばらくは大丈夫なハズだ。それに、今回はお前らのおかげで早く動けるからな」
スケルトン達から逃げ回らないでいいのが大きい。これまで無駄にうろうろしていた時間が無くなるのは助かる。
＊
「確か、この辺にガーフィールが――」
前回ガーフィールと出会った辺りの場所。しかし、前回と同じように出会うことは出来なかった。
「え……？」
そこには、ガーフィールの入った青い水晶が佇んでいた。

第１０話　「水晶破壊任務・青の壱」

「どういうことだ、これ……」
　青い水晶に囚われたガーフィールを、スバルはその目に映す。あまりにも前回とかけ離れた状況に、目を丸くする。
「前はこうじゃなかったの？」
「ああ、スケルトンをちぎっては投げちぎっては投げ、って感じだった」
　まさに文字通り、殴りつけてバラバラになったスケルトンの欠片をまた別のスケルトンに投げつける、なんてことをやっていた。そのはずだったのだが。
『私達が別の関わり方をしたことで結果が変わった、ということかな。ふむ……スバルくん、前回より遥かに早くここに辿り着いた、ということでいいんだよね？』
「ああ、間違いねえ。体感だが、二時間くらいは早いと見ていいハズだ」
『なら、その二時間の間に彼は自力でここから脱出した、とも考えられるね。まあ、私達以外の条件は変わっていない、という前提ありきの結論だが』
　ガーフィールに視線をやる。身動き一つ取れそうにないが、彼ならば内側から無理矢理にでも破壊してしまえるだろう、という確信もある。
「だとしても、ガーフィールはうちの大事な最高戦力だ。できるだけ早く助け出したい。次のための予行練習も兼ねて……」
「わかった。エミヤは引き続きスバルの護衛、クー・フーリン、マシュ！　水晶の破壊をお願い！」
「悪い、俺は偉そうに言っといてなんも出来ねえ」
「充分だよ。何も出来ないのは俺も一緒だ」
　令呪が熱くなる。カルデアとの魔力のパスが強く繋がり、サーヴァント達に魔力を回す。
　さらに、カルデアに滞在するサーヴァント達の戦闘（影法師）の側面をこの場

に転写する。影法師の影法師――純粋な『力』のみの存在。
それを使役する星見の影使い（カルデア マスター）、藤丸立香。
「さて、それでは私達は少し離れるぞ、スバル君」
「え――おわぁああ!?」
がっしりと、その太い腕で持ち上げられる。まるで荷物か何かのように、肩に抱えられた。お荷物なのは間違いないが、こういうことではない筈だ。
その瞬間、景色が目まぐるしく移りかわった。
跳躍。エミヤは、スバルを抱えたまま、地上から高層ビルの屋上へと跳び乗った。
「し、死ぬかと思った」
「おや。氷の魔術に乗って空を飛ぶ魔獣の背に飛び乗った――などと話していたので、この程度は平気と踏んだのだが、買い被りすぎだったか？」
「あの時は覚悟キメてたんだよ。今回はいきなりだったもんで、マジビビった」
「それは悪いことをした。詫びと言ってはなんだが、アレの攻撃からは完全に護り切ることを約束しよう」
そう言うと、アーチャー（エミヤ）は水晶の方に向き直り、剣を投影する。
「カラドボルグ……」
「投影武器すら把握済みか。空恐ろしいな、異世界の千里眼とやらは」
剣を矢につがえ、水晶目掛けて打ち放つ。宝具を一発限りの爆弾として使う、壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）。
あのヘラクレス（バーサーカー）でさえも一度殺して見せるほどの威力を持ったその一撃は――しかし、水晶に損壊を与えこそすれど、完全に破壊するほどではない。
水晶の自己修復がなされてゆく。それと同時に、アーチャーは盾を投影する。
「熾天覆（ロー・アイアス）う七つの円環（ス）……！」
ビルの屋上目掛けて放たれた二条の光線を、アーチャーの投影した盾が完全に防ぎ切る。

攻撃を受けると、自己修復と周囲にある生命反応への攻撃を行う、それがあの水晶の性質であるらしい。
ビルの下、藤丸達の無事を確認しつつ、アーチャーは次の攻撃に移る。
「やっぱ、すっげえ……」
アーチャーの矢が、ランサーの槍が、マシュの盾が、アヴェンジャーの短剣が、藤丸の操る影が、水晶の自己修復速度を超えて破壊していく。
わかってはいたことだが、それを――ガーフィールを助けるのを、ただ見ているだけというのは歯痒いものだ。
「……む？」
何かが、おかしい。アーチャーも同じことを思ったようで、疑問の声を漏らしていた。
「このペースなら、もう破壊できててもおかしくない筈だ。なんで……」
「修復速度が速く――攻撃も変わっている。自衛機構のひとつだろう」
一人一人を狙ってくる光線ではなく、無差別に撒き散らす光弾。防ぎにくいが、一発の威力は控えめだ。が、スバルなら十分に致命傷だ。気を抜いてはいけない。
「つっても、俺はアーチャーの後ろで震えてるだけなんだがな」
「そうも言っていられないな。修復が速くなっている以上、現状の魔力提供では少し心許ない。マスターの近くに寄る必要がある」
「つまり飛び降りろってことだな！　任せろ、パルクールの特訓で、高所から飛び降りるくらい――いや、この高さは無理だったあぁぁぁぁ！」
ビルの屋上を蹴り、足場を失ってから後悔する。この場の熱気とテンションとで熱に浮かされていた頭から、急激に熱が抜ける。
「あ、ああアーチャー、ちゃ、ちゃ、着地！」
「了解した。しかし考えなしだな君は。この高さからの落下もだが――『熾天覆う七つの円環（ローアイアス）』！」

七枚の花弁を持った花が、アーチャーとスバルの前で花開く。アーチャーが盾を展開したのだ。投擲物が相手ならかなりの強度を誇る盾。それが、スバルを光弾から守ってくれていた。
「落ちている最中の攻撃への対処も考えていなかっただろう。全く、守られている立場を忘れないで欲しいものだ」
「……悪いな。マジでそこまで頭が回ってなかった」
光弾を防ぎつつ、無事に着地。衝撃はなく、スバルの落下死は免れた。
「このままだと埒が明かない、一気に行くよ！」
藤丸の声を受け、サーヴァント達がその意識を一点――水晶に集中させる。そして、藤丸は強い意志を言葉に込め、呪文を唱える。
「礼装起動（プラグ・セット）――全体強化（ライジング）！」
サーヴァントの一時的な強化。カルデア制服を着ている時に使える『瞬間強化（ブースト）』に比べ強化幅は小さいが、その代わり自陣全体に効果がある。
魔力が迸る。サーヴァント達の目の奥がギラギラと輝き、攻撃対象を見据える。
「皆！　一斉攻撃だ！」
掛け声で空気が張り詰め、その空気は次の瞬間に爆発する。砂塵を舞い上げ、暴風が荒れ、影が踊り、骨子は捻じれ狂う。
視線と意識の集中、彼らの存在が混ざり合い、破壊を引き起こす光と化す。
圧倒的な熱量の眩い光が視界（まばゆ）を焼く。破壊の光は青き水晶を呑み込み、蹂躙する。
「――――ッ」
目の奥がチリチリと焼けるような感覚が止んで、後を引く光の残滓がしつこいことにうんざりしながら、瞼（視界）を持ち上（開）げる。
ほとんど破壊し尽くされた水晶と、剥き出しになったガーフィールがそこに見えた。少しばかり水晶に埋まってはいるものの、無理矢理引き剥がせてしまえるだろう。水晶が修復を始める前に、一刻でも早く助け出さなくては。

「――は？」
思わず、素っ頓狂な声が出た。それも致し方なし。ここまでやっとの思いで破壊した水晶が、一瞬にして元の形を取り戻したからだ。
「くっ、マスター！」
『全体強化（ライジング）』はしばらく使えないから、ええと……仕方ない、令呪を――」
エミヤの呼び掛けに、藤丸は令呪使用の決断を迫られる。
既に一画を消費してしまっており、カルデアにいる時であれば補充できるが、レイシフト先での令呪補充は基本的に不可能だ。慎重に使い所を選ばねばならない。
――今は、本当に令呪を使うべき場面だろうか。
「いや、待て！」
耳をつんざくような冷たく鋭い音が響き渡り、辺りは静寂に包まれる。
音の出処に目を向けると、水晶に大きなひび割れがあるのが分かった。まるで自らの存在を諦めたかのように、ひび割れは加速度的に広がってゆく。
最後に一際大きな音を立て、砕け散った水晶の欠片が光の粒子となり――ガーフィールへと収束する。
「た、大将ッ！」
水晶から解放された彼は、重力に従って下に落ちる。目を覚ましたガーフィールは難なく着地し、スバルを見つけると一も二もなく駆け寄った。
「なんッで大将がいンだよォ、大将は……」
「俺もお前も、遠い場所に飛ばされちまったらしい。んで、一人で途方に暮れてた俺を助けてくれたのがこいつらだ。今まで捕まってたお前のことも助けてくれたんだぜ？」
スバルがカルデア一行を指し示す。やはり、ガーフィールはこちらのことを覚えていない。本当に、ループ前の記憶は全く残らないのだ。
「おォ、よッくわかんねえが、ありがてェ。その礼に、俺様にできるこ

とがあンなら何ッでも頼まれてやらァ。『エシャレーアは恩を忘れない』ッてな」

「……ごめん、なんて？」

――ガーフィールが、仲間に加わった。

第11話　「漆黒の王、現る」

「コレで、ガーフィールが合流して、ついでにその辺にいたオットーも回収できた。って訳で、満を持してエミリアを助けに行こうと――」
「別にうるさく言うつもりはないんですが、僕はついで扱いなんですね……」
　文句を垂れながら苦笑を浮かべているのは、灰色の髪を伸ばした中肉中背の青年。名を、オットー・スーウェンと云う。
　ガーフィールを助け出した所から比較的近くの建物の中、隅で怯えて震えていた所をスバルが連れ出した。
「それはともかく、エミリア様を助けるって言うなら出来るだけのことはしますけどね。できることがあるかどうかは別として」
「おお！　そりゃ助かる！　頼りにしてるぜ、武闘派内政官どの！」
「それ言ってるのナツキさんだけですし、毎度のことなんですが向けてくる信頼が僕の能力と釣り合ってないと思いません!?」
　そんなことはない、能力に見合った信頼を向けている、むしろ足りないぐらい――などと思いつつ、口には出さずに曖昧に笑って受け流す。
　そこまでのことを面と向かって言うのは、少しばかり気恥ずかしい。
　掛け合いもそこそこに、一同は歩を進める。今度こそ、エミリアを助け出すために。
「待ってろよ、エミリア。俺が、必ず――」
　――お前を、救ってみせる。

＊

「は、あぁぁぁーっ！」
「オォ、ラァァーッ！」
　二人の盾使いが骨兵を薙ぎ払う。一人は乱暴に、本能の赴くままに。一人は大胆かつ繊細に、もう一人の盾使いをフォローするように。
　完全な連携とまでは行かないが、初対面のそれではない。当然だ。

ガーフィールにとってはそうでも、マシュにとってはそうではないのだから。
「盾使いッなんだな、あんた」
「はい、盾兵（シールダー）です。そういうガーフく、いえ、ガーフィールさんも盾を……」
「おォ、そうッだなァ。そっちァ、盾使いをシールダーって呼ぶのか。それァ、かっけェなァ」
「え、ええと……」
会話が上手く続かない。『前』の記憶を持つマシュと、持たないガーフィールのギャップが、会話のキャッチボールを困難にしている。
会話が上手く続かないのは、それだけが原因ではない。大量の骨兵への対応に追われているからだ。
「――――！　ちィ！」
骨兵の放った矢をガーフィールが打ち払う。一体一体の戦闘力は大したことないが、何しろ数が多い。
「――部分獣化ァ！」
叫んだ瞬間、急激に右腕が膨れ上がる。そう易々と使う芸当でもないが、この数に対応するために獣の血を覚醒させる。
「ッラァ！」
凶悪な爪を携えた獣の右腕が、大きく人振りされる。それだけで周囲の骨兵はバラバラに砕け散り、力の奔流はそれ以外の骨兵も大きく吹き飛ばした。
それでも、未だ数は多い。サーヴァント複数体とガーフィールがかりでも対応に追われっぱなしだ。
「なあオットー、お前でも何体かはどうにかなるだろ？　助けると思って行ってみない？　武闘派内政官だろ、お前」
「本気で言ってるならぶん殴りますからね!?　一体づつならともかく、あの状態に殴りこもうもんなら僕もナツキさんも一瞬でボロ雑巾ですから！　あと何度も言うようですがそれナツキさんしか言いませんからね!?」
「悪い悪い、冗談のひとつでも言わなきゃ心が押し潰されそうでな」

「だったら真剣な顔で言わないでくださいよ！　本気かと思うじゃないですか！」
　こんな状況でも、普段と変わらず話せるのが心の平穏をより強固にする。弦は強く張りすぎては切れてしまうものだ。
「……沈黙に耐えかねたのはわからないでもないが、もう少し緊張感を持ってはくれないかね。君達を守っているこちらの身にもなって欲しいものだ」
　そこに、アーチャーの言葉が刺さる。まあ、弦の張りが弱ければ音は出ない。気を抜きすぎてもいけないということだ。
　今は、骨兵の群れから少し離れた場所、かつアーチャーの背後で守ってもらっている。アーチャーは弓兵（アーチャー）らしく、弓と矢で骨兵を減らしている。
　双剣を得意とする彼なので、こんな風に狙撃に徹する彼は滅多に見られるものではない。その代わり、双剣を扱う姿があまり見られていないのがスバルとしては残念でもあった。
　そして、槍を振るうクー・フーリンと、何やら影を操っている藤丸。そして、敵をちまちまと一体づつ倒しているアヴェンジャー。
　皆の力が在って、スケルトンの群を退けるのにそこまで時間はかからなかった。
　だが、それで終わりではない。先程のスケルトンなどとは比べ物にならない殺気を放つ魔獣たちが、そこに佇んでいた。
「……気のせいか？　あれ、すっげー見覚えある気がすんだけど」
「気のせいじゃないですよ。メィリィさんはいないようですし、彼女の仕業ではないでしょうけど」
　クレマルディの聖域を中心とする一連の事件の時に、屋敷に攻め込んできた魔獣たちだ。
　その中でも最も大きな威容を放つ――『森の漆黒の王』。キマイラ、キメラと呼ばれるものに酷似した魔獣。
「ギルティラウ……」
　スバルは腰の鞭に手を掛け、その感触を指先で確かめる。ギルティウィップ――まさにあのギルティラウから、某ひと狩りゲームよろし

く剥ぎ取った素材から作られた武器だ。
「前にアレとあった時、なんか変なことやろうとして失敗してましたよね。粉塵爆発、でしたっけ？」
「なんで失敗したのか未だにわっかんねえんだよなぁ、あれ」
　無駄口を叩いていると、横からアーチャーが口を挟む。
「粉塵爆発に失敗したと言うのであれば、粉塵の密度が高かったか、低すぎたかだろう。それの起こる環境は限定的だ。素人が精緻な計算もなく意図的に起こせるようなものではない」
「あるいは、異世界の物理法則がこっちと違った、とかな」
「それもないとは言いきれないが、どちらにしても極めて危険な現象だ。もし成功していたとして、君が巻き込まれない保証はなかろう。二度とやらない方が賢明だ。君も、そんなことで命の価値を落としたくはないだろう？」
　自分の身を削る戦いはスバルの戦い方の基本で、そうしなければ届かないものがこれまでに沢山あって、これからもあるだろうことは想像に難くないが、調子に乗って現代知識で無双しようと言うのは軽率なようだ。
「まあ、あの時はそれ以外に選択肢が……」
「ありましたよね!?　結局油かけて燃やしましたよね!?」
「――そこまでにしておくといい。魔獣たちの殺気が濃くなったようだ」
　ピリ、と空気がひりつく。ギルティラウを初めとする多くの魔獣が、明確にこちらを敵と定めた。
「前回は、非戦闘員ばっかりだったんで搦手で何とかしたけど……」
　今回はガーフィールばかりか、サーヴァントという、戦闘のプロフェッショナル達がこちらについている。負ける気が、しない。
「数の力――思い知って貰うぜ！」

＊

　――最初にあったのは、静かな怒りだった。
　忌々しい炎に囲まれた地で、ただじっと待っていなければならない、などと。

何もかもわからない。なぜ、自分が炎を忌々しいと思うのかすらわからない。ただ揺れ動くだけの熱の塊。それに、なぜこれほどの憎悪を感じるのか、全くわからない。

なぜ待っていなければならないのか。誰かに命令された訳ではない。しかし、何かをここで待っている事が今の自分に与えられた至上命題だということは、本能で理解していた。

しかし、本能が理解しても理性がそれを拒む。わけがわからない。角を折られたわけでもないのに、本能に刻み込まれたかのように、その使命を呑み込もうとしている。

そして、角を折られたわけでもないのに、角は既になかった。初めから角などなかったのか、と思ってしまうほど。しかし、ありえない。

角があるのが正しい姿だという確信がある。であれば、角を折られた後に、記憶になんらかの干渉を受けた可能性もある。

カタカタと笑うような音を立てる者共の行軍が耳障りだ。ヒトと呼ばれるものとは違う、二本足で歩く脆き者たち。肉を持たない分軽く、簡単に吹き飛ぶ弱きもの。

――腹立たしい。

この身を満足させるほどのものが、ここにはない。

――腹立たしい。

あるのは、忌々しい炎、うるさい骨、そして取り巻きの小さな魔獣たち。

――腹立たしい。嗚呼、腹立たしい。

そんな影獅子を、退屈から救い出す突然の大きな音。それは、多くの骨が砕かれ、吹き飛ばされる豪快な音だった。

歓喜。

これこそが、この場所で退屈と戦いながら待っていた意味なのだと。

その足音で、相手が強者であると理解する。それだけに留まらない。圧倒的強者の足音が、いくつも。

刹那、迷いが生まれる。このまま戦ってしまえば、死が待っているのではないかと。

しかし、次の瞬間には怒りが込み上げてきた。何に対するものか、それは紛れもなく躊躇った自分への怒りだ。

退屈を殺してくれる者たちがやってきたのだ。それを、死にたくないなどという浅い思いで無駄にするやもしれなかった自分がどうにも許せなかった。

「――ルゥッ？」

その者達に飛びかかろうとした瞬間、この歓喜に水を差された。鼻に絡みつくようなおぞましい悪臭。強者たちのはるか後方に、その臭いを放つものがある。

――弱い。

足音を聞くまでもない。佇まいだけで、奴が弱者であることは明白だった。憎らしい。あのように馬鹿らしいほど弱い者が邪魔をするなど。

何よりもまず初めに、この牙でもってあの悪臭を放つ根源を噛み砕かねばならない。血を啜り、肉を喰い散らかしてやろう。

――覚悟するがいい。我の歓喜に水を差した報いだ。凄惨なる死に様を晒せ。

第12話　「アイスブレイク」

「あっさり終わりましたね……」
「ああ、そうだな。必死こいて何とか倒したのが馬鹿らしくなってくる」
　スバルとオットーは、倒れ伏した魔獣たちを遠目に、二人揃って並んで項垂れる。
「まさに『今一歩のギルティラウ』だァなァ」
「そんな言い方されてんのか、アレ……」
　ちらとガーフィールを見れば、どこか物足りなさそうに歯をカチカチと鳴らしている。しきりに何かを気にしているようで、たびたび視線が泳ぐ。
「……なァ、大将」
「いいぜ。向こうが許してくれるんなら、だが」
「……！　流石ッだぜ、大将。俺様が言う前ッからまるっきりお見通したァよ」
　ガーフィールの顔がパッと明るくなり、目はキラキラと輝きを湛える。くるりと方向転換して、小走りで目的へ向かっていく。
　その彼女（目的）を目の前にして、真っ直ぐに目的（彼女）を見据え、こう切り出した。
「俺様と、一戦交えちゃァくれねェか」
「ガーフィールさん？」
「迷惑だってなァわかってる。だっけどよォ……」
　マシュはふるふると首を横に振り、ガーフィールの言葉を遮る。もうこれ以上、言葉は必要ないと。
「いいえ、それ以上の言葉は必要ありません。ただ全力で打ってきてください、ガーフィールさん――ガーフくん！」
「オ、おォ！」
　断られるとばかり思っていたガーフィールは、突然のマシュの叫びに面食らう。だが、次の瞬間には口の端を吊り上げ、拳は固く握り締められ、身体は闘気に満ち溢れていた。

構えられた盾に、真正面から打ち込む。
「――ッ！」
本当に本気で、全力で打ち込めたわけではなかった。それでもまさか、盾が微動だにしないとは。
何のカラクリがあるでもなく、ただ純粋に、圧倒的な防御力によるものだということを感覚で理解して、驚きと歓喜とが湧き上がった。
全力ではないにしても、ほぼそのつもりで打った一撃。それを、こうも簡単に防がれてしまう。ならば、次こそは全力で――ではなく。
あの一撃を完全に防ぎきれるのならば。それを多少上回った程度では、結果はほとんど同じだ。
であれば、限界を超える――などと、脳筋一辺倒の考えをする男ではない。
頭に血が上ってこそいなければ、必要に応じて搦手も使えるのがガーフィールの強み。
全力で打ってこい、というのはつまるところそういうことだ。今できる全てを使って戦おう、と。
肉体が歓喜に震える。その震えが足の裏から地面へと伝わっていく感覚があって。そして、ガーフィールの『力』が発揮される。
「え……？　あっ……！」
突然、マシュの足元の地面が隆起した。体勢が崩れ、防御は不完全になる。そこへ、ガーフィールの追撃。
「オラァ――！」
「く――！」
盾で防ぐも、ガーフィールの一撃は不完全な防御で防ぎきれるほど甘くはない。　衝撃で空中へと吹き飛ばされる。
地面を隆起させたのは、ガーフィールが世界から与えられた加護、『地霊の加護』によるもの。地に足がついている限り、地の防護を受け、地面を操作する力。
「まだまだァ！」
マシュが着地、体勢を立て直そうとした瞬間に、もう一度足元を隆起させた。

だが、同じ手に二度も引っかかりはしない。地面がせりあがるのと同時にその地面を強く蹴り、跳躍。
「やぁぁっ！」
「ちィ！」
盾の重量に位置エネルギーを追加して、そのままガーフィールに突撃する。
「効ィきゃァ、しねェ！」
地に護られているガーフィールも、マシュほどではないが充分に固い。マシュの力は防御が主体。攻撃に割く力は少なく、地の防護を突破できるかは怪しい。
防御の面ではマシュが、攻撃の面ではガーフィールが、それぞれ勝っている。その相性の関係で、二人の戦いは千日手となる。
「ッらァ！」
ガーフィールの攻撃。ただの攻撃ではマシュを後ずさらせることさえ難しい。だから、攻撃の度にマシュの足元の地面を操作する。
目の前と相手の足元とに集中する。隆起に陥没、その場でより良い方を使い分け、バランスが崩れたところを叩いていく。
それでも、防がれる。後退こそさせているものの、決定的な一打は訪れない。
ガーフィールは前進しながら地面を操作し、そして拳を盾に打ち込む。マシュは後退しながら、不安定な足場に対応しながら、攻撃を防ぐ。
「――――」
洗練されていく。研ぎ澄まされていく。無駄が削げ落ちていき、本当に重要なものが存在感を増してくる。
一瞬。
時間が止まるような、そんな錯覚があった。今この時に全てを叩き込むのだと、本能がそう告げた。
「――部分獣化！」
腕が獣へと変じる。それまでのものとはまるで違う力を宿す、黄金の獣の腕。

「――――！」
マシュもまた同じく。不安定に変動し続ける足場に、適応しつつあった。
法則性があったわけではない。単に、動く足場でもしっかりと盾を固定、構えをとれるように、という心構えの問題だ。
――今回は言っていないが、マシュがガーフィールに言った、『盾とは心のありよう』。まさにそういうことだ。
ガーフィールの雰囲気が変わっていくのを見て、今までにないほどの攻撃が飛んでくることを覚悟する。動く足場に、それでも足を踏ん張る。
「ッらァァァァ！」
「――っ！」
獣化したガーフィールの右腕が、マシュの盾へ迫る。今までで最も強く、洗練された一撃。それを、マシュの盾は――防ぎきった。
どちらも今の精一杯を出した。その結果、ガーフィールの攻撃を、僅かながらマシュの防御が上回った。
堅固なる城壁を相手にしたような、強固な盾。その盾に自分の全力を防がれ、ガーフィールはその場に膝を落とす。
「がァあああァァァ！　ちィッくしょォが！」
「ガーフくん!?」
「わァかってらァ。俺様の負けだ、負け。俺様の盾より、アンタの盾の方が強固だったってこッたァな」
悔しがりながら、どこか満足そうに。
「はい。私の勝利ですので――ガーフくん！」
「あ、あン？」
「――私の弟子になってもらいます！」
その言葉に驚いたのは、ガーフィールだけではない。その場にいた多くの者が、多かれ少なかれ驚きを覚えた。
「私のことは師匠と呼んでください！」
「――し、師匠ッ！」
マシュもガーフィールも、どちらも晴れやかな表情を浮かべてい

る。前回と過程は違うが、同じところに落ち着いた。

＊

「とりあえず盾での峰打ちを――」

「あァ？　盾のどこに峰が――」

前回と同じようなやり取りをしているのが聞こえてくる。スバルと藤丸は少し目を見合わせて、顔をほころばせる。

「……っと。気を抜いてばかりもいられねえな。もうすぐだ」

「そうだね。今度こそ……！」

少し先に赤い水晶が見えてきている。あれが攻撃してくることもわかっているし、イレギュラーではあったが、水晶戦は既に一度突破している。

「私はこの辺りから狙撃に徹するとしよう。ナツキ・スバルとオットー・スーウェンの護衛も任せておけ」

「それは助かるが……大丈夫なのか？」

「三人分の攻撃を防ぐのは難しいでしょ。そっちにアンリを付けるよ」

「え、オレ？」

いきなり名指しされたアンリマユが驚く。水晶破壊の攻撃に参加してくれるのはありがたいが、他のサーヴァントと比べると攻撃力の低さが目立つ。ならば、防御に徹して貰えれば自分ともう一人分くらいは守れるだろう。

「ったくよぉ、オレは三流以下だってのに」

「それでも、霊基の強化と拡張はめいっぱいしたんだから、中の下ぐらいはやれると思うんだけど」

一時期は収穫した種火をアンリに最優先でつぎ込んでいたほどで、更には貴重な魔力リソースも惜しみなく使い、限界まで霊基を拡張した。

自分のことを弱い弱いというアンリに対して、意地になっていた。後悔はそこまでしていないが、次からは同じようなことは二度としないと誓った。

何より、他のサーヴァントに割くべきリソースを削ってまでやった

ことなので、しばらく周りからの目が痛かった。
「まあ、マスターの労力に、少しでも働きで返さなきゃいけませんからねぇ。そいつと同調するだけじゃあ全然割にあってないですし？」
アンリは現在、スバルと同調している。スバルの『能力』をアンリのもつ『残滓』と共鳴させ、カルデア一行を彼の能力に便乗させている。
謎が多いが、本来のアンリならそう簡単にできることではないらしい。彼に与えた多くの魔力リソースが、その補助をしているということだろう。
「なら、オレ達はあっちだ。行こうぜ、マスター」
「うん。頼りにしてるよ」
至近距離に行くのは、マスターの藤丸とマシュ、クー・フーリンと、ガーフィールの四人だ。ちょうど四人づつ別れた形になる。
「おオッらァ！」
一番初めに攻撃に移ったのは、ガーフィールだ。だがやはり、一度目と同じ。
「――あン？」
中のエミリアを傷付けないようにと意識し過ぎたか、水晶には僅かに傷ができただけ。ガーフィールには前回の記憶はないのだから、水晶との戦いに関して、情報共有をすべきだったか。
『くるぞ！　みんな、気を付けて！』
赤い水晶が発光する。光線を放ってくる前兆だ。しかし、既に心構えは出来ている。
そして次の瞬間、光線が放たれると同時に矢が水晶を襲う。放たれようとしていた光線を全て掻き消し、さらに大きなダメージを与えた。
「同じことは何度も出来ん！　今回だけと思え！」
「ありがとう、エミヤ！」
攻撃をしてくるまでに準備ができる今だからこそできる芸当。しかし、これでいいスタートダッシュを切れた。
「みんな！　ガーフィールを補助して！」

藤丸が呼び出した『影』は、メディア、玉藻、諸葛孔明。補助や援護の得意なキャスター達だ。
先程のマシュとの攻防で、ガーフィールの攻撃力は凡そ把握した。あの性能なら、『影』を攻撃に回すより、キャスターで補助した方が効果的だ。
「お？　オォ……！　力が湧いて来やッがる！」
「思いっきり行ってください！　ガーフくん！」
「オォ！　やったァ！」
マシュの発破を受けて、ガーフィールは力強く踏み出す。その勢いのまま水晶を殴りつけると、大きくひび割れて破片が飛び散る。
再生しようとするが、そこに追撃。ガーフィールだけでなく、もちろんマシュやクー・フーリンも攻撃する。
その間に光線が彼らを襲うが、彼らは彼らでそれを防ぐ。マスターを狙う光線はマシュが打ち払う。スバルやオットーを狙う光線はエミヤとアンリマユが防いでいる。
「これッで、どォだァ！」
連撃のシメに右拳を叩き込む。一際大きな音が響き、水晶が砕ける。確かな手応えを感じ、その拳を引っ込めようとするが――
『まだだ！　ここからだぞ！』
通信越しにドクターの声。そうだ。水晶戦は一定以上削ってからが本番。今の一瞬は再生が止まっているが、直ぐにこれまで以上のスピードで再生するはず。
『あ、あれ……？』
一瞬の後、確かに修復は再開されたが、その早さは先程までと何ら変わりない。
『何も起こらない……？』
『そんなわけないだろう！　水晶内部の反応が強くなっている！　何かを仕掛けてくるぞ！』
困惑顔のロマンを押し退けて、ダ・ヴィンチちゃんがこちらに警告を発する。
「先輩！　後ろに！」

「ありがとう！」
宝具を展開する暇はない。それでもできる限り魔力を回し、マシュの防御力を強化する。
光線の数が増えるか、太い光線になるか、あるいは光弾を散らしてくるか。そう思考を巡らせていたが、繰り出された攻撃はそのどれでもなかった。
――氷。
氷の礫が射出される。まるで這うようにして地面が凍りつく。氷柱が空から降り注ぎ、あるいは地面から突き出してくる。
「がァ、こォのッ……！『ケルケーリュはカラカプトスを二度見する』ッてエヤツだぜ、これァ……！」
「ごめん！　何が何なのか全くわかんない！　マシュはわかる!?」
「すみません！　同じくわかりません！」
攻撃が氷に変わるという、いきなりのことに落ち着きを失う。
ケルケーリュとカラカプトスがなんだかわからないが、ざっくり、ものすごくざっくり言えば『びっくりした』とかそんな感じの意味だろうか。
「く……！」
攻撃の手は止まない。光線とは比べ物にならない威力の氷を、光線と変わらない頻度で繰り出してくる。
「どうすれば……」
「なァに神妙な顔してやがンだ、師匠。俺様の師匠なんッだからよォ、どっしり構えててくれや」
ガーフィールからマシュに向けられるのは、信頼の視線だ。これ以上ないほどの純粋な信頼を向けられている。こんな目を向けられて、奮い立たない訳にはいかない。
「そうです、私は――ガーフくんの師匠で、先輩のサーヴァントです！
このくらい、なんてことありません！」
それを自覚したことで、力が、勇気が溢れてくる。声を張り上げ、全身を鼓舞する。
「私に続いてください！　先輩！　ガーフくん！」

マシュは飛んでくる氷を弾きつつ、前方へ突っ込む。藤丸は魔術礼装・カルデア戦闘服によって強化された身体能力をフルに使って、どうにか後を追う。
さらにその後ろから、ガーフィールが追従する。藤丸は、前と後ろの盾使いに守られている形だ。
「はぁっ！」
「オラァッ！」
前から後ろから、時に地面や空中から襲い来る氷。それをマシュとガーフィールが蹴散らし、その勢いのまま水晶本体に近付いていく。
「――先輩！」
突然くるりと後ろを向いたマシュが、盾を斜めに構えてしゃがんだ。マシュの顔を見ると、その目は真っ直ぐに藤丸と、その後ろのガーフィールを見据えていた。
彼はそれが何を意味するのか、その一瞬で悟る。
「みんな！　ガーフィールの道を開け！」
赤い水晶を守るようにして聳える氷の壁。藤丸は『影』に指示を出し、孔明が的確に読み取った脆い部分に、メディアと玉藻が強力な火を放つ。
氷壁に綻びが生じる。狙った場所が見事に崩れ落ち、人が一人通れるだけの穴が空く。
「ガーフくん――跳んでください！」
「ら、ァァァ――！」
盾に足が掛かった瞬間、マシュは梃子（てこ）の要領でガーフィールを押し上げる。ガーフィールは脚に思いきり力を込めて、跳躍する。
ガーフィールの身体は、『影』達の開けた穴を過（あやま）たず通過する。
そして、『影』の仕事はもう一つ。ガーフィールに対する、出来うる限りの補助、強化。彼は、地に足がついている間、強くなる。逆に言えば、空中などでは弱体化する。
だから、それを補ってあまりある程の強化効果を。
「おォ、オラァァ！」
氷の壁を抜け、眼下に見えるのはあの赤い水晶。ここからあそこま

で落ちていく重みも乗せて、全力をぶつける。
「部分ッ獣化ァ――！」
膨れ上がる右腕と、熱を帯びる思考。足場に支えられていないことに多少の不安感を感じないでもないが、今のガーフィールには些細なことだ。
何やらよくわからないが誰かが助けてくれているらしい。自分以外の力を自分の中に感じる。何より、自分の後ろには師匠がいて、さらにその後ろには大将がいる。
安心感という指標で言えば、ガーフィールにとっては地面に支えられるよりもさらに心強い。
「ここまでされッて、燃えねェ奴ァ居ねえだろォ！」
渾身の一撃が、赤い水晶に突き刺さる。その瞬間、周りにあった氷壁や氷柱が、粉々に砕け散る。
赤い水晶にも全体にヒビが入り――そして一瞬だけ、元の完全無傷な姿を取り戻し――光の粒子となって、エミリアに収束する。
「エミリア――！」
大きな声がしたと思って振り返ると、そこには後方でエミヤに守られていたはずのスバルの姿が。
「すまないマスター。どうしてもと言うのでね。連れてきてしまった」
「……いや、いいよ」
一目散にエミリアの元へと駆けるスバル。その必死な姿を見て、責める気など起きるはずもない。
彼は自分と同じだ。自分の無力さに押しつぶされそうになって、それでも自分にできることはやらなくちゃと足掻いて。
そして彼は、たとえ自分が何も出来なくても――彼女が目覚めた時、最初に見るのはどうか自分であって欲しいという、強い想い。
自分と同じで、自分が持っていない強さを持っていて。そのために必死になれる彼。
そんな彼に必死に頼まれてしまったなら、聞き入れてしまうのも仕方のないことだ。

＊

「ん、スバル……？」

「ああ、俺だ。助けに来たぜ、エミリア」

「ふふ。スバルは、私の騎士様だものね」

「あー……その、うん、改まって面と向かって言われると、照れるな」

キリッとした顔を保てずに、頬が緩んでしまう。

「ありがと。すごーく、助かっちゃった」

第13話　「さあばんと」

「スバル！」
「大将！」
　声を上げて、藤丸とガーフィールが駆け寄ってくる。それに続いて、マシュやサーヴァント達。最後方には、オットーを背負ったアヴェンジャー。
「スバル、あの人たちは？」
「協力関係。頼りになる奴らだよ。紹介したいから、とりあえず安全な場所に移動しよう」
＊
「つっても、道中に敵はいるよなぁ！」
　流石に見飽きてきたスケルトンの群れ。サーヴァントたちやガーフィールが薙ぎ払っているが――
「アイスブランド・アーツ！」
　そこに、今回からエミリアも参戦している。空中に出現した氷槌がスケルトンを吹き飛ばし、氷剣が切り裂き、氷槍が突き刺す。
　ガーフィールもそうだが、エミリアもサーヴァントに引けを取らない。
「とりゃ！　うりゃうりゃ！」
　エミリア本人は至極真剣なのだが、どうにも気の抜ける掛け声。攻撃の激しさとの温度差で風邪を引きそうなくらい。
　スケルトンの数は凄い勢いで減っていく。また、戦力が増えたことで、マシュが藤丸を守ることに集中できている。
　そのおかげで、藤丸の呼ぶ『影』も攻撃に徹することができる。安定感は抜群になり、割と直ぐにスケルトンの群れを突破出来た。安全地帯、穂群原学園はすぐそこだ。
「痛っ……」
　藤丸は自分の手を見る。いつの間にか、手の甲に切り傷ができていた。戦闘時に石礫でも飛んできたのだろうか。
「怪我ァしてんッじゃァねえか。師匠のマスター、だったか？」

「うん。でもまあ、大したことないよ」
『ゲバリエのサルモルサは水を吸って増える』ッてこともあらァ。見てやンよ」
「うん……なんて？」
　ガーフィールが藤丸の手の甲に自分の掌を重ねる。淡く暖かな光が、傷を癒す。ガーフィールが手をどかすと、そこには傷痕すら残っていなかった。
「おお。ありがとう、ガーフィール」
「大したこたァしてねェよ。……師匠のマスターだッから、大将……は大将がいるだろ。なら……大頭？」
「大頭かぁ、割と新鮮な感じ」
　言いながら、傷のあった箇所をさする。本当になんの痕も残っていない。ガーフィールが治癒の魔術を使えるとは、少し意外だった。
『ん？　今のは……』
「ドクター、どうかした？」
『いや、ちょっとね。もしかしたら、色々と分かるかもしれない』

＊

　穂群原学園、教室にて。
「改めて、エミリアです！　よろしくお願いします！」
「よろしくお願いします、エミリアさん。私はデミ・サーヴァントのマシュ・キリエライトです。こちらはマスターの藤丸立香」
「藤丸です。よろしく、エミリアさん」
　藤丸はエミリアを見る。水晶の中にいた時はわからなかった紫根の瞳と、銀鈴の声音。それから、表情や言葉の端々から感じられる、体つきとは不相応の幼さ。
　水晶の中の彼女は儚げな印象だったが、今はむしろ活発で力強い印象さえ受ける。もしもマシュに出会っていなかったら、惚れていたかもしれない。
　まあ、そんな『もしも』は論ずるだけ無駄だが。
「エミリアたん、わりと警戒してないね」
　助けられたからというのもあるだろうが、自分が王位候補者である

という自覚が固まってきたエミリアなら、多少は警戒してもいいと思ったのだが。
　オットーやガーフィールなんかは、出会ってすぐはそれなりに警戒していた。
「えっと……スバル達のお友達みたいだったから、いいかなって……ダメだった？」
　エミリアは両手の指を胸の前で合わせて小首を傾げ、申し訳なさそうに少しだけ上目遣いでスバルに視線を向けた。
「いやいやいやいや！　全然ダメじゃないよ、むしろいい！　というかそのポーズ超可愛い！　Ｅ・Ｍ・Ｔ！　エミリアたん・マジ・天使！」
「ごめん、ちょっと何言ってるのか分からない」
　微笑ましいやり取りを交わすスバルとエミリア。それを見て、藤丸の中にふつふつと対抗心が湧いてくる。あんな惚気を目の前で見せつけられたのだ。こちらも見せつけてやらないと。
「マシュ！　いつも可愛い頼れる後輩！　Ｍ・Ｍ・Ｍ！　マシュ・マジ・女神！」
「せ、先輩!?　急にそんなことを言われましても……その、カルデアには本物の女神様もいらっしゃいますし……あ、いえ、サーヴァントとなっている時点で『本物』ではないのですが……」
　頬を赤く染めるマシュ。いつも可愛いけど今はもっと可愛い。気にするところがちょっとズレてるのも可愛い。何だこの可愛さの塊は。
「あ、えっと、すみませんエミリアさん！　サーヴァントの皆さんを紹介しますね！」
「ううん、いいの。気にしないで。ところで……その、さあばんと、って何のこと？」
「エミリアたん、サーヴァントってのは――」
　スバル、藤丸、マシュ、それから意図を過たず聞き取ってくれるオットーの四人がかりで、どうにかエミリアへの説明を終える。
「ふんふん。つまり、昔にすごーく頑張って認められた人を魔法で呼

び出したのが、さあばんと？」
「魔法って言うと……ああいや、ざっくりそんな感じの理解でいいよ」
だいたい理解できたエミリアに、わざわざ『魔法』と『魔術』の違いを指摘して水を差すようなことはしない。スバルも、それくらいは弁えている。
「ね、スバル。それって、ちょっと似てると思わない？」
「似てるって……あ、レイドか。確かに！」
なぜ今まで思い浮かばなかったのか、と言うレベルだ。あそこに現れたレイドがサーヴァントだったという訳ではないだろうが、現象としては似たようなものだ。であれば――
「真名がわかれば、宝具や弱点もわかる……？」
とはいえ、奴の真名に当たる『レイド・アストレア』は既に判明しているが、そもそも弱点らしい弱点が伝わっておらず、同時代を生きたシャウラでさえ、弱点など知らないという。
「いや、そうだ。それなら、過去を見りゃいい」
レイド本人しか知らない弱点があるかもしれない。こう考えると、あの『死者の書』は、攻略の鍵として用意されたものであるとすら思えてくる。
「スバル、どうかした？」
スバルが何やら考え込んでいたので、藤丸は気になって声を掛けた。あまり一人で抱え込みすぎるのは良くないと思って。
「あ、悪(わり)い！　完全に今関係ないこと考えてた！　や、ほんと何でもないから気にしないでくれ」
「何でもないならいいんだけど……」
彼は一体、どれだけのことを一人で抱えているのだろう。人に言えない秘密が多くあって、あれでは息が詰まりそうだ。
「大将、今なんッか聞き逃せねェ単語があった気がすんだがよォ。――レイド？」
「それ、僕も気になりますね。『監視塔』で何があったんですか？」
「えっと……」
掻い摘んで説明する。監視塔までの道筋、シャウラの正体、スバル

とフリューゲルのなんやかんや、『試験』のこと。
「まあ、そんな感じで大変だった……いや、大変なんだよ。八方塞がりとまでは言わなくとも割とキツい感じ。武闘派内政官様がいればどうにかしてくれるんだろうなぁ、って場面がいっぱい」
「その状況で僕にどうしろって言うんですかねぇ!?」
「マジでマジで。オットーがいりゃそこまで大変にはなってない気がする。だから、俺が大変なのは一緒に来てくれなかったオットーのせいだな」
「理不尽すぎる!? 話し合いで決まった事じゃないですか!?」
傍から見れば微笑ましく、当人からすれば胃が痛そうだ。気が置けない仲なのだろう、と言うのは見て取れる。
「……ところで、これからどうしようか」
『そのことなんだけど、色々とわかったことがある。とりあえず、話を聞いてくれるかい？』
困っていたところに、ドクターからの通信。地獄に仏、渡りに船。なんであれ、できることがハッキリするなら願ってもなに。
『ただ、その前に確認したいことがある。――エミリア君とガーフィール君は、魔術師かい？』
「……魔術師？」
エミリアが首を傾げる。ガーフィールも同様だ。
『うーん、なんて言ったらいいかな。君たちはさっき、魔術を行使していたよね？』
「えと、魔法……のことでいいのかしら。その、魔術って」
『……世界が違えば魔術の体系も違う、か。まあ、それでいいよ』
苦々しい顔で頷くドクター。藤丸もよくは知らないが、魔術世界において『魔法』とはかなり特殊なものらしい。
「使えるか使えないか、って話なら俺もオットーも使えるぞ。オットーはともかく、俺は体に無理させるからやらねぇけど」
『ふむ、なるほど。それで、その魔法には魔力が必要だよね？』
「それァそうッだァなァ」
ガーフィールが、当然と言った様子で頷く。それを受けて、ドク

ターはなにかを確信したようだった。
『エミリア君が氷の魔術……魔法を使った時と、ガーフィール君が治癒の魔法を使った時、こちらでは魔力を観測できなかった』
「魔力が……観測できなかった？」
『うん。ただ、代わりに生命力の一部が励起したことが確認された。つまり、これが彼らの言う魔力だろう。こちらの魔術理論では生命力の一部としてしか認識されていない部分を利用して、神秘を行使している』
　話についていけない。スバルやオットー、マシュは理解した風だが、それ以外は全くもってわかっていないようだ。
『とは言っても、辿り着いている魔術師がいないとは言い切れない。秘匿されているだけかもしれない』
「ですが、現状は全く未知の魔術体系だと？」
『そういうことになる。こんなこと、魔術協会が知ったら色々とひっくり返るぞう……』
　全くもって理解は出来なかったために話には追いつけなかったが、藤丸は思い切って話を切り出す。
「で、ドクター。それが、これからの方針にどう関わってくるの？」
『そうだね、本題に入ろう。こちらは、その【生命力の一部】を、暫定的に【魔力】として設定した。その上で色々と解析をして、わかったことがある』
「……それは？」
『あの水晶も同じもので構成されている、ということさ。つまり、黒幕も彼らと同じ世界の者の可能性が高い』
　その言葉で、スバルたちに緊張が走る。
『それで、君たちが呼ばれたということは、それだけ君たちと縁の深い者だろう。あとは、あれだけ魔術……魔法を操れる者ということだけど、心当たりはあるかい？』
「大将、それァもしかすッと……」
「ロズワール……？」
　思い当たる節はあった。ロズワールならなにかを企んでいたとし

ても有り得る。だが、問題は方法だ。どうやってこちらの世界に来たのだろうか。
「……ダメだ。今は考えたってわからねえ。あいつだって決まったわけでもねえんだし。それで、俺たちはどうすればいいんだ？」
『少し調べたところ、その魔力の反応が特異点内にいくつもある事がわかった。同じように水晶に閉じ込められている人が複数いると思っていいだろう』
「じゃァ、やるこたァ変わんねェってこった」
『ああ。とりあえず、一番近い場所への道筋はこちらで指示しよう』
一行はロマニの指示で、目的地へと向かう。その道中でエネミーに邪魔をされながらも、なんとか辿り着く。
そこにあったのは、黒い水晶。そこには金髪を縦ロールにした幼女

――ベアトリスが、囚われていた。

第１４話　「闇を裂く」

目の前には黒い水晶。やることはこれまでと同じ。つまり、スバルにはやることがない。だから、考える。いや、わざわざ考えるまでもなく、もう答えは出ている。

ガーフィールを閉じ込めていた青い水晶は自らを修復。エミリアを閉じ込めていた赤い水晶は氷を。

それぞれ、囚われた者の得意とする魔法を扱っていた。水晶の色も、それぞれが扱いを得意とするマナに対応している、と推測できる。ならば――、

「藤丸、ちょっといいか？　あの水晶なんだが」

「……何をしてくるかわかったり？」

スバルから情報が得られると見て食いつく藤丸。スバル達には既知の相手ではあっても、藤丸達カルデア勢にとっては未知の相手だ。当然の反応と言える。

その発言に、スバルは頷いて答える。

「あの子はベアトリス。俺とエミリアの娘だ」

「えぇ!?」

いきなりのカミングアウトに藤丸は面食らう。藤丸とスバルはそう幾つも離れていないように見える。それなのに、あれくらいの子供がいるということはつまり――と、そこまで考えたところで、エミリアが横から訂正する。

「もう。スバルったらまたそんなこと言って。前にも言ったけど、チューじゃ赤ちゃんはできないってこと、ちゃんと知ってるんだから」

「あっ、ちょっとエミリアたん待って」

藤丸はニヤニヤしながらスバルを肘でつつく。

「そこまでは行ったんだ。へぇ……」

「わ、わたしにはよくわかりませんが、想い合う方同士でそういうことをするのは、その、自然なこと、なのではないでしょうか」

顔をほんのり赤く染めるマシュ。それを見て、藤丸の顔はなおのこ

と緩んでしまう。
「藤丸。ニヤニヤしてるけど、お前はどうなんだよ」
「え？　んー……任務がない日は、二人でバックギャモンとか、オセロとか、トランプとか、してる……かな……」
「割と楽しそうだな、それ」
　口に出してみて、なんだか気恥ずかしくなる。スバルのように具体的に進展がある訳ではない。
　マシュのことは可愛いと思っているし、最高の後輩だと思っている。だけど、そういう対象として見るのは、何となく悪い気がしてしまう。綺麗なものを汚してしまうような気がして。
　後輩として先輩である藤丸を立ててくれてはいるが、実際どう思っているのかはよく分からない。
　今は、先輩と後輩という関係でいるのがベスト。そう思っているからこその現状なのだが――どうなのだろうか。単純に、臆病なだけかもしれない。
「で、話を戻すけど、ベア子――ベアトリスが俺とエミリアの娘ってのは嘘だ。悪かった。本当は、俺の契約精霊だ」
「それで……？」
「ベア子は『陰魔法』を使う。ざっくり言えばデバフ特化だ。つっても、『ミーニャ』とかの攻撃魔法も普通に出来るからそこは勘違いすんなよ」
　スバルの助言を念頭に置き、水晶を破壊にかかる。とりあえず、ある程度破壊を進めなければ特殊な動きはしてこない。感覚としては、ゲージを一本削るくらいのイメージ。
　そうすると、水晶の防衛機構が第二段階へ移行する。この水晶はそもそも中に閉じ込めている者の力によって成り立っているが、第二段階ではさらに力を搾り取る。
　そのため、第二段階に移行してからはできるだけ迅速に破壊を完遂せねば、負担が重くなってしまう。
　戦力も増えたため、藤丸が召喚する『影』は全て援護に長けたキャスターやアーチャーだ。破壊にそこまで時間はかからない。だが、や

はり対水晶戦ではクー・フーリンはやりづらそうだ。宝具の性質によるものだろう。真名を解放すれば、確実に心臓を貫いてしまうから。
敵対する相手が、同時に救うべき、守るべき相手でもあるという場合では本気を出しづらいか。だが、真名解放せずとも彼は十分に強い。
そもそも通常の聖杯戦争であれば。一度でも敵対したなら、それ以前にいくら関係を築いていたとしても、容赦なく心臓を穿つだろう。彼はそういう男だ。
だから、こういう戦いにはあまり慣れていないのではないか――などと、そんな考えは杞憂であった。その『縛り』があることで、彼はむしろ普段より沸き立っているようにも見える。
そうこう考えているうちに、第一段階を突破した。
「……よし！」
ここまでは肩慣らし、準備運動、前哨戦。本番はここからだ。
黒水晶が怪しげな光を湛え――次の瞬間。

＊

「――？」
真っ暗な闇の中に、たった一人で取り残されていた。
どういうことだ、と口に出そうとする。しかし、口を動かす感覚だけが返ってきて、音を知覚できない。
もう一度声を出そうとして、今度はその感覚さえ朧気になる。自分の肉体とそれ以外の境界線がよく分からなくなって、次に自分という存在に疑問を持つようになる。
完全に肉体の感覚が消える。残るのは精神――思考のみ。しかし、それも不確かなもの。自分というものが本当に存在しているのか、実は何かの狭間で揺蕩うだけの思念でしかなかったのではないか。
「――、――」
否、それすらも存在せず、自分が自分だと認識しているこれなど、初めから存在していなくて――
「――、――！」
つまり全ては同一であり数多の宇宙は既に統合された上位存在の

一部でしかなくその中で個などというものは既に存在せずそれぞれが感じている個というものはその上位存在の機能の一つに過ぎず勘違いも甚だしく本来の目的を忘れた癌細胞にも等しいものであり同時に――

＊

「先輩――先輩！」

「うへぁ!?　マシュ!?」

急に視界が開けた。闇に沈み、発狂寸前だった藤丸の精神は、急激に本来のカタチを取り戻した。

きれいな前髪から覗く、不安を湛えた瞳。ほんのり赤く染まった頬。整った顔立ち。きめ細かな肌。割ときわどい鎧。藤丸の肩をがっしりと掴んで揺する手の感触。

その全てが藤丸を現実へと引き戻す。さっきまでの悟ったような思考が、彼女（マシュ）という絶対的な存在の前では、くだらない妄想、ただの塵芥と化した。

そうだ。マシュが藤丸の目の前に存在するということは、マシュの目の前に藤丸が存在するということだ。絶対的存在に観測される存在、つまり藤丸はマシュに観測されているということで、その存在は確かなものである。

「なんか、まだ引きずってるみたいだ……」

どうしても変な方向に振れてしまう思考を正す。いくら哲学的なことを考えたところで、藤丸は哲学者ではない。何一つ産み出さない非生産的思考だ。

「ありがとう、マシュ」

「いえ。マスターを守るのがサーヴァントとしての役割ですので！むしろ、事前に防げなかったのが申し訳ないと言いますか……」

「あんまり気に病まないで。助かったんだから」

申し訳なさそうな顔をされると、こっちもなんだか申し訳なくなる。

「『シャマク』をモロに食らっちまったか」

「やばかった。何あれ？　精神干渉系？」

「俺が使えばただの目くらましみたいなもんだけど、意識と肉体の繋がりを分断するらしい」
あの感覚はそういう事か、と納得。手を握ったり開いたりしているが、まだなんとなく感覚がふわふわとしている。
「そうだ、他のみんなは？」
「私や他のサーヴァントのみなさんは特に問題ありません。エミリアさんやガーフくんも殆ど影響は受けていないようです。影響があったのは先輩とスバルさん、オットーさんだけです」
「……スバルも？　知ってたんじゃないの？」
「知ってるのと対策できるかは別ってだけだ。ベア子のシャマク程じゃないにしても、俺のよりはよっぽど上等だからな。それより、話してる場合じゃねえと思うが」
「……そうだった。まだ戦闘中だ」
藤丸は黒水晶の方に向き直る。ただ、既に始まってしまっている戦いでは、できることは少ない。それでも、身体中に気を入れて。少しでもサーヴァントの皆に回る魔力の効率が良くなるように、媒介としての役割を全うせよ。
藤丸は『影』のキャスター達に命令を出し、自陣のサーヴァント達に有利効果（バフ）をかけさせる。黒水晶は『シャマク』以外にも様々な弱体効果（デバフ）を付与してくるため、その解除も。
クー・フーリンは自身のスキルで弱体効果に対応できるが、他はそうもいかない。主に、そこの援護や強化だ。
サーヴァント達は数々のデバフを掛けられつつ、上から降ってくる破滅の杭『ミーニャ』を弾き飛ばす。
「次で決める！　皆、エミヤの補助！」
キャスターのバフをエミヤに集中させた。エミヤはひと振りの剣を投影し、弓に番える。
「偽・螺旋剣（カラドボルグII）！」
弓から放たれたそれは、風を裂き空気を穿ち、目標の黒水晶を破壊する。
贋作宝具であるそれを惜しげも無く爆破させることで、驚異的な破

壊力を生む壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）。
　水晶は打ち砕かれ、そして一瞬で元の形を取り戻す。さらに次の瞬間には、黒水晶は光の粒子へと変じ、ベアトリスへと収束していく。
　空中に投げ出され落ちていくベアトリスを受け止めるのは、やはりスバルだ。最後の一撃が放たれた直後、既に彼はベアトリスの元へと走り出していた。
　ぽす、と小さく音を立てて、ベアトリスの体はスバルの腕の中に抱きとめられた。
「無事に会えて良かったぜ、ベア子」
「これは……どういう状況なのよ？」
「ベア子が囚われのお姫様状態だったもんで、助け出したって感じ。まあ、正確には俺が助け出したわけじゃないんだが」
　そこは多少くらい見栄を張ってもいいような気もしたが、スバルとベアトリスの仲だ。わざわざそんなことをする必要は無い。
「まあいいのよ。スバルがそこまで活躍出来るとは思ってないかしら」
「ホントの話だけどストレートにそう言われるとちょっと来るものがあるな……」
　契約を交わした間柄だからこそ、理解し合っているからこその信頼感。互いを過大評価もしなければ過小評価もしない。
「起きて最初に見たのがスバルってだけで、十分過ぎる程かしら」
「可愛いこと言うなお前！」
「むぎゃーなのよ！」
　衝動的に抱き締めたスバルに、ベアトリスが可愛らしい抵抗をする。頬擦りをしたりもするが、割とされるがままだ。
　そんな熱いスキンシップを見せられる方はどう反応していいか分からない藤丸たちだったが、まあとりあえず暖かい目で見守ることにした。
『……む？』
「ダ・ヴィンチちゃん、どうかしましたか？」
『ベアトリスちゃんと接触した瞬間から、スバル君の反応パターンに

変質が見られる。契約精霊、という特殊な形が関係しているのかもだ』

興味深そうに笑みを浮かべるダ・ヴィンチちゃんだが、それはさておき――

――ベアトリスが、仲間に加わった。

第15話　「異世界の魔法」

「ベアトリスなのよ。スバルが世話になったかしら」
「こちらこそ。藤丸です、よろしく」
　スバルの契約精霊ベアトリスを水晶から救い出した。藤丸としては、聞きたいことは色々とあったのだが――その中で、たった一つだけ、衝動的に口をついて出てしまった質問がひとつ。
「で、ちょっと聞きたいんだけど、スバル。さっき、言ってたよね。俺が『シャマク』をくらった時――」
「……？　なんか言ったっけ？」
『俺が使えば目くらましみたいなもん』……って」
「ああ、確かに言ったな。それがどうかしたのか？」
　藤丸の心臓が強く脈打つ。最も気になった部分、『俺が使えば』――つまり、スバルは。
「スバル、魔法が使えるの？」
「ああ、なるほど。そういう質問か。というか、使えるって普通に言ったと思うんだけどな」
「……そうだっけ？　話の流れでスルーしちゃったかも」
「お前な……でも、話したいことは分かった」
　質問の意図を理解し、納得する。――そこに、横から口を挟む者が。
「――使えないかしら」
　ベアトリスだ。これまでの話を裏切るその答えに藤丸は困惑し、スバルへと疑問を投げかける。
「え？　……スバル？」
「使えなくなった、って方が正しいかな。元々資質があったわけでもねえんだが、色々と無茶した結果、ゲート――まあ、魔術回路みたいなもんがぶっ潰れちまった。なんで、俺一人じゃ魔法は使えねえ」
　あちらの魔術体系の専門用語を、こちらにもわかるよう言い換えてくれるスバルの細やかな配慮に感心しつつ、その内容を咀嚼する。
「ってことは、裏を返せば『使えてた』んだよね？　それに、一人じゃなければ今でも使える？」

「まあ、そうだな。ベアトリスの助力あってこそだが」
「スバルは、魔術師の家系とかでは……」
「ない。間違いなく一般人」
　ここまで話を進めて、スバルの方もおそらく藤丸の聞かんとしていることを理解したのだろう。質問への回答が早くなってきた。
「……じゃあ、俺もその魔法、使えたりしないかな」
　勇気を振り絞って、そう聞いた。やれることなら、なんでもやりたい。サーヴァントに頼りきりなだけでは、無力感に苛まれる。
「ゲートは全ての生命に備わっているかしら。あとは、開いているかどうかの問題なのよ」
　その疑問にはベアトリスが答えた。ゲート、というものは魔術回路のようなものとスバルは言っていたが、完全に同一という訳ではないだろう。用途の似た別物、くらいに考える。
「というかお前、魔法について知らなすぎるのよ。屋敷に来たばかりのスバルと同じ程度かしら」
「そりゃそうだろベア子。いや、ろくに説明もしなかった俺が悪いんだが。ここは俺の故郷……みたいなもんだ。大瀑布の向こう側、ってやつだな」
　その言葉を聞いて、一瞬だけベアトリスは驚いたような表情を見せた。が、そのあと妙に悲しげな顔をしてスバルを見つめる。
「ど、どうした？　元の場所が恋しくなったか？」
「まさか、スバルの故郷がこんなに過酷な場所だとは思っとらんかったのよ……よく頑張ったかしら」
「憐れみ!?　いやベア子、今ここが特殊なだけで、本来は大して地位が高くないのに綺麗な手をした人間を大量生産できるレベルの安心安全平和な場所だから。こんな世紀末みたいな感じじゃないから」
　キャッキャ、と聞こえんばかりにはしゃぐスバルとベアトリス。放っておけば永遠に脱線し続けそうだったので、藤丸はもう一度聞く。
「それで、俺は……」
「悪い悪い。脱線しすぎたな。ん、じゃあベア子、ちょっと魔法の説明

してくれるか？　俺も人に説明できるほど魔法について知ってるわけでもねえし」
『ふむ……異世界の魔法、なかなか興味深いところではある』
ダ・ヴィンチちゃんはかなり知的好奇心を刺激されたようで、通信越しではあるが身を乗り出すようにして聞き入る。
「スバルがそう言うなら、仕方ないのよ」
そう言うと、ベアトリスは藤丸に向き直り、一呼吸おいてから説明に入る。
「魔法には基本の四属性があるのよ。それくらいは知ってるかしら？」
「え、と……火、地、水、風、空……？　だと五つになるか」
キャスター達や魔術師上がりのカルデアスタッフから聞きかじった『五大元素』を思い浮かべるが、ベアトリスの言うそれは『基本の四属性』だ。数からして違う。
「熱量関係の『火』属性。生命と癒しを司る『水』属性。生物の体外に働きかける『風』属性。体内に働きかける『土』属性の四つ。普通のニンゲンなら、その中の一つに適性があるのよ。あと、それとは別に『陰』と『陽』があるかしら」
四つと言いつつ、二つ余計に六つの属性があることを明かすベアトリスだが、付け足した二つは恐らく特殊なものなのだろう。こちらで言うところの『虚数』や『無』といった『架空元素』にあたるものだろうか。
「ちなみに、スバルとベティーは『陰』属性に適性があるかしら」
「……あれ？　じゃあエミリアさんの氷はどの属性になるの？　水？」
「ううん。火のマナよ？」
「そこ引っ掛けポイントな。熱いのも冷たいのも熱量関係だから、『火』属性が司ってるんだとさ。で、さらに引っ掛けで『水』属性にも氷の魔法がある」
「頭がこんがらがってきた……」
カルデアに来てから知った魔術世界のこと、今回知った異世界の魔

法のこと。共通点も多いが、大きな相違点もある。魔術世界のことはよくわかっていないので、藤丸の中では正確に比較できないのだが。
「『火』属性の氷魔法は凍らせる魔法、『水』属性の氷魔法は氷を生み出す魔法なのよ」
「わかったような、わからないような。で、どの属性に適性があるかとか、調べる方法はあるの？」
「にーちゃやベティー、ロズワールくらいの魔法使いなら触るだけで適性がわかるのよ。スバル、ちょっと持ち上げるかしら」
「へいへい」
　腕を横に広げたベアトリスの脇下にスバルが手を入れ、そのまま藤丸の顔あたりの高さまで持ち上げる。
「じゃあ、ちょっと見てやるかしら」
「は、はい」
　ベアトリスの小さくて柔らかく、ひんやりとした指先が藤丸の額に触れる。
「みょんみょんみょんみょんみょんみょん」
「効果音、自分で言う感じなんだ……」
　正直、自分がどの属性に適性があるのか、全く想像がつかない。
「……結果は？」
「どう言ったらいいか微妙な感じなのよ。全ての属性に適性があるとも、無いとも言えるかしら」
「どゆこと？」
　疑問を口に出したのはスバルだ。藤丸としても意味がさっぱりだったので、即座に聞いてくれるのは助かった。
「全ての属性と、ほぼ均等に繋がりがあるのよ。ただ、一点特化でない分それぞれの繋がりは弱めかしら」
「となると……」
「補助のできる魔法使いがいれば、どの属性の魔法も使えるかしら。ただ、繋がりが弱い上に魔法の才能も見込めないのよ。大した魔法は使えないかしら」
　ベアトリスから残酷な事実が告げられる。それでも、やれると言う

ならやってみたいと思うのが本音だ。
『こちらで言うところのアベレージ・ワン……いや、口ぶりからして、そんな大層なものでもないのかな？』
『ふむ……その、多くのものと繋がれる性質があるからこそ、古今東西の英雄をまとめられているのかな？　あるいは逆に、多くの英霊と契約しているから、そういった性質として君に現れているのだろうか』
　ドクターとダ・ヴィンチちゃんが、藤丸の属性適性について色々と話している。聞こえてきた会話のうち、理解出来たのは半分と言ったところだ。
「……ところで、才能が見込めないって具体的には？」
「属性を一つに絞って、その上で二十年くらい魔法の鍛錬に費やせばギリギリ二流くらいにはなれるかしら」
「絶望的では？」
　どう頑張っても、人理修復に際してその『魔法』を大きく役立てることは出来ないと悟る。
「いやそれでも、魔法使ってみたい……！」
「わかったかしら。『火』ならエミリア、『水』ならガーフィール、『風』『土』ならオットー、『陰』ならベティーが補助できるのよ。『陽』はいないから諦めるかしら。どうするのよ？」
　興味のある属性が一つ、既にある。が、なんとなく気が引けるというか、なんだか悪いような気がして、少し悩む。好奇心とそのモヤモヤを天秤にかけた。
『『火』の魔法を使いたいな。エミリアさん、お願いできる？」
　――結果、天秤は好奇心に傾いた。
「藤丸てめぇこの野郎、おい!?」
　スバルが食い気味に食ってかかる。憎悪とまでは行かないが、納得が行かない、という叫びを藤丸にぶつける。
「俺だって……俺だってなぁ……！　『火』に適性があれば、エミリアたんに魔法を手取り足取り教えてもらったりなぁ……！」
「その場合もにーちゃが教えてただけだと思うのよ。それに、陰属性で良かったこともあるはずかしら」

「それは確かに。シャマクさんには危ないところを何度も助けてもらったしな」
「……それだけじゃないはずなのよ」
不機嫌そうにそう呟いて、ぷいとベアトリスが横を向いてむくれる。
「ホントに可愛いなぁ、お前！」
「むきゃー！」
ベアトリスの頬をぐにぐにと弄り、彼女の細い胴体をしっかと掴んで持ち上げ、くるくると回転する。
「それじゃフジマルくん、始めるわね？」
「あれ⁉　俺がベア子とはしゃいでる間に話が進んでる⁉」
不意を突かれたような顔をするスバルだが、自分から脱線していっただけで、話は当然進んでいる。
「――――」
エミリアの掌が藤丸の背中に触れる。と、全身が熱くなるような感覚を得た。体の中を巡る、形持たぬ奔流――感覚としては、特異点Ｆのセイバーオルタ戦で初めて令呪を使った時に近い。
あの時のような痛みはないが、自分の体内を何かよくわからないものが暴れ回るような感覚は、まさにそれだ。
そしてそれが、自分以外の意思で動いているのがわかった。エミリアの手によるものだ。
「フジマル、想像するの。私が補助してるけど、いちばん大事なのは使い手の意思だから」
「想像……」
火の魔法を使うのだから、分かりやすく火をイメージ。幸い、イメージの材料はそこかしこで揺らめいている。炎上汚染都市冬木。未だ燃え上がっている謎の特異点。
「使いたいのは火の魔法よね？　氷じゃなくて」
「うん。シンプルに火を出したい」
「なら、使うのは火属性の『ゴーア』ね」
「得意なわけじゃないことを頼んで申し訳ないけど」

「ううん、いいの。それで、ゲートを通してマナを体の外に出すの」
体内にゲートをイメージする。そうすると、体内を暴れ回るような感覚が、出口を求めて奔る。
藤丸は右手を前に突き出して、魔力をその方向へ誘導する。そして、感覚が最高潮を迎えると、藤丸は叫びと共に外へと押し出した。
「――――ゴーア……！」

第16話　「水晶破壊任務・青の弐」

「――――ゴーア……！」

前に突き出した掌の前に、こぶし大ほどの火の玉が現れ、数秒の後に揺らめいて消えた。

さらに数秒の沈黙があり、口を開くのは藤丸。

「……焚き火の火種くらいにはなるかな？」

「あ、えっとそれ以外にも、ほら、寒くてちょっと火に当たりたい時とか……」

「エミリアたん、それフォローになってないよ」

「え!?」

微苦笑して、魔法のしょぼさを改めて理解する。使う前からそう言われてはいたが、実際に使ってみるのとみないのとでは感覚が段違いだ。

「でも、暴発して動けなくなる、みたいなことにならなくて良かったんじゃね？　初めての時、俺の場合はそうなったからな」

「うん……スバルは、ゲートが使い込まれてなかったから。でも、不思議なの。フジマルもゲートを一度も使ったことないみたいだったのに……体にマナを通すのには慣れてるみたいで」

「それは……」

藤丸は自分の手の甲、令呪を見る。一画を使用済みで、残り二画の令呪。魔法を使う感覚は、令呪を使う感覚、あるいは礼装を起動させる時の感覚に似ていた。

おそらく、その感覚を身をもって知っているかどうか、というのが関係してくるのだろう。

「他の属性魔法も使ってみたいところだけど……」

あまり時間を無駄に浪費する訳にも行くまい。たとえ六属性全てを藤丸が使えたところで、大して状況が好転する訳でもない。

「まだ、水晶はあるんだよね？」

『そうだね。特異点上にいくつか点在しているようだ。一番近くの水晶まで案内するよ』

＊

「――エル・ミーニャ！」

破滅を埋め込んだマナの矢、破壊の杭がスケルトンを葬っていく。魔力を惜しまず使っているようで、スバルは不安に思ってベアトリスに声をかける。

「魔力、大丈夫なのか？」

「平気なのよ。禁書庫時代とは言わないまでも、普段より遥かに魔力が有り余っているかしら。どうしてなのかは分からんのよ」

「……そうなのか」

水晶を破壊すると、それは光の粒子となって収束する。その際に水晶の魔力を吸収している、ということか。

「それにしても、バケモンみたいな奴らばかりかしら。本当にニンゲンなのか疑うのよ」

ベアトリスが、周囲で戦うサーヴァント達を見回して、そう言う。

「いや、人間ではないぞ。元人間ではあるけど」

「どういうことなのよ？」

「えっと……精霊と似たようなもん、と言ってもちょっと違うんだけど……」

サーヴァントについて、手短に要点だけ話す。つもりではあったが、何しろ話者がスバルなので無駄に長くなってしまうのはご愛嬌。

「……つい最近、似たようなのと会ったかしら」

「やっぱそこ気になるよな」

レイド・アストレア。あの監視塔での奴の在り方は、サーヴァントに近しい。ただ、アレは本来なら感情を持たない人形として使われるようだった。レイドの規格外さ故に、そのルールは破られてしまったが。要は、元々の用途は全く別だ、ということ。

「そこのルール破りしてくるレイドマジやべぇな。あいつに弱点とかあるのか？　過去見たところで何も変わらなくねえ？」

シャウラの言によれば、『弱点とかあるならあーしが突いてるッス！』だそう。同時代の人間までもがそう言うのであれば、やはり無駄なのでは。

「っと、やる前から諦めるとか俺らしくねえ」
――らしかった時期もあるにはあった。
――だが、その時期は既に通り過ぎた。
頬を叩く。そもそも、今は別の問題が目の前にあるのだ。そんなことに気を取られている場合ではない。
そうこう言っているうちに、スケルトンは掃討されていた。
『そろそろ着くね。みんな、気を引き締めてくれ』
ドクターの言葉の通り、すぐにそれは見えてきた。ガーフィールが囚われていたものと同じ、青い水晶。
スバルは驚きを隠せなかった。
「――レム？」
いいや、レムが囚われていること、それ自体はそこまで驚くようなことではない。
――着ているメイド服。
――手に握られた鎖鉄球。
その二つが、スバルに驚きを与えた。
「な、んで」
監視塔へと向かうに当たり、レムは旅装に着替えされられていた。それに、あの鎖鉄球を手に握れるような状態ではなかったはずだ。
なにせ、レムは――
「……ナツキさん、大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫だ。クソ、馬鹿か俺は。いや、馬鹿だ俺は。なんにしても、とりあえず助け出さなきゃならねえってのに」
レムを――青い水晶を睨みつける。必ず助け出す、という固い意思を込めて。もちろんそれは、水晶の中から、というだけの話ではない。
「ベア子。魔力、有り余ってるって言ってたな」
「そうなのよ。少しくらいなら、使ってもいいかしら」
スバルはベアトリスの手を、ベアトリスはスバルの手を。二人はそれぞれ互いの手を握る。離さないように、慈しむように、愛おしむように。
「アーチャー！　こっからは俺も戦える！　積極的参加、とまで行く

かはわからねえが、自分の身くらいは自分で守れる！」
　スバルがエミヤに声を飛ばす。鵜呑みにできるような内容ではなかった。しかし、その顔が、その目が、その声が。『できる』と自信に満ちていた。それがあって、なおも突っぱねるような男ではない。
「……了解した。その言葉信じさせてもらうぞ、ナツキ・スバル！　くれぐれも、失望させてくれるなよ！」
「おうよ！　行くぜ、ベア子！」
「言われるまでもないかしら！」
　初めに水晶に傷を付けたのは、文字通りの一番槍――クー・フーリンの朱槍（ゲイ・ボルク）。それに反応して、水晶から光線が放たれ――そして、爆ぜる。
「――エル・ミーニャ！」
　破滅の込められたマナの結晶、杭であり矢でもあるそれが、全ての光線を正面から相殺したからだ。
「ミーニャ！」
　それに続けて、スバルが叫ぶ。ベアトリスのそれよりは数の劣るそれを、水晶の根元に殺到させる。わざわざ根元に狙いを付けたのは、万が一にもレムを傷付けないようにするためだ。
「へぇえ！　嬢ちゃんに坊主、やるじゃねえか！　こりゃ負けてらんねえな……っと！　そらァ！」
　ケルトの朱槍使い、『剣』の固有結界使い、悪神の名を被った少年、災厄の席に立つ騎士を宿す少女、黄金の虎、幼女使いと大精霊、氷結の魔女、そして武闘派内政官。正直言って過剰戦力だ。
「いや僕は後ろで震えてるだけなんですがねぇ⁉　……ドーナ！」
　壁の裏に隠れ、さらに光線が迫る瞬間に地面を隆起させ、防ぎきる。これでも、生き汚さに関しては一流だ。伊達に死なないながらも実りのない商人生活を続けてきたわけではない。
「恨みますからね、ナツキさん……！　というか、なんで僕まで護衛を外されてるんですかねぇ⁉」
「何、君ならば自分の身くらいは守れるだろう、と思ったまでだ。現に、君は無事だ」

「よくこの惨状を見て無事って言えましたね!?　死んでないだけですが!?」
　オットーの身を案じてやってきたエミヤだったが、会話の中でまだ余裕がありそうだと判断する。
「私は前線に戻る。身を守るだけならどうにかなるだろう」
「ああもう、わかったよ！　足を引っ張るような真似はしたくありませんからね！　どうぞ行ってください！」
　覚悟を踏み固め、絞り出すようにして声を荒げる。生き残るだけなら、オットーの独壇場だ。
＊
「よし……！」
　今回の青水晶は、ガーフィールの時とは違い、修復と同時に氷の魔法まで使ってきた。修復速度はガーフィールの時ほどではなく、氷の魔法もエミリアの時ほどではなかったため、対応は容易だった。
　ほどなくして水晶は砕け散り、光の粒子となって青髪の少女へと収束する。
「――レム！」
　ベアトリスの手を引いて、レムの下へと駆け寄る。なんでメイド服なのかとか、なんで鉄球を持ってるのかとか、そんなことは二の次。
　とにかく、落ちる彼女を受け止めるために走る。
「――う」
「レム！」

　――だから、気付かなかった。

「……え？」
　額に発現した角。狂気に染まった瞳。そして――空中の彼女から伸びる、スバルの顔面へと迫る鎖鉄球。
「魔獣、魔獣魔獣魔獣――――魔女！」
「――――お」
　その状況を、その事実を。呑み込めたものはほとんどいない。

スイカか、あるいはトマトか何かをぶちまけたような光景が目の前にあった。
さっきまで金髪の縦ロールを上機嫌に揺らしていたベアトリスも、絶句して体が震えている。
「――大将ッ！」
ガーフィールは思わず叫んだ。が、そんなものはもう遅い。
「スバル！」
銀鈴の声音が空気を凍てつかせる。その声も、どこか震えていて。
「どういうことだよ、これ……」
藤丸が怒りを孕んだ声でそう呟く。その怒りは何に向けられたものかと言えば、もちろん自分に対してだ。何が過剰戦力だ。戦闘が終わったばかりだと言うのに、なんでこんなにも気を抜いていたんだ。

――そして、空間が静止する。

カルデアの面々を除いた全てが時を止め、彼らだけが古い時間、古い世界に取り残される。
何が起こったのか、なんて言うまでもない。

ナツキ・スバルは――助けたはずの青髪の少女、レムに殺されたのだ。

第17話　「ひとりじゃなにもできないから」

「どう、して……こんな……」
　目の前には、空中で静止した青髪の少女。その手から真っ直ぐに伸びる鎖は、スバルの頭を潰した鉄球に繋がっている。
「う、ぷ」
　気分が悪い。前回スバルが『死んだ』時は、光線に胸を貫かれていた。どちらも同じ『死』でこそあれ、それが与える印象はまるで違う。
　胸からどくどくと血を流す彼を見た時、焦燥感を覚えた。どうにかしなくては、と思った。
　だが、今は違う。絶望と無力感だけが心の中を支配している。それに、自分本位な自分自身に腹が立ってくる。死に方が違うくらいで、なんでこんなにも揺れ動いているのか、と。どちらにせよ、スバルは死んだ。
　彼の苦しみなどお構い無しに、『胸を貫かれて死ぬ姿より、頭を潰されて死ぬ姿の方が見ててつらい』なんて思ってしまう自分が許せなかった。
「ハイハイ。ストップだぜ、マスター」
　後ろから、頭に軽い手刀を受ける。軽薄なその口調は、親しみやすいような、あるいは却って近寄り難いような印象。
「……アンリ」
「色々考え込んでたって仕方がないですよ。それより、次に同じ失敗をしないように、多少なり話し合っといた方がいいと思いますよ？」
「そう、だね」
　心の隅で蹲っていた戦意を鼓舞して激励して、叩き起す。力み過ぎていた拳から力を抜いて、確固たる思いと共に握り直す。
「どうしよう、エミヤ」
　困った時、真っ先に相談したくなるのは彼だった。自分よりよっぽど落ち着きがあると言うのもそうだが、サーヴァントの中ではマシュの次くらいによく顔を合わせる相手だから、だろうか。
　いや、もっと簡単だ。彼なら、藤丸が目を背けようとしている『現

実』を、納得できる形で叩き付けてくれる。
「あの少女を水晶から出さない。それが最も簡単だと思うが、どうだろうか」
「うん。やっぱり、そうだよね」
スバルにとって、あの少女……レムはとても大事な存在のようだった。だから、そんな結論を出してしまうのが申し訳なくもあったけど。助けないか死ぬか、という話だ。きっと、スバルも納得してくれるはず。
アンリマユが青く発光する。その光がどんどん大きくなっていって、この空間全てを包み込み――
そして、『戻る』。
おそらく、前回『戻った』場所と同じ場所だろう。色々とリセットされてしまうのが残念ではあるが、スバルとちゃんと話して、特異点の謎に挑もう。
＊
何が起きたか分からない。レムの水晶を破壊して、それで。
「うぶ、ぶ……」
思い出して、理解する。夢と現の間をふらふらと行き来するような頭でも、それくらいはわかった。その途端、胃がひっくり返るような気持ち悪さを感じて嘔吐(えず)く。
――レムに、殺された。
初めてではない。屋敷に来たばかりの頃、彼女に殺されたことはある。けれども、それが衝撃を和らげる緩衝材になるわけではない。
それに、わからないことだらけだ。なぜレムが起きているのか。なぜレムはスバルを殺そうと――否、殺したのか。
頭の中で思考が行ったり来たり、ぐるぐると堂々巡りして、どこにも辿り着かない。一人でいくら考えてもわからなくて。握っていた小さな手に、さらに力を込めてしまう。
「スバル、痛いかしら。どうしたのよ」
近くから声が聞こえた。幼い声。何度聞いても飽きのこない、それどころかむしろ魅力が深まっていくような声。だけど、それを気にし

ている余裕はなくて。
「気持ち、悪――」
「――スバルッ！」
遠くから声が聞こえた。男の声。この短期間で友人と呼べるまでに言葉を交わした間柄、藤丸立香の声だ。
もやもやと渦巻く思考を振り払おうと、声がした方向に顔を向ける。それと同時に、疑問にも思う。
どうして藤丸は、あんなにも焦った声で、焦った顔で――

「魔獣、魔獣魔獣魔獣――――魔女！」

「――――え？」
横っ面に酷い衝撃のようなものを受けたような感覚があって、そこでスバルの意識は途絶えた。
＊
スバルとアンリマユの『同調』によって、カルデアの一行もスバルが『戻った』地点まで『戻る』。
「スバ――」
ル、と続けようとして、気付く。
――遠い。
この声では届かない位置に、彼はいる。そして、もっと致命的なことに気付いてしまった。
「――――っ！」
スバルが、ベアトリスと手を繋いでいる。その時点で、『戻った』場所が、先程とは違う地点であると理解出来た。だが、それで終わりではない。
――エミヤとの会話が、無駄になった。
スバルはベアトリスと手を繋いでいて、この場にはガーフィールがいて、オットーがいて、エミリアがいて。

そして、スバルの頭上には、鎖鉄球を握ったレムがいた。
「――スバルッ！」
肺から空気を絞り出して、全力で、届くように叫んだ。その声にスバルが反応して、こちらを向く。
だけど、どうにもならない。
「魔獣、魔獣魔獣魔獣――――魔女！」
「――――え？」
最期の瞬間、スバルのその顔を藤丸は見てしまった。縋るようにしてこちらを見て、何も気付かないまま、その表情を顔に貼り付けたまま――ひしゃげていく顔を。
次の瞬間、スバルの頭部は弾け、血霧と化す。
「なんで。なんで、なんでだ。なんでだよ」
スバルの最期、その瞬間の顔が心にこびりついて剥がれない。人というものが死体になるまでの、その一瞬の過程が胸中で何度も壊れたレコードのように繰り返される。
「おぇ、ぶ、ごぉえ……っ」
吐き気がおさまらない。目の奥が熱を持って、顔中の穴という穴から液体を垂れ流しているのがわかる。
スバルの肉体には、この時点で既に失われた機能だ。なにせ、顔そのものがない。藤丸は、それで苦しんでいる自分が、なんて贅沢なのだと叱りつけたくなる。
その思考が既におかしいのだと、わかってはいる。わかってはいるけれど、無力感ゆえに自罰的になってしまう。
どうしたらいい。どうしたらいい。どうしたらいい。どうしたらいいんだ。
そんな状態の藤丸をよそに、世界は静止する。
「かふっ、けほっ」
特異点から熱が失われる。それに伴って、藤丸の思考からも少しばかり熱が抜ける。
ほんの少しだけ冷静になって、考える。あの状況を、脳内で整理する。

スバルの最も近くにいるのが、手を繋いでいるベアトリス。次に、鎖鉄球の持ち主であるレム。そこから少し離れて、自分――藤丸立香。他のみんなは、さらに遠い。

何故そんなに遠くにいるのかと言えば、その理由は『気遣い』以外のなんでもない。異世界組はともかく、こちらのサーヴァント達も、スバルが持つレムへの思いの強さはわかっていた。だから、二人にしてやろうとした。スバルが手を引いたベアトリスは別として。

何故藤丸がその中で一番近くにいたのか。ただ単に身体能力的に、離れるのが一番遅かっただけ、とも言える。だが、本質はそうじゃない。

藤丸が、最も野次馬根性が強かった。二人にしてやればいいのに、どうしても見ていたかった。特にこれと言った理由がある訳でもないのに。

だから、だから藤丸は彼らから最も近い場所にいた。

だから、だから藤丸がどうにかしなくてはならない。

だから、だから藤丸は思考の渦に沈んだ。彼らを自分がどうにか助けるために。青い光が静止した世界に満ちるその瞬間まで。

――マシュやサーヴァント達に声を掛けられたのにも気付かずに。

また、『戻る』。

＊

思考は冷静。視界は明瞭、集中は適度。戻ってきたその瞬間にそれを見据える。指先を標的に向け、狙いは正確に、青髪の少女を撃ち抜く。

ここぞという時、藤丸の判断は早い。

「礼装起動（プラグ・セット）――ガンド！」

紡がれる言葉（ワード）はカルデア戦闘服を励起させる呪文（キー）だ。魔力が迸る感覚があって、それが指先から放出される。

「魔獣、魔獣魔獣魔じゅ――うッ!?」

「やった！　止めたぞ！」

ガンドは確かに青髪の少女に命中し、その動きを止める。ああ、確かに。確かに――青髪の少女の動きは、止めた。

「――――お」
だが、それだけ。ほんの刹那の差だった。ガンドが命中する前に、既に鉄球は投擲されていた。
藤丸の狙いは正確だった。『戻って』から撃つまでの時間は最速だった。それを喝采するが如く、鉄球は唸りを上げて血の華を咲かせた。
間違っていたのは、根本。藤丸が、たった一人でどうにかしようと言う傲慢な考えそのものが、間違いだった。
藤丸は、誰かの力を借りるべきだった。あるいは、誰かの言葉に耳を傾けるべきだった。
「ごめん、スバル……俺の判断が、間違ってたせいで、無駄に……」
スバルは応えない。情報を映像として取り込む眼球も、音として取り込む耳も、そもそも情報を受け取る脳も、既にない。さらに言えば、スバルの死によって、世界は静止している。だから、これは当然だ。
「ごめん、みんな。自分ひとりでどうにかしようとしてた」
マシュがいて、サーヴァント達がいて、今回はスバルやガーフィール、オットー、エミリア、ベアトリスもいる。
最初から、わかっていたはずなのだ。
藤丸は、ひとりで全てをどうにかできるような人間じゃない。誰かを頼って、頼って頼って、藤丸に任されるのは、ここぞと言う時の判断だけなのだと。
＊
また、『戻って』くる。
今度は間違えない。藤丸はやっぱり、どこまで行っても誰かの力を借りるしかない。
だから――、
「――ベアトリス！　防げ!!」
だから、自分よりスバルの近くにいる彼女に呼びかけるのが、最も正しい選択肢だった。
「――！　ミーニャ！」
「魔獣、魔獣魔獣魔獣――――魔女！」

叫びと共に投擲される鉄球。それに対抗するは、結晶化したマナの塊、破壊の杭。
しかし、正面からぶつかり合えばそのまま突破される可能性もある。故に、ベアトリスは少しだけ狙いをずらし、鉄球の側面に『ミーニャ』をぶち当てる。
結果、鉄球の軌道は逸れ、地面を削った。
「ムラク！」
ベアトリスはそう唱えると、呆けているスバルをしっかと掴み、重力を無視しているのかと思わせるような跳躍で距離をとった。
「たす、かったぜ。ベア子、藤丸……」
「フジマルが声を掛けなかったら危ないところだったかしら。それに免じて、命令したことには目をつぶってやるのよ」
ベアトリスの言う通り、藤丸が声を掛けていなかった場合は死んでいた。つまり、あの局面は藤丸の選択に委ねられていたということだろう。
無事に、いや、無事ではなかったのだが、突破できてよかった。
「それで、スバル。……どういうこと？」
「『鬼化』が極まって暴走してる。角に衝撃を与えれば、正気に戻るはずだ」
「……っ！　じゃあ、助けて良いんだね!?」
一時は、彼女を見捨てるという考えもあった。『戻った』タイミングもあってその選択肢は消えたが、それでも。助けたいと、そう思うスバルを裏切るのはつらかったから。
「当たり前だ！　じゃあ、頼むぜ藤丸！」
「うん！　じゃあ、頼んだよ、皆！」
スバルに預けられた信頼を、そのままサーヴァントのみんなに、藤丸の信頼もプラスして預ける。
自分ひとりじゃなにもできない、そんな彼らは目を合わせて、不敵に笑った。

第18話「分断」

狂気に染まった虚ろな瞳から、凍てつくような視線が刺さる。身が竦んで震えるのを、奥歯を噛んで誤魔化す。

「……来るぞ！」

青髪の少女が魔力を励起させ、何かを仕掛けてくる様子を見せた。巨大な氷の塊が空中に浮かび、先端をこちらに向ける。

「アル・ヒューマ！」

氷塊が飛来する。それをマシュが盾で受け止め、後退しつつもその勢いを殺す。そうするのがわかっていたので、クー・フーリンとエミヤは前進、攻撃の発生源へ走る。

二人に一歩遅れて、エミリアとガーフィールが続く。その二人の後ろを走るのが、氷を防ぎきったマシュ。藤丸は、さらにその後ろからマシュを追う。

「――――ッ！」

本能で危険を感じ取ったのか、青髪の少女が飛び退く。だが、サーヴァント達がその距離を詰めるのに、そう時間はかからない。

そう思った瞬間――足元の空間が裂けた。

この地点はさっきまで青髪の少女が立っていた場所。もっと言えば、水晶があった場所だ。

その場所が、どうして裂けたのかは分からない。地割れのようにも見えるが、その先は地面の中ではなく未知の空間だ。特異点という不安定な世界が、さらに不安定になった皺寄せ。それが、空間の断裂という形で現れた。

『……いじょ……い、藤ま……が、できな……』

「ドクター!?」

ノイズ混じり、と言うよりはノイズにドクターの声が混ざっていると言った方が正しいような、ほとんど聞き取れない通信が耳に届く。

その時にはもう、足場を失って落ちていた。エミヤが、クー・フーリンが、マシュが、ガーフィールが、エミリアが、藤丸が。全員が全員、その裂け目に巻き込まれて落ちていく。

「――スバル！」
何も出来ずに落ちていくよりは、と声を上げた。その声は二重に重なっていて、藤丸のものと、もうひとつはエミリアのものだ。が、それでどうなる。そもそも距離は遠く、助けは期待できない。
しかも、何故スバルの名を呼んでしまったんだ。あの中では、一番頼りにならない。いや、頼りにしてはいけない。
きっと彼は、これまでにも数々の修羅場をくぐって来たのだろうが、それは彼の持つ、死んだら時間が巻き戻るという特殊能力あってこそだ。
それ以外は、本当に普通の人間。藤丸と大して変わらない。違いがあるとすれば、それはスバルの方が前で戦っているということくらいだ。
本当は戦えるような人間じゃないはずなのに、戦っている。藤丸には、きっとできない。サーヴァントに魔力を提供するために、できる限り近付いてはいる。でも、敵と直接殴り合う、なんてことはできない。
だから、尊敬できる。でも、だからこそ、無理はさせたくない。じゃあ、どうして名前を呼んでしまったのか。
咄嗟に何かしようとして、出来ることが声を上げるくらいしかなくて。なんとなく、その名前を呼んでしまった。
「――ごめん、頑張って！」
「――こっちのことは気にしないで！」
藤丸の謝罪と激励に、エミリアの信頼が重なる。どちらも、自分を助けて欲しいなんて微塵も考えていない。そこにあるのは、残される者への想いのみ。
それを最後に、藤丸の意識は空間の狭間に吸い込まれていった。
＊
前に飛び込んだ全員が狭間に落ちていくのを、何も出来ないまま見届ける。
「藤丸の奴に、エミリアたんまで……自分がどうなるかもわかんねえのに、こっちの心配かよ」

「ナツキさんだって、同じ状況なら同じことするでしょう。似たもの同士ですよ」
鋭い指摘だ。それを受けて、スバルはほんの少し自省する。それが後に活かされるというわけでもないが。
「随分余裕だな、オットー。もしかして、エミリア陣営筆頭武闘派内政官殿にはこの状況を打開する策でもあんのか？」
「わざわざ長ったらしい二つ名で呼んでくれてる所悪いですが、そんなもんないですよ。そういうナツキさんも余裕そうですけど？」
「特に策がある訳じゃねえよ。けど、こっちにはオットーもいるし、ベア子も好調だ。割と何とかなるんじゃねえかと思ってる」
前に暴走したレムを止めた時は、ラムとスバルの二人だった。その上ラムは動けない状況だったので、実質スバル一人だったと言える。
ただし、ラムだからレムの気を引けたと言うのと、あの時はウルガルムの群れがいた。その違いが、今の状況に良く転ぶか、悪く転ぶか。
「ただやっぱ正面からの戦いってなると、非戦闘員だけだと……うぉわ!?」
暴力の嵐が横を通り過ぎて、地面が抉られる。何とか避けられたが、そうでなければ体が豆腐のように粉々にされていたのは言うまでもない。
だが、スバルは足を一歩も動かしていない。彼を破壊の射線上から退かしたのは、小さな一つの黒い影だった。
「おいおい、自分の命を無駄にしなさんな？　無防備が過ぎますよ、ホント」
「アヴェンジャーか……悪いな、助かった」
抱えられながら、横目で破壊の跡を視界に入れる。鎖に繋がれた鉄球は、引っ張り上げられて持ち主の元へと戻って行く。
スバルは地に下ろされて、まず初めに戦力を確認。内政官のオットー、精霊騎士のスバルとその精霊ベアトリス、最弱英霊のアンリマユ。
「よし、じゃあ俺が臭いでレムの気を引く。オットーは足音飛ばすやつで気を引いて、アヴェンジャーは……」

「オレ？　オレは、速さだけならちょっとしたもんですよ？」
「そうか。だったら、その速さを活かしてちょこまかして、レムの気を引いて……って、気を引いてばっかりだコレ!?」
　自分の立てた戦略がボロボロで自分にツッコミを入れる。気を引くだけでこちらから何も出来なかったら何も意味が無い。
「や、悪くない案だと思いますよ？　あんな状態なら、一点集中させたりしちゃ逆効果だ。注意の先を散らして、隙がありゃ叩けばいいんじゃねーの？」
「そう……か？　じゃあ、それで行こう。オットーとベア子もいいか？」
「めちゃくちゃ危険ですけどね……まあ、いいんじゃないですか？」
「ベティーも、文句はないのよ。スバルは安心して任せるかしら」
　二人が肯定する。それを合図として、スバルは意を決して息を吸い込む。
「とりあえず、全員耳を塞げ！　俺は、『死に戻り』して――」
　――心臓が大きく跳ねる。
　耳元で囁く声が聞こえるような気がして、悪寒が全身を走る。思わず叫び出したくなる感覚だが、スバルはそれを発散させる手段を持たない。影の手が脈打つ心臓を愛撫する。次の瞬間には、影の手は強く握り締められていた。
「ぐ、お……戻って、来た……っ！」
　苦痛に表情を歪め、それでも前を向く。
　レムの表情が明らかに強ばったのがわかる。魔女の残り香、その発生源であるスバルを睨みつけている。
「――魔女ッ！」
　地面が破裂し、砂埃が上がる。それがレムの踏み込みだと気付くのに数瞬かかる。
「ヒヒッ」
　最も早く反応したのはアンリマユ。正面からでは勝ち目はないと判断し、飛来する鉄球を繋ぐ鎖を奇形の短剣で絡めとる。
　鎖のちょうど中間を点として、鎖の主導権を奪い取る。伸びた鎖の

こちら側を百八十度ぶん回して、勢いそのままレムの元へと突撃させる――！

鎖の軌跡が半月を描き、着弾と同時に爆音が響く。砂塵が舞い、様子は伺い知れないが手痛い一撃になったはずだ。

「しかし無事だろうな？　助けるのが基本方針だから、大怪我とかされたら困るんだが……」

砂埃が晴れ、相手の姿が鮮明になっていくと共に、鎖がじゃらりと音を立てる。

「チ、そう上手くは行かねえか」

鉄球はレムの掌にきっちりと収まっている。ダメージを与えた様子は微塵もない。自分の武器で傷付く程やわではないようだ。それどころか――、

「うお、っと!?」

逆に鎖を絡めとった事が仇になる。アンリマユごと鎖が振り上げられ、そのまま地面に叩きつけられる。

「がァッ、クソ！　召喚されたてのオレだったら死んでるぞ……！」

体中の激痛を無視して、軽口を叩く。だが、本当に聖杯転臨までしていない素の防御力では、間違いなく死んでいたと思える。

「魔女……魔女……ッ！」

「オレには目もくれねえか。アイツに首ったけってワケだ」

そちらへ目線をやると、既にそこにはいない。単に逃げたとは思えないので、何か策があるはずだ。

「ヒューマ」

「うげぇ!?」

油断を見せたところに、氷弾が飛んできて頭に激突する。強い衝撃が頭を揺らし、意識が遠くなるのがわかる。

「少しだが、時間は稼いでやった。あとは上手くやれよ――ナツキ・スバル」

第19話　「モノクロの世界」

「う、ん……」
　体のあちこちから鈍痛を感じつつ、瞼を開く。藤丸は、雪の上に倒れているのだと理解した。
「いや、違う……砂だ」
　地面に手をついて立ち上がろうとして、初めの理解が間違っていたと気付く。雪のように思えたそれは、真っ白な砂だった。
　さらに周りを見渡して見れば、この場所は異常な程に色彩が欠けているのだとわかった。白と黒と、そのグラデーションのみで世界が成り立っている。
「起きたのね、フジマル。大丈夫？」
　狼狽えていたところに、後ろから声を掛けられる。聞くだけで心地よくなるような、銀鈴の声音――エミリアの声だ。
「体がちょっと痛いけど、まあ大丈夫」
「そうなの？　ん、だったら治癒魔法かけてあげるから大人しくして」
　言われた通りに大人しくしていると、エミリアが手をかざす。仄かな光に優しく暖められ、鈍痛が引いていく。
「……どう？」
「ありがとう、もう平気だよ」
「ん、そう。どういたしまして」
　満足気に笑みを浮かべる。その笑顔に危うく落ちかけたが、記憶の中に無数にあるマシュの笑顔がそれを打ち消す。
　エミリアが可愛くて美少女なのは間違いないが、藤丸の好みはマシュだ。『好みのタイプは？』と聞かれれば、ノータイムで『マシュ』と答える。
「……そうだ、マシュは!?　エミリアさん、他のみんなはどうなったか分かる!?」
「はぐれちゃったみたい。今一緒にいるのは三人だけよ」
「三人って、あと一人は……あ」

見ると、少しばかり離れた所に赤い槍を持った青タイツの男――ランサー、クー・フーリンがいた。
「おう、目が覚めたようで何よりだ」
「おはよう。俺が寝てる間に何か変わったことはなかった？」
「あー、特に大したことはなかったんだが……」
何か引っ掛かることがあるようだが、妙に言葉を詰まらせる。それでも、ほとんど間を開けずに話し始める。
「いや、な？　上から落ちてきたんだが、先にマスターと嬢ちゃんが落ちてきてたみたいでよ、気を失ってたんだ」
「うん」
「まず嬢ちゃんを起こしたんだ。で、その時にちょっとばかし『触った』んだが……」
「うん？」
含みのある物言いに、藤丸の思考が一つの回答を導き出す。その言葉に込められた含意は、間違いなくそういうことだろう。
「マシュだけじゃ飽き足らず、エミリアさんにまでそういうことしたの？」
藤丸の声には、静かな怒りが込められている。忘れることもない、特異点Ｆでの出来事。『なよっとしてるようでいい体してる』とかなんとか抜かしやがったセクハラオヤジのことを、忘れはしない。
それでも、頼りになる仲間として信頼を置いてきたのだが、事ここに及んでそんなことをするとは。
あの時のはキャスターの方だったから一応別だろうか。だが、どちらもクー・フーリンであることに変わりはない。
いや、驚きはない。彼にそういう面があるということはわかっている。だから、彼に何か制裁があるとするなら――
「スカサハに伝えておくね。ついでに女性スタッフや他の女性サーヴァントのみんなにも」
「おいおい、んな事されちゃあ飯もゆっくり食ってられねえじゃねえか」
「エミリアさんも、嫌なことされたんなら拒絶していいと思うよ？」

クー・フーリンの言葉に耳も貸さず、セクハラ被害、その当事者であるところのエミリアに話を振る。
「――？　体を触られただけでしょう？　スバルもフジマルも、みんなも言うけど、そんなに気にするようなこと？」
「え？」
絶句する。
こんなに可愛い綺麗な顔をして、それが気にならなくなるほどの男性経験を――いや、違う。逆だ。
彼女の仕草の端々から幼さのようなものを感じていたが、それは間違っていなかった。彼女は、外見年齢不相応な程に無垢な心を持っている。
未熟、という訳ではない。幼い、という訳でもない。未来の王となる候補者としての『威』は確かにある。しかし、それとはまた別のところで彼女は幼さ、無垢さを残している。
それを理解して、藤丸は一度深呼吸をする。
「まあ、こういうこった。ほんとに大したことじゃねえが、少しばかり驚かされたもんでな」
「『セタンタが幼い子の無垢な心に付け込んで酷いことをした』って言っておくね。この特異点での事が終わったら、とりあえず『貫き穿つ死翔の槍（ゲイボルク・オルタナティブ）』してくれるよう、スカサハに頼んでみるよ」
「幼名呼びは勘弁して欲しいのと、宝具まで使われたらシャレにならねえんだが!?」
地獄の具現（スカサハ宝具）こそ、不徳の報い（セクハラオシオキ）に相応しい。串刺しになってしまえばいい。
「へいへい。それで？　これからどうす――」
クー・フーリンはやれやれと言った様子で話を変えようとしたが、その瞬間彼の全身から闘気が溢れ出し、表情は鬼のように強ばる。
「――誰だ！」
「……」
どこからか現れた影。影は声に応えず、ただ両手に握られた刀を構える。

瞬間、大気の震えと共に影がその場から消える。
――否。消えたのではない。
消えたと錯覚するほどの速さ。おそらく音より速く、光の速さに匹敵する雷速で、二刀遣いが槍使いに踊りかかる。
藤丸には全く見えなかった。
魔術礼装による補助で、運動能力や動体視力は上がっているはずだが――彼の速さは、人間の知覚レベルを軽く上回っている。
「チッ、今の速さもそうだが……真っ先にオレを狙うとは。それに、その剣も何やら曰くありげだ」
狙った理由は言うまでもない。この中でクー・フーリンは、一撃必殺の手段を持っている。それを、本能で嗅ぎ取ったのだろう。
「――――」
二本の剣と一本の槍が火花を散らし、モノクロの世界を彩る。謎の剣士は、クー・フーリン相手に互角以上の戦いをしてみせる。
「えいや！」
槍使いとの戦いに集中し切っているその背中を、ハーフエルフの爪先が蹴り抜く。
意識外からの攻撃に謎の剣士は体勢を崩し、その間隙を縫って突きが肩を貫く。
「しぃっ――！」
必殺の一撃、とまでは行かない。宝具の真名開放が出来る程の隙を作ることは出来なかった。
「……」
「あ！　ごめん、邪魔しちゃいけなかった？　隙だらけだったから、つい……」
影が無言で向けてくる殺意に、エミリアが的外れな態度と言葉で返す。
「文句を言いてえって訳じゃねえだろうよ。単に敵として認められたってだけだ。しかし、そんなに攻撃的な嬢ちゃんだとは思わなかったな」
「そうなの？　私、結構ビシバシやるわよ？」

「ビシバシって最近あんまり聞かないね……」
妙に気が抜けてしまうが、敵はまだ健在。攻撃を二つ当てただけだ。
「やり合ってわかったが、ありゃ不完全だ」
「そうね。なんだか、本気を出せてないみたい」
直接やり合った二人には、相手の不完全さを肌で理解したようだ。
影のような容姿は本来のものではなく、恐らくは召喚の不完全さによるものだろう。その在り方は、おそらくシャドウサーヴァントに近しい。
本来ならなければならない、剣を振るうための『自我』が存在しない。技術をなぞり、肉体の性能を使っているのみ。また、その性能も出力が足りていない。
「それでも、相手が強くて、倒さなきゃいけないのは変わらない。話が通じるなら別だけど、そんな様子もない」
互いに睨み合う。この二人ならば、あの剣士相手に互角以上に戦えるのは間違いない。だが、クー・フーリンが宝具を開放さる隙を作らなければ、決め手には欠ける。
「だからそれが、俺がいる意味だ」
最大限、隙を作るために戦力を投入する。カルデアのマスターである彼を通して、サーヴァントの『影』を召喚する。
「来てくれ……！」

＊

――その一方で。
「……はっ!?」
「おや、起きたかねマシュ君」
目が覚めて、真っ先に目に入ってきたのは白髪と褐色の肌をして、黒いインナーを着たアーチャーだ。その声とその温かさに、安堵する。
「は、はい。しかしエミヤ先輩、これは……？」
マシュの体の下にはふかふかの布団があり、頭の下には程よく柔らかい枕。そしてふわふわの毛布が上から掛けられていた。

「なに、気絶して眠っていた君を起こすのもそのままにしておくのも忍びなくてね。少しばかり投影しただけさ」
布団から出て立ち上がったマシュを確認して、エミヤは寝具一式を消す。それらは、魔力として解けていった。
「師匠、目が覚めッてよかったぜ。『勇み足ジャグダムの逆恨み』みてェなのは御免ッだからなァ」
「ガーフ君も……心配をおかけしました。ですが、もう大丈夫です。マシュ・キリエライト、行けます！」
目覚めたばかりだが、いつまでも寝惚けている訳には行かない。両手で頬を思い切りひっぱたき、意識の完全な覚醒を促す。マスターの――先輩のお役に立ちたいから。
そこで、重大な見落としに気付く。
「あ、あれ!?　マスターはどこに!?　」
「どうやら、落ちた時にはぐれてしまったようでね。その上、この妙な世界……特異点であるのは間違いないように思えるが、しかし……」
エミヤの呟きを耳にして、辺りを見回す。白と黒の色のみで成立している、歪な世界。しかし、マシュは妙な感覚を覚えた。
――色彩が欠けているのはそう。しかし、与えられなかったのではなく、初めから無かったのではなく。何かの拍子に落っことしてしまったような。
「まずはマスターを探しましょう。きっと、この辺りのどこかにいるはずです」
そう口にして意志を固める。エミヤとガーフィールの二人も、それに頷いて同意。
歩みを進めるマシュ――
――そして、その首を狙う影がある。
「――伏せろ！」
そう言い放ち、即座に投影した白い刀身の短剣を投げ付ける。
目前にまで迫る短剣を、マシュは紙一重でかわす。それが襲撃者の得物――クナイを弾き飛ばしたのを確認して、霊体化させていた盾を現出させる。

どこから現れたのかわからない『影』。マシュの影に潜んでいたのではないかと思わせるほど。
「気配遮断……アサシンのサーヴァントか!?」
一撃目、不意打ちを防がれ、『影』は距離をとる。
その『影』が瞬く間に増えた。『影』の影――分身が多く現れるが、間違いなく本体は一つだけ。
モノクロの世界は、息をつく暇もなく戦場へとその様相を変化させる。盾使いの少年少女、そして双剣使いの弓兵は、影のシノビと相対する。
――三つに分断された彼らは、それぞれの越えるべき壁を睨みつけていた。

第２０話　「三つの壁」

息を切らし、肺が焼け付く苦痛を誤魔化す為に頬の内側を強く噛み締める。太腿と脹脛の筋肉が悲鳴を上げている。
「それで、今は必死こいて逃げてるだけなんですが、結局どうするつもりなんですかねぇ!?」
「建物とか壁とか、とにかく遮蔽物の多い場所まで誘い込む！　この辺じゃ勝ち目がねえ！」
「とは言っても、このままじゃすぐに追いつかれるかしら！」
スバルたちの走る速さと、あちらの走る速さは兎と亀ほどの違いがある。もたついていたら、今この瞬間にも追いつかれてしまう。
「そうだな、オットーはしっかり掴まってろ。頼んだぜ、ベア子！」
「わかったかしら。ムラク、なのよ！」
対象にかかる重力の影響に干渉する魔法――要するに、軽くする魔法だ。脚に力を込め、膝を軽く曲げて地面を蹴る。その勢いのまますっ飛んでいき、その速さは先程までとは比べ物にならない。
何やらオットーが騒いでいるが、そちらに気を回す余裕はない。あまりに大きい一歩を幾度も重ね、距離を確実に稼いでいく。これだけ離れていれば、すぐに追いつかれはしないだろう。
「ナツキさん、あ、あれ！」
「アレじゃわかんねえよ！　具体的に……うぉ!?」
オットーが指で前を指し示す。その意味するところにスバルも同時に気付き、足で地面を削りながら勢いを殺す。
指し示された先には――
「さすがに、立て続けに問題起こりすぎだろ……！」
遠くに、薄緑色の水晶を確認した。そして、そこに囚われているのは特徴的な桃色の髪をしたメイド少女――ラムだ。
「……今の戦力じゃ足りねえ、よな。アレも一緒に相手するとなると」
「アレって？」
「何の事なのよ？」
スバルの言葉に、二人が一瞬だけ無理解を示す。

もう一度水晶に意識を向け、そこに集(たか)っているモノを視界に収め――それを現実として呑み込むのにもう一瞬の時を必要として、困惑の声を先に漏らしたのはベアトリスだった。
「どういうことなのよ……」
見ると、水晶の根元に小さな白い毛玉のようなものが大量に蠢いている。三大魔獣の一、食欲の権化――『多兎』、転じて『大兎』。
「おかしいかしら。アレは、確かに……」
彼女は自身の記憶を確かめるように眉を寄せる。過去の記憶と現在の現実とが矛盾している。噛み合っていない。彼女の表情は険しくなっていく。
「てい」
「あぎゃーなのよ!?」
考え込むあまりに、下向きがちになるベアトリス。彼女の可愛らしく広い額に、スバルがデコピンを喰らわせる。
「あんまり眉間にシワ寄せんなよ。せっかくの可愛い顔が……いや、その顔もめちゃくちゃ可愛いな?」
「ベティーはスバルのベティーなのよ。いつでも可愛いのは当然かしら。……じゃなくて、何を真顔でふざけたことを言ってるのよ!?」
ぷんすかと可愛く怒りを露わにするベアトリスの、その頭にスバルが右手を置く。
「あんまし悩みすぎんなよ。殲滅出来てなかったとか、アルシャマク(あの魔法)で飛ばした先がここだったとか色々考えようはあるだろうが全部後回しだ。まずはこの状況をどうにかする。俺に、どんと任せとけ」
「そもそも悩んでなんかないかしら。それに、スバル一人に任せておけないのよ。むしろスバルの方こそ、ベティーにどーんと任せるかしら」
スバルの手を頭から振り払う。行き場をなくしたその右手を、ベアトリスの左手がしっかと繋ぎ止めた。それだけで、負ける気がしない。胸の奥から込み上げる頼もしさを互いに感じながら、目の前の障害を見据える。
その様子はどう見ても異常だ。水晶を齧っては防衛機能によって

大半が死に、その度に分裂、増殖、共喰いを繰り返し、また水晶を齧り始める。
水晶も抵抗しているが、修復も攻撃も間に合っていない。水晶が食い尽くされ、中にいるラムにその牙が届くのも時間の問題だ。
「どうするつもりかしら」
「まずは、レムを正気に戻す！　そのために……」
そこで一度、言葉を切る。スバルの無茶に二人を付き合わせることへの、一瞬の躊躇いがそうさせた。しかし、ベアトリスは何も言うことはないと強く手を握り、オットーは、不安そうながらも決意を帯びた眼を向けている。それを見て、呼吸と共に覚悟を握り固める。
「――無茶を承知で、アレを利用する！」

＊

藤丸が判断に使える時間は数瞬。あの異様な速さに追い付けるサーヴァントを。戦闘時のみの不完全な力としての『影』であっても、あの剣士と渡り合う必要がある。
「来てくれ……！」
呼び出すのは、何より速さが自慢の二騎。ギリシャ神話にて最速とうたわれる不死の英雄と、同じくギリシャ神話にてアルゴノーツの一員として知られる、純潔にして俊足の狩人。
「アキレウス！　アタランテ！」
威風堂々たる影が二体、藤丸の前に召喚される。共にギリシャ神話にて速さを誇る英雄。あの雷速にも対応できるだろう。白兵戦を苦手とするアタランテも、今回はカリュドーン（アタランテ・メタモローゼ）の皮を被った状態なので、戦闘力も申し分ない。
本来なら、というか同行しているのなら獣化のリスクなどを考慮するが、単に『力』として使い潰すのなら、ステータスが上昇するのでこちらの方が都合がいい。
ただし、影であっても大英雄であるアキレウスと、アタランテ・メタモローゼを召喚するとなると魔力消費が激しく、二騎が限界だった。とは言え、相手は一人、一般的な人間サイズ。あまり多すぎても、連携が困難になるので結果的にはよし、だ。

相手は積極的にクー・フーリンを狙ってくる。こちらの決め手となる攻撃が、彼の宝具のみであることを理解しているのだろう。
いくら影を呼び出しても、それはサーヴァント本体よりも劣ってしまう。アキレウス本人に言わせれば、影のアキレウスは踵を射抜かれた状態よりなお遅いらしい。
「頼んだ！」
影に指示を飛ばす。ただ、その速さに藤丸の指示が追いつけるはずも無いので内容は最小限。謎の剣士の集中を散らすこと、それだけ。あとは二人の判断に任せる。
二つの影が剣士へ飛びかかっていく。目にも留まらぬ速さ、と言うほどではないにしても超スピードで。
「……ッ」
槍と爪の攻撃を受け止め、いなす。そこに出来た一瞬の隙に氷の礫が飛び込み、脇腹を抉る。
「私がいること、忘れないでよね！」
エミリアが謎の剣士をキッと睨み付け、魔力を解放。青白い輝きを放つ氷の粒子が周囲に広がり、ある種の結界となって空間の支配権を握る。
剣士は一瞬だけ動きを止め、こちらの戦力を確認するように視線を向けた。
そこで、ようやく藤丸の目も相手の姿を捉えた。揺らめく影のようでわかりにくいが、和装で草履を履いているらしいことがわかった。
本来ならそれは真名のヒントであり、日本のサーヴァントだとわかるのだが――今回は異世界案件。あちら側の人間だとすれば、真名などわかるはずもない。
「……」
剣士は変わらず無言のまま、その草履を脱ぎ捨てた。その行為の意味を――
「え？」
考える暇もなく、それは結果として眼前に示されていた。
氷の盾に阻まれた二振りの刀がきちきちと音を立てている。本当

に一瞬、一刹那。草履を脱いだと理解するよりもおそらく早かった。
「アイスブランドアーツ・アイシクルライン」
ギリギリのところで藤丸の命を守った氷の盾は、エミリアの魔法によるものだ。空間に広がる氷の粒子は、彼女の意志によって如何様にもその形を変える。
次の瞬間には大気のひび割れるような音とともに、氷の武器が無数に現れる。エミリアの魔力と、スバルの発想によって生まれた絶対破壊領域、氷結結界アイシクルライン。
「うー、やあ！」
エミリアは氷の大戦鎚を手に取ると、それを思い切り振り下ろす。そのような大振りは当たるはずもないが、その一撃は地面を砕く。
草履を脱いでスピードが大幅に上がったことからもわかるように、速く動くには踏み込みが重要だ。当のエミリアにその思惑があったかどうかは別として、アレの動きを制限する手段としては悪くない。
「てや！　うりゃりゃ！」
気の抜ける掛け声とともに、それとは逆に苛烈なまでの攻撃。武器が砕けるのを前提とした、氷の物量で押し切る戦法。
「こりゃ、オレも負けてらんねぇなぁ！」
その美しく苛烈な戦法が、攻めあぐねていたクー・フーリンの魂に火をつける。
執拗に宝具解放の妨害をしてくる相手の、その剣を弾く。そしてその少しの隙を、二つの影がこじ開ける。
更に、その瞬間――
――空間が、揺らいだ。
まるでこの空間を構成する根底が弱まったように、この空間という存在の基底そのものが罅割れるがごとく。
「刺し穿つ――」
それだけの時間があれば宝具の真名解放には充分。しかし、この時点ではまだ因果を逆転させる呪いは発動していない。
発動前に効果範囲外に出てしまえば、心臓を貫かれるには至らない。そしてそれは、彼のスピードであれば造作もないことだった――

が。
「……ッ！」
剣士は蹲ったまま動かなかった。おそらく、彼はこの空間に根ざしたもの。先程起きた揺らぎの影響を強く受けたのだろう。
呪いは既に発動した。
槍の穂先は剣士の心臓に狙いを定めた。
「死棘の槍（ボルク）――！」
＊
ウェアウルフの如き影のシノビが、あちこちから襲いかかって来る。更にあらゆる方向からクナイが飛んでくるので、その対処にも追われる。
「チィ、『カマラの籠城戦』じゃァねえかよォ！」
襲い来る影を拳で抉り飛ばしながら、上下の歯をガチガチと鳴らす。いくら影を倒してもキリがない。
「攻めにくい、という意味で良いのかな？　確かに、敵がどこにいるかもわからず、その上で本体を見つけなければならない」
弓に矢を番え、引き絞りつつエミヤがそう言う。その矢は赤原猟犬（フルンディング）、射手が健在である限り敵を追尾し続ける剣。
「フッ！」
引き放つ。剣であり矢でもあるそれは、一直線に目標を射貫く。さらに軌道を変え、続けて幾つもの影を射抜いた。勢いが弱まったところで、内に秘める魔力を、神秘を、爆発力に転化する。
「数を減らしてはいるが、手応えは無いな。本体を倒さねばなるまい」
「ですが、場所がわからないことには……」
飛んできたクナイをマシュが盾で弾くと、それは解けて魔力となり、空気に溶けていった。
「木々に隠れられるのが面倒だ。こちらの領域に引き込むとしよう」
彼の心象、無限に剣の突き刺さった荒野。そこへ相手を引き込むことが出来れば、隠れられる場所は大きく制限される。
「体は剣で出来ている（I am the bone of my sword）」
紡がれる呪文は、彼の奥義たる固有結界を発動させるための自己暗

示。自らを剣とし、剣を自らとする意味を持つ呪言。
心象で世界を塗りつぶす絶技、魔術の最奥――しかしそれは、不発に終わる。
「……っ、ぐ!?」
固有結界と言うものは、世界の法則を捻じ曲げ、塗りつぶし、侵蝕する異物。そうであるが故に、世界そのものからの修正力を受ける。
しかし、それでも本来は数分程度ならば維持できるもの。今のように、発動さえ阻害されるような力ではない。
この空間とエミヤの固有結界が干渉しあった結果か、彼の固有結界は不発に終わったが――その代わりに、空間が大きく揺らいだ。
景色全体が歪み、ひび割れてねじ切れるような感覚があって、一瞬の後には元に戻っていた。
「何が起こりッやがったァ……？」
「今の感覚……まさか、この空間は……」
アーチャーが、何か思い当たるようなことがあるように思考を巡らす。だが、それを考える前に目の前の状況を確認――こちらにとって、大いに有利な状況だった。
この空間と強く結びついていたのか、影のシノビが軒並み消滅していく。そして、動いてはいないが消滅もしない影が一つ、少し遠くに見えた。
「意図していた形とは違うが……好都合！」
その影に狙いを定め、引き放つ。偽・螺旋剣（カラドボルグII）の虹霓が影を引き裂き、壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）によって跡形もなく消え去った。
＊
分断された三つの内、二つが壁を乗り越えた。
残る壁は、一つ。

第21話「二つ目の一番星」

「……ウ」

体が熱い。胸が熱い。頭が熱い。心臓が熱い。角が熱い。魔獣の臭いと、魔女の残り香が感覚を狂わせる。

悪臭を辿って走る。例えどこまで逃げようとも、他の誰も気付かなくとも、その悪臭の発生源を見失うことはない。

――「大丈夫。お前は俺を見失わない」

――「他の誰も気付かなくても、お前だけは俺の臭いに気付く。俺の身にまとう悪臭に、咎人の残り香に――そうだろ？」

「……？」

灼熱する思考の隙に響く声がある。それがなんだったかと考える余裕はなく、逃げていった悪臭源を仕留めることだけが今の目的。

走る。走る。走る――。

「……え」

走り抜けた先で、思わず足を止めた。悪臭を辿ることも忘れて、目の前のそれに釘付けになった。

蠢く白い毛玉。その白い毛玉に集(たか)られる緑色の水晶。そして、そこに囚われている、桃色の髪をしたメイド――レムの姉、ラムに。

「――姉様」

考える前に、体が動いていた。

レムの手から離れた鉄球は地面を抉り砂埃を上げ、数匹の兎は断末魔さえ上げることなく、血溜まりを残して消え去る。

「あああぁァァァッ！」

静止する鉄球に掴まって空中で一回転。足蹴りで兎を吹き飛ばし、踵落としで潰し殺す。

次の一手、鉄球を水晶めがけて投擲。その小柄な体躯に見合わない、鬼の膂力を以て水晶を破壊にかかる。

「姉様……今、そこから」

助け出さなくてはならない。自分なんかが助けずとも、姉様ならば自力で抜け出せるかもしれない。でも、だからこそ――助けずにはい

られない。
だが、まだその思考に入るのは早すぎた。
助ける前に、大兎に囲まれているこの状況では、ラムを助けるどころかレムも助からない。なのに、一瞬でも大兎から意識を逸らしてしまった。
だから、後ろから迫る牙への反応が遅れた。
「――――ッ！」
気付けなかった。否、気付けなかった訳ではない。気付きはしたが、致命的に遅れていた。反応できない、咄嗟に体を動かせない。体を動かせても、避けられない。
無限にさえ思える刹那の思考、その果てに。
その思考は無価値となる。為す術なく、その牙はレムの首に――
「――エル・ミーニャ」
食らいつく前に、紫炎を纏った杭に貫かれた。
＊
時間は少し遡る。
「利用する、って……どういうことですか？」
「言ったまんまだよ。あの水晶と大兎とでレムの気を引いてもらう。んで、隙ができたところにこいつで角に一発ぶち込む」
束ねた鞭の感覚を確かめる。握り心地は悪くない。今ある攻撃方法のうちでほぼ唯一、レムの角を折らずに一撃をかませる手段だ。
「危険、どころの話じゃないかしら」
「もちろん、安全な方法があるならそっちを選ぶし、遠距離からベア子の魔法で狙い撃つって手もあるにはあったんだが……」
ベアトリスの魔法『ミーニャ』の威力では角を折ってしまう可能性が十分にある。それは彼女自身もわかっているようなので、その先は言葉にしない。
「……スバルが大兎の群れに飛び込めば、まず間違いなく死ぬかしら」
「そうだな。だから、そうならないためのベア子だ。レムも俺も、誰も死ななくて済むように」
そしてスバルは、特大の無茶をベアトリスに押し付ける。だがそれ

は、彼が彼女を信頼しているからこそ。
「全滅は無理として、襲いかかって来るやつを頼む。時間稼ぎさえ出来れば、それでいい」
＊
破滅の杭に穿たれた兎は、そのまま地面に落下。その死体を食べに、さらに兎が群がって来る。死肉に群がるハイエナ、それ以上におぞましい何かだ。
「本当に、無茶を言う契約者なのよ」
襲いかかって来るやつだけを魔法で撃退してくれればいい、ということだったが、ここまで至近距離に来ればその殆どが襲ってくる。前にやったように『アル・シャマク』で全部まとめて、という方がよっぽど楽だ。
ただ、魔力も足りない上に、やるとしたら双子を巻き込んでしまう。そのため、その方法はそもそも除外していた。
魔力によって生成された四十ほどの杭を、それぞれ全く違う軌道で動かし、自分を襲ってくる兎や、レムが反応できなかった兎を的確に穿っていく。
「あまり長くはもたないのよ。なるべく早く済ませて欲しいかしら！」
僅かに張り上げられた声には、ほんの少しの焦りと、それを補って余りある信頼が込められていた。それがわかるから、スバルとしても失敗するわけにはいかない。
「ああ。やってやるぜ、ベア子。――――レム！」
それは相棒の信頼への返答であり、二つ目の一番星への宣言だ。彼女の声をもう一度聞くために。そして何より――、
「――笑え、レム」
彼女の、笑顔を見るために。
「何度でも言うぞ」
バクバクと心音がうるさい。これまで手の届かなかった、彼女の笑顔がすぐ先にあるかもしれない――そう考えると、緊張と武者震いで鞭を上手く握れなくなる。

喉が熱くて熱くて仕方なくて、喘ぐように空気を取り入れる。そして、それを想いと共に吐き出す。
「恐い顔してねぇで笑え、レム！　――俺は『死に……』
いつかの時と同じ言葉を。いつかの時よりもっと強い想いを込めて。心臓を握り潰されるような苦痛を覚悟して、高らかに愛を叫ぶ。
暗く昏い闇の中に一人取り残されたような感覚と、それでもなお擦り寄ってきて、愛を囁く黒い靄。スバルがその愛に溺れてしまわないのは、その愛を突っぱねられるのは、同じくスバルも、愛を届けたい相手がいるからだ。
視界が、晴れていく。
「戻って……きた……っ！」
身体中から嫌な汗が吹き出ているが、それに気を取られている暇はない。少しでも遅れてしまえば、一瞬にして鉄球のサビ、もしくは大兎の餌だ。
「今だ、オットー！」
「こ、これほんとに大丈夫なんですかねえ!?」
「さあ、大丈夫じゃないかもな！」
「そこは嘘でも大丈夫だって言ってくださいよ！　ええい、やりますよ、やりゃあいいんでしょう!?　――ドーナ！」
それは地属性の魔法。スバルの足元から勢い良く大地が隆起し、そのままスバルは空中へと投げ出される。かつてと同じ状況。あの時は、敵の魔獣が使う魔法によって投げ出されたのだったが。
どう頑張っても後戻りの出来ない状況に身を置く背水の陣。これくらいしなければ、経験則からして腰が引ける。
「うおわぁぁぁぁあっ!?」
空に打ち上げられたスバルだが、それで追われなくなる訳ではない。大兎は、互いを蹴落とし牙を向けあいつつ、届かないながらも積み重なるようにしてスバルに食らいつこうとする。
それはつまり、ひとかたまりになっているということで。
「ベア子！」
「――『シャマク』、なのよ！」

ベアトリスの手から放たれる黒い霧が、大兎を丸ごと覆っていく。意識と肉体とを分断する魔法であり、食欲のみで動いている大兎にどれほど効果があるかは不明だが、一時的な足止めくらいにはなるだろう。

「これで、お前だけに集中できる」

彼女を見据える。あちらもこちらを見据えていて、自然、見つめ合う形になる。

本当のことを言うと、魔女の残り香に釣られてスケルトンも集まってこようとしているので、完全に彼女だけに集中できる状況ではない。

だが、それでも。

この一瞬、この一刹那だけに限れば。

「――笑え」

腰の鞭を、力の限り握り締める。そしてレムの額、その一点を目掛け――振り抜く。

「レム――!!」

鞭の先端は音速をも超える。たとえレムでも、それを空中で躱すことは難しいだろう。

だが。

無情にも、その鞭は空を切った。

「な……」

握り締める力が強く、力み過ぎてしまったからか。あるいは、前と同じ展開をなぞろうとしたせいで、空振りの運命さえも引き寄せてしまったか。

洒落にならない。ここで失敗したと言うことは、次の瞬間に鉄球がスバルの頭蓋を粉砕する未来が確定したようなもの。事実、目の前まで鉄球(死)は迫ってきていて――、

「――――?」

だが、その未来がやって来ることはなかった。スバルの頭蓋、それどころか額にさえ傷を残さず。

「う、おぉ!」

落ちる。当たろうが当たらまいがこうなるのは必然。前回は着地に失敗して盛大に肩の骨を外してしまったが、パルクールを習得した彼は同じ轍を踏まない。五点着地と前転で衝撃を分散し、ほぼ無傷で生還する。

あと数センチ、という所で横槍が入ったらしい。いや、槍と言うよりは――短剣。鎖を絡めとったその異形の短剣を、スバルは既に目にしている。

「ヒヒッ」

スバルの意識外より現れた彼は、同じくレムの意識外から現れた者でもある。そして彼は高い敏捷を活かし、影を縫うようにしてレムの背後に回る。

両腕を両腕で抑え込む、羽交い締め。しかし悪神の偽物たる彼の貧弱な筋力では、鬼の膂力には敵わない。それでも、ほんの一瞬だけその動きを止めさえすれば、それだけで充分だった。

「やれ！　――ナツキ・スバル!!」

「お、ぉぉぉぉぉぉ！」

スバルの着地点は、レムの着地点の目と鼻の先。振り向けば、そこには光り輝く角がある。

あまりに近くて、鞭を振るう余裕さえなく。

気付けば、まるで殴りかかるが如く。

鞭のグリップエンドが角に引き寄せられるような錯覚があって、一瞬の後に鈍い音が響く。

――クリーン・ヒット。

ほんの少しの期待と、大きな不安が胸中を占めていて。彼女が目覚めてくれることを、何度願ったかわからない。眠ったままの彼女を背負った時、いやに軽く感じたことは忘れられなくて。

だからこそ。

倒れ込む彼女を支えた、この瞬間。

彼女に『生』の重みがあったことが、たまらなく嬉しかった。

第22話　「忘れた頃に」

紅き槍が心臓を穿った。それは必殺の一撃であり、因果逆転の呪い。真名解放がなされた時点で、高ランクの直感や高い幸運を併せ持っていない限り、この結果は必然。

だからこそ、油断など一片たりともしていなかったとしても。勝利を確信したその一瞬に、隙が出来てしまう。

「……は」

槍が敵の心臓を貫いているのと同様に、二振りの刀も彼を貫いていた。

「ただではやられねえ、ってか」

彼はスキル『戦闘続行』を有するが故に致命にはならないが、それでも相当のダメージだ。肉は裂け、夥しい量の血が流れ出している。

その一方で心臓を貫かれた二刀の剣士は、強者との戦いを充分に楽しんだとでも言うように、微かな笑みを浮かべていた。

「――『青き雷光』、セシルス・セグムント」

最期の瞬間、雷速の剣士はその一言だけを遺して消えていった。

「……名乗るんなら、最初に名乗れってんだ」

傷口からどくどくと血を流しながら、吐き捨てるように言う。そんな彼もまた、どこか満足げな表情を浮かべていた。

「だ、大丈夫なの、それ？」

「この程度大したことじゃ……おっと、と……」

振り返って踏み出そうとした瞬間、体の軸がぶれてふらつく。倒れかけたその体を、咄嗟にエミリアが肩を掴んで押し留め、強制的にその場に座らせる。

「大人しくして。今、治癒魔法かけてあげるから」

「お、おう。悪いな、嬢ちゃん」

エミリアが両手を患部にかざすと、柔らかな暖かい光が傷を癒していく。みるみるうちに傷は塞がり、呼吸も整ってくる。

「ありがとよ、もう平気だ」

「ほんとに？　本当に大丈夫なの？」

「おう。ちょいと手を貸してくれるか」
　そう言ってクー・フーリンが手を差し出すと、エミリアも言われるがままに手を差し伸べる。エミリアの力を借りつつだが、何も無かったかのように立ち上がった。
「な？」
「……そうね、本当に平気みたい。すごーく丈夫なのね」
「あぁ。でなきゃ英霊にまでなってねえし、サーヴァントなんてやってる意味がねえ」
　クー・フーリンの耐久ステータスはCランクだが、保有スキル『戦闘続行』や、何より彼自身の精神性によって、サーヴァント中でもしぶとさで彼の右に出られるものは少ない。
「それじゃあ、他のみんなと合流しなくちゃ！」
　そう言って、エミリアは張り切って駆け出していく。その背中を追いかける前に、藤丸は隣のクー・フーリンに問い掛ける。
「なんで、嘘を？」
「……やっぱり、マスターにはバレるか」
　魔力のパスが繋がっているから、ある程度サーヴァントのコンディションもわかる。今のクー・フーリンは、外見を取り繕っているだけ。エミリアの治癒魔法も、効き目が弱かったようだ。
「使ってる魔力が根本から違うせいだろうな。オレ達みたいな霊体には効果が薄いらしい」
「じゃあ、回復を……」
「いや、いい。さっきので霊核をやられてな。あと一撃、いいのを喰らえばそれで終いってとこだ。回復したところで大差ねえ」
　彼の声音に、考えを改める余地はありそうにない。どちらにしてもあと一撃で終わり。一足先に彼はカルデアに送還されることになるだろう。
「それよりも、だ。あの嬢ちゃんのことだが……」
「エミリアさんがどうかしたの？」
　彼の態度に疑問を覚えた藤丸が聞き返した。一瞬の逡巡の後、彼はゆっくりと口を開く。

「あの嬢ちゃんだが……生身じゃねえ。さっきと今とで二回触れてわかったが、ありゃ魔力で構成された肉体だ」
「さっきと今……？　え、じゃあセクハラした訳じゃないの？」
「食いつくとこそこかよ!?」
　本題からズレた藤丸の物言いに、クー・フーリンのツッコミが冴え渡る。疑惑が解けたとは言え、そういう形で話を脱線させられるのは不本意だった。
「魔力で構成された肉体……ってことは、つまりどういうこと……？」
「さあな。異世界の住人なら、元々そういう生態ってこともあるだろうさ。あるいは……」
「『サーヴァント』……とか？」
「その可能性もあるって話だ。思考の隅にでも残しとけ」
　少し先に行ってしまったエミリアが、振り返ってこちらに手を振っている。謎は残るが、今はとにかく先に進む。とりあえずは、はぐれてしまった皆と合流しなくては。

＊

　目的の達成、その瞬間をもってこの場に留まる理由は無くなった。アンリマユはオットーを担ぎ、スバルはベアトリスを肩車した上でレムを腕に抱えている。
　アンリマユは自前の高い敏捷でその場を離脱、スバル達もベアトリスの『ムラク』を最大限発揮して高速でその場を離れる。
　大兎からはそう簡単に逃げられるものでは無いが、あの水晶の迎撃機能のことも考えるなら、ある程度距離を取ればそれ以降は比較的簡単に逃げ切れる。
「羨ましい限りだが、そろそろキツくなって来たんじゃない？　どっちか片方くらい、オレに任せてくれちゃってもいいんだぞー？」
「馬鹿言え。どっちも手放せねえし、手放したくないからこの状態で走ってんだ。羽のように軽……くはねえけど、だからこそ、頑張れる」
　レムから伝わってくる生々しい重み。それを自分の腕で感じていることが嬉しくて、その喜びを心底から噛み締めている。湧いてくる

活力は実質無限だ。
「ベティーも、スバルから離れるつもりはないかしら。それでも、無理しすぎは良くないのよ。もし大変なら、言ってくれれば……」
「ベア子が俺を運ぶ、か？　気持ちは嬉しいけど……レムの前で、そんなかっこ悪いことできねえよ」
「いや、オットーにこのまま担がせるのよ」
「なんでその話の流れで僕の名前が出てくるんですかねえ!?　三人まとめて肩車とか、無茶にも程がありますからね!?」
　ツッコミを入れるオットーだが、周囲を警戒してか妙に小声だ。それがおかしくて、スバルは笑ってしまう。
「……と、ここまで離れりゃ少しは落ち着ける……よな？」
「そうですね、油断は禁物ですが」
　ムラクで軽くしているとは言え、美幼女と美少女をいっぺんに抱えて走り続けるというのは、そろそろ限界がくる。
「重さより何より密着度が高すぎて心拍数がやべぇわ。ここらで少し離れとかないと健全な男子的には刺激が強すぎて死ねる」
「そりゃまた贅沢な事で……」
「なんだよ、そういう話がなかったわけでもないくせに。棒に振ったのはお前だろうが、奴隷二号？」
「その話蒸し返すのやめてくれませんかねぇ!?　あれで良かったって何度も言ってますが!?」
　軽口を交わしつつ、スバルはレムを一旦下ろす。壁にもたれかけさせるようにして、姿勢を安定させた。
「そういや、この辺の地形なんか妙に見覚えある気がするな」
「ここら辺は最初に僕がいた場所ですよ。急に変なところに放り出されて、ナツキさんとガーフィールが助けに来てくれなかったら危ないところでした」
「ああ、だからか……うん？」
　オットーの言葉に、どこか引っ掛かりを覚える。この場所のこと、スバル単独ではなく、ガーフィールを伴って助けに来たこと。
「どうかしましたか？」

「いや、なーんか忘れてるような気が……あ」
　周囲を見渡して、その引っ掛かりの正体に思い当たる。視界の端、少し離れたところに数十にも及ぶ石像――否、石化した人々が。
「ああ、成程……どおりで、見覚えがある訳だ」
　こちらに来て奴と出くわした時、胸に突き刺されたそれに正体不明の既視感を覚えていたが――今なら、それがなんだったのか分かる。
「メドゥーサ（ラダー）……」
　そう呟くスバルの視線の先には、人影が一つ。ゆっくりと、しかし確実にこちらに歩みを進めている。
「えっと……敵、でいいんですかね？」
「ヒヒ、なんなら『オレたちは戦うつもりはありません』って言ってみます？　殺されて終わりでしょうがね！」
「敵で間違いねえよ。やらなきゃ、こっちが殺られる」
　敵を見据える。影のようなその姿からして、シャドウサーヴァントというやつだろう。
　本来のサーヴァントよりも弱体化しているということだったが、この戦力でどこまでやれるかは微妙なところ。
「こっちで一番戦えるのがアンリマユ（アヴェンジャー）、次点でオットーってとこだが……やれそう？」
　スバルとベアトリスは、二人合わせて（ペア）後方支援がせいぜい。オットーも、スバルよりは強い程度。必然、最弱英霊である彼がこちらの最高戦力となる。
「無茶だな！　この場はどうにか誤魔化して退散するってのが最適解でショウ！」
「だろうと思ったよ、知ってた！　じゃあ、その方法を考えなきゃだな……あ？」
「ナツキさん？　どうかしましたか？」
　体に違和感。そして次の瞬間には、指先さえ動かせなくなっていた。間違いなく、石化の魔眼（キュベレイ）に視られている。
　まだ具体的に石化した訳ではないが、それでもスバルの身は石化されたように動かなくなっていた。

「く……！」
無防備、隙だらけ。『見たものを石に変える』伝承を持つゴルゴンの怪物、メドゥーサ。彼女を前にすれば、その状態になるのは当然の帰結。
そうして格好の的になった彼に高速接近。高い敏捷でそれを妨害すべく動いたアンリマユも、その怪力の前に撥ね除けられる。
耐久が低いとは言え、アンリマユもサーヴァント。それがこの扱いだ。もしスバルがその攻撃を喰らえば、即死だろう。
そして、その『もし死』は。
――もう、彼の眼前まで迫ってきていて。
「……あ」
ごしゃり、と音がする。
脳天に響く音は、潰れるような、嫌な音。その後を引くように、じゃらじゃらと鎖の音が耳の奥に残る。
――耳？
頭を潰された筈。なぜ、まだ音が聞こえるのか。
「あ……れ？」
声が出る。死ぬどころか、身体さえ動くようになっている。
「――な」
――鎖の音、だ。
「――るな」
スバルの頭は潰れていない。ならば、さっきの潰れる音は何か。
その答えは、言うまでもないだろう。
「――スバルくんに、触るなァァァァァ！」

第23話　「過去からの来訪者」

スバルの命が打ち砕かれようというその瞬間、横槍が入れられた。いや、横槍ではなく横鉄球とでも言うべきか――ともかく、レムの持つ護身用棘鉄球（モーニングスター）が、シャドウライダーを吹き飛ばしたのだ。

――であれば、もちろん言うまでもなく。

「あ……」

揺れる青髪と、その下から覗く青い瞳。

「スバルくん、お怪我はありませんか!?」

そして、長い間聴けなかったその声。

「レ、ム……」

「はい。スバルくんのレムです。お身体に異常はありませんか?」

今までどうやっても得られなかったものが、そこにはあった。言葉にならない想いが胸の奥から溢れてきて、スバルは暫し呆けてしまう。

「スバルに怪我はないのよ。褒めてやるかしら」

言葉の出ないスバルの代わりに口を開いたのは、スバルの契約精霊――ベアトリスだ。その手はスバルの手と繋がれており、その様相は兄妹のようですらあった。

「あ、ありがとうございます、ベアトリス様……?」

困惑を隠せない、といった顔のレム。その視線は、繋がれた二人の手に注がれていて。

「……スバルくん」

「れ、レムさん?」

少しの間考え込むような態度を見せ、それから覚悟を決めたようにまっすぐスバルを見据える。

「レムにも、あとでお願いします!」

彼女が沈黙を破りそう言い放つと、踏み込みで足元が爆ぜる。

「しゃあぁぁァ――ッ!」

吹き飛ばされた先から復帰したシャドウライダーに、レムが正面から立ち向かう。鬼の剛腕が鉄球を振り抜き、その鎖と敵の鎖とを絡ま

せて武器を封じる。
　そして出来た隙を逃さず、その鉄拳を――
「――ッ!?」
　叩き込もうとして、その身が硬直する。隙を作ったつもりで、逆に誘い込まれていた。敵の真正面で、致命的な隙を晒していた。
「……と、とにかく援護だ！　ベア子！」
「わかったかしら。『ミーニャ』なのよ！」
　紫炎を纏う破滅の杭。狙いは頭部、あわよくば眼を。頭を潰せば勝利なのはもちろん、掠るだけでもそれが眼なら魔眼を封じられる。
　そうでなくとも、頭部を狙われれば当然避けるだろう。視線を一点に集中させないことで――
「――動く！」
　少なくとも、隙だらけのレムが一方的に嬲られるようなことにはならない。させるつもりもない。
　身体の自由を取り戻したレムは、すぐさま胴に蹴りを入れた。体勢を崩しつつ、反動を利用して距離をとる。
「……さて」
　アレを倒すのに、一手足りない。アヴェンジャーは完全にスペックで負けていて、それはオットーも同じ。レムとベアトリスでどうにか、やられないように立ち回れる程度。
「……あ」
　考えを巡らすスバルの頭に、一筋の閃光が走る。
「アヴェンジャー！　怪我は!?」
　そういえば、と思い出した。先程、シャドウライダーがスバルを狙った時。それを阻止せんとした彼が吹き飛ばされていたことを。
「オレの心配か？　結構だけど、今は他にすることあるんじゃない？」
「そんなことねえよ。今、一番重要なことだ」
　スバルの迷いない言葉に、一瞬だけ浮かべていた疑問を撤回する。彼の言葉の意図を理解したアンリマユは、観念したとでも言うように自身の状態を声に出す。
「右足が動かねぇ。マスターが近くにいりゃまた違うんだろうが、そ

うじゃなきゃ聖杯転臨もほぼ無意味。最弱英霊の面目躍如ってとこだよ」
「――魔力は？」
その問い掛けに、アンリマユはニッと口角を吊り上げて言う。
「足りねえ」
「嘘だろ!?」
流れが完全に断ち切られた。想定と違う返しにスバルは困惑、つい声を荒らげてしまう。
「嘘じゃねぇ。マスターから離れてるせいで魔力供給が途絶えてるからな。だが、方法が無いわけでもない」
「その、方法ってのは……」
「何、難しい話じゃない。アンタから魔力を貰うってだけだ」
「……できるのか？」
お世辞にもスバルの魔力は褒められたものでは無い。才能もなく、ゲートすら無茶のせいでズタボロになっている。そして、なけなしの魔力も――、
「スバルの魔力はベティーが貰ってるかしら。そう簡単に渡せるものでもないのよ」
「いいや、そうでもねえさ。今、オレとスバル（こいつ）は同調――魔力の経路（パス）が繋がってる。要するに、サブマスター的なことになってるわけよ」
「だとしても、お前にやれるだけの魔力がない……と、思うんだが」
たとえ繋がっているとしたって、先程も言ったようにそのなけなしの魔力はベアトリスに持って行かれている。
それでも、可能だと彼は言葉を続ける。
「サブマスター、とは言ったが単純な主従関係じゃねえ。こっちも、ある程度そっちの状態は理解出来る――もっと言えば、今のアンタが気付いてないことについても、だ」
「気付いてないって……何のことだ？」
「それについては後回しで。ともかく、魔力については実は問題ないのさ。オレが魔力を消費しようとすれば、不足分がアンタから強制徴収される」

黙っていても別に良かったんだが、一応確認をとっておくべきだと思った――と続ける。
「で、やっていいのか？」
「ああ。問題ねえ」
自分の身を削る行いだが、そんなものは慣れっこだ。これで、奴に決定的な隙を作ることが出来る。
「レム！　こっちでそいつに隙を作る！　そしたら思いっきりぶち込め！」
「――はい、スバルくん！　合図は任せます！」
シャドウライダーと打ち合いながら、レムはスバルへと声を届ける。全幅の信頼を、彼女の英雄へと傾ける。
「……頼む」
「ああ、頼まれた」
アヴェンジャーがそう答えると、スバルの肉体から――否。精神や魂――そういった所から、大事なものがごっそりと持っていかれた感覚があった。
「――悪心は山頂にありき」
彼の魔力が高まっていくのが分かる。それは、悪神の偽物である彼の持つ宝具。
「――偽典は万象を遍く示し記さじ」
経典の写本たる偽書。自らの傷を相手に返す、『報復』という原初の呪いにして『共有』の呪い。
「――悪を以て疵に報いを」
ただ悪神の名を『被せられた』だけの彼にとって唯一の、悪神『らしい』力。
「逆しまに、死ね」
呪いを口にする。
「『偽り写し記す万象（ヴェルグ・アヴェスター）』――！」
宝具、展開。『動かない右足』が、共有される。無論、先程吹き飛ばされた際に負った傷はそれだけではない。それらもろもろ全部を、そっくりそのまま引っ被せる。

「――ッ!?」
レムとの打ち合い――勝負をかけようとした彼女が踏み込もうとしたその瞬間、右足が完全に静止した。支えを失った体はそのまま地面へと叩きつけられる。
「今だ、レム!」
「はい!『アル・ヒューマ』ぁ――!」
極大の質量を持った氷塊がシャドウライダーを襲う。一瞬の隙を突かれた彼女は回避も防御も出来ず、なすすべなく氷に呑み込まれてゆく。
「終わっ、た……」
「そうですね。では、スバルくん」
「へ? あ……レムさん?」
レムがスバルの隣――ベアトリスと手を繋いでいる方とは反対側に並び立ち、手を差し出してくる。
「その、ベアトリス様と……随分、距離が縮まったんですね。レムは……」
「ああ、そうだな」
レムがそれ以上何かを言う前に、その手を取る。指は細く、強く握りしめれば折れてしまいそうな錯覚に陥るほど。この指で、この手で、彼女はあの鎖棘鉄球を振り回しているのだから驚きだ。
そして何よりも――暖かい。熱い血が通っている。手首に触れれば、血液が脈動するのを感じる。
「色々あったんだ。本当に、色々あったんだよ。それで」
話したいことが沢山ある。レムが『暴食』の手によって眠らされたあと。聖域でのこと。ベアトリスと契約したこと。エミリアとのこと。屋敷に新しいメイドが来たこと。
「え、と……」
沢山ありすぎて、何から話していいか分からない。オットーのこと。ガーフィールのこと。ユリウスのこと。水門都市のこと。まだまだある。
「……スバルくんの手、ごつごつしてますね」

話の切り出し方に迷うスバルに、レムは優しく言葉を掛ける。
はにかみながら、彼女は言う。彼女の声、仕草、その一つ一つが劇的で。ようやく取り戻したそれは、まるで劇薬のようでもあって。
「少し離れているうちに、スバルくんがすごく大きくなったみたいです」
レムが眠ってしまってから、一年以上が経過している。その時間は、残酷な程に大きくて。
「スバルくん」
呼ぶ声が耳に届く度、嬉しくて泣きそうになる。
「本当は、こうしている時間も惜しいんですけど……スバルくんと手を繋いでいると、うっかり忘れてしまいそうです」
「忘れるって……何を？」
「もう。スバルくんまで忘れてしまったんですか？　その……レムとの時間をそれだけ想ってくれてるのは嬉しいですけど……」
レムの言葉がいまいち要領を得ない。確かに、レムと手を繋いでいるこの時間が泣くほど嬉しくて、うっかり零れてしまわないように気を張っているのは確かだが。
「……大事な話だ。レムは今、何の話をしてる？」
「スバルくん……？」
レムの顔に、困惑の表情が浮かぶ。
そんな顔をさせたいわけではないのだが――二人の間にある、致命的なズレ。それを放ったまま、なあなあにして話を進めたくはなかった。
「あの、ですから」
スバルはレムが何の話をしているのか分からなくて、レムはスバルの言葉の意図が読めない。その認識をすり合わせるために、ちゃんと話しておかなければならない。
その結論は、思いもよらぬものだった。
「レムたちは白鯨の討伐を間近に控えた身。一刻も早く、クルシュ様の下へ戻らないと――」

「――は？」

第２４話　「道化」

影に、全てが呑み込まれて行く。
全て、全て、全て。
だが、驚きもなければ絶望もない。あるのはただ、虚無感と諦念のみ。胸に抱いていた筈の『大切なもの』も、既に落としてしまっていて。
ただし、その諦念は『この自分』に向けられるものだ。『違う自分』が目的を果たすだろう、と言う確信があった。
それで全ては闇に沈み、消え去る筈だった。
――だが。
「――――？」
沈みに沈んだその先の、果てることなき闇の中。だと言うのに、眩く光り輝くものがあった。
それは、取り落としてしまった筈の『それ』であり――『諦めるな』、『まだ終わっていない』――とでも言うように、闇の中にあってただ一つ、煌々と光を放っていた。
だから――『それ』に手を伸ばす。
自分にとって、『それ』が全てだ。『それ』が『まだ終わるな』と言うのであれば、それに従う以外の選択肢は無かった。

＊

「あ――先輩！」
「マシュ！　無事でよかった！」
彼女の姿を視界に捉えると、喜びのあまり駆け出した。それはマシュも同じで、二人の距離が縮まるのは一瞬だった。
目が合って、なんとなく恥ずかしくてお互いはにかんでしまう。思わず抱きしめたくなるのを、他のみんなが見ている手前ぐっとこらえた。
『――あ、あーあー』
小気味よい電子音が鳴り、ドクターの声が聞こえてくる。
『よ……よかった！　やっと繋がった！　藤丸くん、聞こえてるかー

い？』
「ドクター！　はい、聞こえてます！」
　通信が途切れていたのはほんの数時間程度だったが、すごく久しぶりに――それこそ、数ヶ月ぶりくらいに声を聞いたような気がした。
『……あれ？　藤丸くん、マシュ？　どうかしたかい？』
「いや、別に何も……」
　藤丸とマシュの間に漂う微妙な雰囲気を察して、ドクターが聞く。
　声が聞けて嬉しい、という思いもないではなかった。が――それ以上に、マシュとの再会に水を差されてしまった、という思いの方が大きかった。
『ともあれ、無事が確認できて何よりだ。藤丸くんの方はこっちでモニター出来ていたけど、マシュの反応は拾えなかったからね』
「さっきまで離れ離れだったんだ」
『なるほど、通信が不安定だったのはそれが原因かな。それじゃあ……通信も復旧したことだし、現状を確認しようか』
　離れていた間に起こったことを共有し、情報の擦り合わせを行う。初めに、エミヤが口を開いた。
「では私から。元の場所に戻る方法について、だ。そのために、まずはこの場所について話す必要があるだろう」
　その言葉に、一行がザワつく。エミヤと離れていた三人のみならず、全員が。それはつまり、彼だけが知り得た情報ということだ。
「先程、会敵した際に固有結界の発動を試みたところ、不発に終わった。その時の状況から、ある程度は推察できる」
「魔力とか、集中が不足してたってわけじゃねえのか？」
「魔力供給は問題なく行われていた。集中力についても、君の思っているようなことはなかったと言っておこう」
　飽く迄も、固有結界の不発は外的要因によるもの。それを前提にして、この場所について考察すると言う。
「いま言った通り、私の固有結界は不発。だが、それと同時にこの空間そのものに変調が見られた。そちらでそれらしい反応は確認出来なかったか？」

「……あ」
その声は藤丸のものか、あるいはクー・フーリンのものか。そう言えば、と。
セシルスと名乗った『彼』との決着の直前、空間が揺らいだ感覚があった。より正確に言えば、それこそが決定的な隙になったからこそ、決着した。
「心当たりがあるようだな」
「うん。あれがなければ、あの人……セシルスには勝てなかったと思う」
少なくとも、あの時点での決着はなかっただろう。雷の如き速さを誇る、二刀遣いの剣士。只者ではなかった。
「……セシルス、だァ？」
「ガーフくん、知っているんですか？」
「話に聞いたッことぐらいはあらァ。ヴォラキア九神将の『壱』、帝国最強の剣士だッてなァ」
ヴォラキア。地名のようだが、耳慣れない。ガーフィールが知っているとなると、異世界の地名で間違いないだろう。あの男もまた、異世界の住人。
「そいつに、勝ったッてのかよォ」
「うん。けど、不完全な感じだった。多分、シャドウサーヴァントと似たようなものなんだと思う」
「死体が操られッてる……みてェなことか？」
「うーん。劣化した複製、みたいな感じかな」
本物のセシルスを見たことなどあるはずもないので、これはあくまで彼を見た時の所感に過ぎない。だが、おそらくはそれで正しいだろう。
「ふむ……では私達が出会ったのも、そのヴォラキア九神将とやらの一人ということだろうか」
「多分、そうじゃァねェ。本物より弱いんだろ？　だったら、あれァカララギ最強のシノビ、『礼賛者』ハリベル……かもしれねェ。ヴォラキア最強に、カララギ最強。そうなってくッと、ルグニカ最強が出張っ

て来てもおかしかァねェな」
「それって……」
　藤丸も、スバルと話した時に規格外の存在である『剣聖』の話は聞いている。聞いた話をそのまま信じるなら、どう考えても相手にするのは無茶だ。
「すまないが、話が逸れているようだ。本筋に戻しても構わないだろうか」
「あっ、ごめんエミヤ……」
「なに、そう気にすることはない。疑問を残したままにしておくのも、あまり良い事ではないからな」
　一呼吸おいて、話を再開する。
「この空間は、固有結界である……と、そう推測できる。先程の現象は、固有結界の相互干渉による結果だろう」
「固有結界のぶつかり合いって、そうなるものなの？」
「いや、結果は条件によって様々だ。上書きされることや相殺することもあれば、共存することもある」
　結果が多岐にわたるため確定は出来ないが、エミヤ本人の感覚としては固有結界でほぼ間違いないと言う。
「ただの固有結界ではない。特異点と融合……いや、固有結界を基に特異点を作った、という感じだろうか」
「で？　その話がこっから出る方法にどう繋がるってんだ？」
「そう急くな。今から話すところだ」
　先を催促するランサーに、エミヤが呆れたような目を向けた。それを受けて、渋々といった様子で話を聴く姿勢に戻る。
「……感覚は掴んだ。上書きはできないが、穴を開けることはできる。その穴に飛び込めば、元の場所に出られるだろう」
　――そこからは早かった。
　藤丸がエミヤに魔力を回し、マシュやガーフィール達といった他のメンバーが周囲を警戒する。
「Ｓｏ，ａｓ　Ｉ　ｐｒａｙ――『無限の剣製（unlimited blade works）』！」
　自分を中心に全方位に展開、ではなく。たった一点にその力を集中

させ、固有結界を部分的に相殺させる。それが、『穴』であり『門』。
「あまり長くは保たん！　すぐに飛び込め！」
本来なら不発に終わるはずのそれを、範囲を絞ることで拮抗。その穴を維持するために、エミヤは魔力と集中力を途切れさせない。
次々と穴に飛び込んで行く。あとはクー・フーリンと、術者であるエミヤだけ。というところで――
「――ウル・ゴーア」
何処かから、炎弾が降り注ぐ。当たればただでは済まないと判断したエミヤは、主の身を守るため『穴』を閉じた。彼とランサーのみが、こちらに残される。
「『熾天覆う七つの円環（ローアイアス）』！」
七枚の花弁が開くように、盾が展開される。飛び道具の類であれば完全に防ぎ切るアイアスの盾。それは、魔力の弾であっても変わらない。
「誰だ！」
ランサーが叫び、炎弾の飛来した方向を見やる。そこには――
「おーおやおや。固有結界の綻びを感じて来て見れば、賑やかなことだーぁね。……しかし、防がれてしまうとはねーぇ」
――不敵に笑う、道化がいた。

＊

その一方、ｓｉｄｅナツキスバル。
「何、言ってんだよ、レム……白鯨は、とっくに……」
それどころか、その先に立ちはだかる『怠惰』も撃破している。その裏でレムが暴食に襲われていて。
レムが『眠り姫』となってから、聖域を解放し、一年以上が経過して、水門都市では多数の大罪司教とやり合って。大罪司教の犠牲となった人達を救うため、知識を求めて監視塔へ――
「いや、そうだ。そもそもの話だ」
何故、レムは今、目覚めているのか。
「スバルくん？」
何も進展していないはずだ。暴食を倒したわけでもなければ、それ

以外の解決法を見つけたわけでもない。
暴食の影響が抜けきらないまま、何らかの方法で中途半端に目覚めてしまったのか。
そう仮定したとして、メイド服を着ているのが不可解だ。プレアデス監視塔に来るに当たって、彼女は旅装に着替えさせられている。
それを加味して考え、スバルの中に一つ憶測が生まれる。
「けど、もしそうだとしたら……前提が崩れる」
自分で思い当たってしまった『可能性』に、自分で怖気を覚える。補強する材料も既に揃っていて。それを否定するために、さらに深い思索に入ろうとして――
「痛いのよ、スバル」
「あ……悪い、ベア子」
無意識のうちに、手を握る力が強くなっていた。それはベアトリスの手を握る方の手だけではなく、レムの手を握っている手も同じで。
「ご、ごめんレム！　大丈夫か？」
「いえ……ですがその、そんなに情熱的に求められると、レムは困ってしまいます」
「お、おう」
魔獣騒ぎの後、屋敷にいた頃はある程度冗談として流せていたレムの言葉も、今ではそうもいかない。曖昧に返事を濁し、変な空気が流れる。
その雰囲気を破るように、ひび割れるような音。
「何だ？」
「気を付けてください、スバルくん」
レムが手を離し、スバル達の前に歩み出る。その視線の先には、先程シャドウライダーを押し潰した氷の塊。
「……ッ」
氷がひび割れ、崩れる。空気が張り詰め、全員がその様子を注視していた。
「何も、起こらない？　ただ崩れただけ――」
「――スバルくん！」

完全な意識の外、死角からそれは現れた。
もちろんアンリマユの宝具によって共有された『動かない右足』はそのままだ。左足だけで超スピードを発揮し、そこまで迫ってきていた。
しかし、その姿はライダーのものではなかった。
だが、その姿には見覚えがあった。それを見て、右足が動かせなくとも体は止まらない狂気に得心がいった。
牙がなくなれば爪で。爪がなくなれば骨で。骨がなくなるのならば命で。それが、『彼女』のやり方。
「『腸狩り』……っ！」
なぜ奴がここにいるのか。なぜライダーが奴に『変わった』のか。推測は出来ないでもないが、命の危機を前にしてそんな悠長なことができるはずもなく――
「――ッるるるらァ！」
そこに、横から蹴りが入れられた。
派手に『腸狩り』が吹き飛ぶ。瓦礫にぶつかり、大きく砂煙を上げて埋もれる。
「大将に手ァ出させッねェよ、黒女ァ！」
――黄金の虎が、牙を剥いて笑った。

第２５話　「裏」

　腸狩りの凶刃からスバル達を守った黄金の虎。言うまでもなく彼は我らがヒーロー、ゴージャス・タイガー。ガーフィール・ティンゼルだ。
「怪我ァねェか、大将」
「助かったぜ、ガーフィール！　無事だ！」
　再会を喜び合う二人。その横で、驚きで目を丸くしている少女が一人。
「え、ガーフ……？」
「あァ？」
　そこで、ガーフィールもその少女に気付く。想い人によく似た、けれど髪の色と目付きが違う、鬼の少女。
「大将？　これァ、どうなってンだ？」
「スバルくん、いつの間にガーフとそんなに……いえ、『聖域』に……？」
　ガーフィールはスバルとレムを交互に、レムはガーフィールとスバルを交互に見て、生じた疑問をスバルにぶつける。
「えーと……悪い！　その話は後でおいおいと、な。今はとりあえず、目の前の問題に向き合おう」
「はい！　スバルくんがそう言うのなら！」
　レムはそう言うと、スバルを庇うように前へ出た。吹き飛んでいった『腸狩り』を警戒する。ガーフィールもそこへ続く。
　疑問も疑念も、スバルの言葉と比べれば優先度は下だ。そうでなくとも、今はまだ倒れていない『敵』に注力しなければならない。
「――――ッ」
「ガーフ？」
「なんッでもねェ。そっくりだって思っただけだ」
　想い人とそれ以外を天秤にかけて、迷いなく想い人をとれる。想い人に対する姿勢は、姉妹でそっくりだ。
「姉様が振り向いてくれないからって、レムを狙わないでください。

ダメですよ、レムにはスバルくんがいますから」
「なッ……誰がンなことするッかよォ！　……仮にそうだとして、大将が相手じゃ張り合うッ気も失せらァ」
「……本当に、色々あったんですね」
　ガーフィールがスバルに一定の信頼を置いているのは、その様子を見ればわかる。あの、意固地で意地っ張りなガーフが、だ。
「スバルくんは素敵です」
　想い人の魅力を再認識する。そして、彼女はひとつあることを心に決めた。多くの疑問はあるが、それをスバルに聞くようなことはしないと。
　きっと今は非常事態。それは『腸狩り』のみならず、この燃え続けている街がそう物語っている。貴重な時間を、レムへの説明で浪費して欲しくない。
　一言も発さずとも、彼がその目を向けてくれるなら。レムが彼のために動くのに必要なのはそれだけ。いや、それすらも必要ないのだ。
「レムが寝ている間に、何があったのかはわかりません。ですが、スバルくんはスバルくんです」
「レム……」
　寝ている間、とは言うが。レムとそれ以外で認識が大きく食い違っている。レムにとっては、せいぜいが数日程度。実際は、一年以上隔てていると言うのに。
　けれど、その認識の差を埋めるのも、今は後回しだ。
「それで、ガーフィール。あの『腸狩り』なんだが」
「アレも偽物ってことでいンだろォよ。軽かったかンな。『ヘシュメシュメの若白髪とホイホロの総白髪』ってヤツだ」
「それだけお前が強くなった、って線は？」
「そこまで自惚れァしねぇ。そうならいいッたァ思うけどよ」
　ほぼガーフィール単独で勝利した相手の、劣化コピー。負ける要素はない。
「それに、だ。俺様ァちぃとばかし先走っただけだッかんなァ。そろそろ来るぜ」

「来る？」
　ちらりとガーフィールが目線を向けた先。確かにそちらから、多くの足音が近付いてきていた。
「――スバル！」
　聞こえてきたのは、自分の名前を呼ぶ銀鈴の声音。その声の主はもちろん、彼女だ。
「エミリア！　それに、藤丸とマシュ！」
　ガーフィールと合わせて、先程離れ離れになってしまったうちの四人と合流。しかし、二人ほど足りない。
「アーチャーとランサーは？」
「……はぐれた。まだ大丈夫だとは思うんだけど」
　藤丸は自身の令呪を撫でるように確認する。魔力の経路（パス）はまだ繋がっている。だが、空間を隔てているからなのか、微弱だ。
「そうか。いや、助かる！　戦力としては過剰だけど、それくらいの方が安心する！」
「――ふふ、そう。そうなのね」
　妖艶な笑みを浮かべ、立ち上がる女怪。傷は深いがそれを感じさせないほど平然としている。それどころか、その頬は紅潮してもいた。
「何度見ても気味ッが悪ィな、その面ァ」
「あら。どこかで会ったかしら？」
「俺様が初めて殺したのがてめェだ。忘れッたくても忘れられねェよ」
　何よりも、その姿。先程までのような、靄に包まれた影ではない。シャドウサーヴァントという化けの皮を剥いだことで、本物の『化け物』という中身が顔を出した、ということか。
「観念ッしろや。大将の言ってた『四方八方からソの国の歌が聞こえる』みてェなことッだぜ」
「面白いことを言う虎さんね。でも……」
　エルザは周囲を見渡す。彼我の戦力差を測れない彼女ではない。その差は明白、エルザに勝ちの目はない。
「本当に殺されちゃうかもしれないわね。……一人だったら、の話だ

けれど」
「だったらも何も、一人だろォが。それとも、『困った時にはカルルメリの酒瓶』みてェなことがあンのか？」
「言葉の意味はわからないけれど、そうね。ここに来ているのは私一人ではないの」
地面が揺れる。地響きが聞こえる。その発生源、その音の主は巨大な魔獣、その足音だ。
「――お兄さん、こんな所で何してるのお？」
岩豚（ワッグピッグ）と、それに乗るメイリィ。それが、向こう側の援軍だった。
＊
視線の先に浮かぶ道化。それが、計り知れない規格外の――聖杯級の魔力を保有していると、肌で感じた。
だが、どれほど強大であろうとも心臓を穿ち抜けばそれで終わり。幸い、ギリギリ宝具の射程範囲内だ。
『刺し穿（ゲイ）つ』――」
「そう簡単に行くとは思わないことだーぁよ」
その特性を知ってか知らずか。宝具の真名解放まであと一瞬、というところで道化が範囲外へと飛び去った。
「チッ」
目標を見失う。しかし、飛んで行った方向は分かる。すぐに追いかけて、今度こそアレの心臓を抉り出す。
「待て！」
走り出そうとしたクー・フーリンの肩が掴まれる。振り向くと、嫌味なやつの顔が目に入った。
「止めてくれるな、アーチャー。ここでアイツを追わなきゃ、意味が無くなる」
「無策で突っ込む気か!?　どう考えても罠だろう！」
「だとしてもだ」
「ランサー！　君は……」
アーチャーが強く諌めようとして、『それ』に気付く。
ランサーの末端から、光が立ち上っていた。紛れもなく消滅の予兆

であり、この霊基の限界を知らせている。
余裕がなかった。悠長にしている暇はない。今この瞬間も、彼の霊基は崩壊しかかっている。それを、気合いと『戦闘続行』で押し止めているだけ。
「残り時間は少ない。当たって砕けろ、だ」
「無茶は……いや、言っても仕方がないな」
策を練る暇さえない。それに、もう一度『穴』を開けようとしても、そこを狙い撃ちにされるのは明白だ。だから、二人揃ってこうするのが現状の最善。
――辿り着いた先は、城だった。
「どうする？」
「本来なら二手に分かれたいところだが、今は各個撃破される方が痛手だ」
二人揃って、城の内部を進んでいく。先程感じた強い魔力を辿って、奥へ奥へと。
「……ここか」
しばらく進んで、行き着いた。
壁一枚、扉一枚を隔てた向こう側に、やつは居る。聖杯級の魔力、あるいは、聖杯そのものを保持しているであろうと思われる強大な魔力。
意を決して、扉を開け放つ。
「ようこそ。魔城『パンデモニウム』にねーぇ」
そこは、どうやら応接間のようだった。道化はそこの椅子に悠然と腰かけて、こちらへ歓迎の言葉を送った。
「――その心臓、貰い受ける」
歓迎を素直に受けるつもりはない。その代わりに、心臓を。その命を貰い受ける。
「『刺し穿つ死棘の槍』――！」
因果逆転の呪い。槍の軌跡は過たず、心臓へ狙いを定める。
「随分と、舐められたものだーぁね」
しかし、道化の命を奪うには至らなかった。

「――アル・ゴーア」
隙だらけになったランサーを、特大の炎弾が襲う。既に限界を迎えていたランサーの霊基は抑えをなくし、急速に崩壊していく。
「……ちっ」
この一撃で、終わらせるつもりだった。だがそれは叶わず、焼き殺される。
「悪いな、先に戻ってるぜ、アーチャー……」
カルデアに召喚されたサーヴァントにとって、特異点での消滅は死ではない。カルデアを擬似的な座として定め、帰る場所としている。
だから、これは単に今回の特異点攻略にあたる戦力が減っただけ。しかし、その『だけ』が、今は痛い。
「……どうやって防いだ？」
「ちょっとした仕掛けだーぁよ。『剣聖』の剣撃を防ぎ切る程度のねーぇ」
程度、などと白々しく言ってのける。剣聖はあちらの世界において最強の存在だと言う。エミリアやガーフィールと言った、サーヴァントに比肩しうる者達と比べても規格外らしい。
話を聞くに、その剣撃は対軍・対城宝具の真名解放と同等の規模・威力であると思っていい。それを防ぎ切るとなれば、並の防御ではない。
「完全には、防げなかったけーぇれど」
だが、どれほど強い防御であろうとそれを貫くのがゲイボルクだ。その証拠に、彼の胸からは多量の流血があった。
「この程度で止まる私ではない。ギリギリ、心臓には届いてないかーぁらね」
「……貴様は」
「うん？」
この距離では、弓矢はほとんど意味をなさない。干将・莫耶を投影する。胸の前でそれを構え、視線は真っ直ぐに道化を捉えた。
「彼の言っていた人物像と一致する。ロズワール・L・メイザース辺境伯、で相違ないだろうか」

「間違ってはいないとーおも。ただ、『今の私』に関して言うのなら、少し足りない」
彼は、その首に巻かれた橙色の布を掴んだと思うと、懐から一枚のコインを取り出した。そして、言い放つ。
「私は――『粛清王』だ」
その言葉とともに、右手の親指でコインを弾く。
「裏」
コイントス。その意味を測りかねたエミヤだが、しかしロズワールが笑みを浮かべたことで警戒レベルを上げる。
「残念だったねーぇ」
「……なっ!?」
エミヤの目の前に、二体の影が現れる。そのうち片方には見覚えがあり、もう片方も恐らく知っているものだった。
「数人がかりだった。偽物だった。それでも、『青き雷光』と『礼賛者』を下した君たちには賛辞を送ろう。だが、君一人ではどうかな?」
――自陣、『アーチャー』エミヤ。
――勝利条件、『粛清王』ロズワールの討伐。
――結果、『失敗』。

第２６話　「使えるものは全部使って」

青髪をお下げにした、魔獣を従える少女。目の前にいる彼女は、『魔獣使い』メィリィ・ポートルートに相違ない。
問題は、彼女がどの時点の彼女なのか、だ。
「何してるの、はこっちの台詞だよ……メィリィ、退いてくれ。シャウラのことだってある。お前と、敵対したくない」
エルザに関しては、先程のガーフィールとのやり取りを聞く限り、屋敷襲撃よりも前の時点だと確信している。
メィリィがそれと同じ時点なら衝突は避けられない。だが、もしスバル達と同じく監視塔から来ている彼女であれば、話は別だ。
だから、敵対したくない理由としては弱いシャウラの名前を出した。それを知っているか否かで、この先の話が変わってくる。
「それとお姉さんと、何の関係があるのお？」
「――！　シャウラが、わかるのか？」
「変な事言うのねえ。そんなにすぐ忘れるわけないじゃなあい」
確定した。メィリィはスバル達と同じ地点から来ている。であれば、話が通じるはずだ。
「……メィリィ。敵対、したくない。だから、退いてくれ」
もう一度、言葉を掛ける。確かめるために放った最初の言葉と中身は同じ。だが、目的は違う。
「やり合いたくないのは、わたしだって同じよお」
「それなら！」
「――でも」
結論を急ごうとするスバルを、メィリィの声が引き止める。そんな都合のいいことは許さないとでも言うように。
「エルザを、殺すんでしょお？」
「――っ、な」
どこまでも冷たく、メィリィが言い放つ。彼女が立ちはだかる理由は、それをさせないため。エルザという姉の存在が理由の全て。
「そりゃ、そうか。姉妹、なんだもんな」

ともすれば、それを殺したスバル達を憎んでいてもおかしくない。さらに、それが目の前でもう一度姉を殺そうと言うのであれば、メィリィの選択は必然だ。
「待ッちやがれ。おかしいだろッがよォ」
「……ガーフィール？」
「そっちが先に仕掛けてきたンだろォが。順序があべこべだッての」
スバル達がエルザを殺そうとしているのではなく、エルザがスバル達を殺そうとしてきたのだ、と。
「今ッから尻尾巻いて逃げんなら、見逃してやらんでもねェ。が、そんだけだ。自分の立場ァ忘れんじゃねえぞ」
「それは、そうだけどお」
ガーフィールが真正面から正論をぶつける。それに縮こまってしまうメィリィを庇うように、エルザが前に出た。
「――メィリィもあなた達も、こっちが負ける前提で話しているのが気に食わないのだけれど」
「てめェは勝てッねェよ、そいつが加わっても一緒だ。寧ろ、余計に弱点晒しただけッだぜ」
「何を……」
「俺様にトドメ刺せる状況でも、そいつが死にそうならそっち優先するッだろォが。そんぐれェの情があるこたァ知ってンだ」
その言葉を聞いて、エルザが初めて虚をつかれたように固まる。そこへ、ガーフィールが畳み掛ける。
「言ってやれや、大将。そっちの言い分は『臆病グラッツのガーシュ峠撤退戦』だってなァ！」
「――。あ、ああ。言葉の意味は分からねえけど、そうだな。俺たちは、かかる火の粉を払いたいだけなんだ。だから――」
だから。だから、何だ。撤退して欲しい、逃げて欲しい――か。けれど、それはどうにも据わりが悪くて、言葉をそこで切る。そして、考えを別の方向にシフトする。
「エルザ。聞きたいことがある」
「何かしら？」

「お前は、誰に……いや、誰かに雇われて来たのか？」
その質問への返答如何によって、次の行動を決定する。が、どちらにしても目的は変わらない。スバルはもう心を決めた。
「いいえ？　約束を果たしに来ただけよ」
「約束って……」
「あら。覚えてない？」
口振りからして、スバルとエルザの間に結ばれたものらしいが、生憎と覚えがない。覚えがあるものと言えば、常軌を逸した腸への執着と、捨て台詞くらいのもので。
――『いずれ、この場にいる全員の腹を切り開いてあげる。それまではせいぜい、腸を可愛がっておいて』
――『言ったでしょう？　約束をしたでしょう？』
――『次に会う時まで、腸を可愛がっておいてって』
「あれかよ……」
正確に言えば、このエルザは屋敷襲撃前のエルザなので後ろ二つは言っていないのだが。
「けど、それなら話は簡単だ。話を戻すぜ。俺たちは、かかる火の粉を払いたい。だから、そのために――俺達に雇われろ、エルザ・グランヒルテ！」
「それを、呑むとでも？」
悪くない提案の筈だ。このまま戦えば、エルザの敗北は必然。あとひと押しがあれば、こちらに転ぶ。
「エルザ」
メイリィが、言葉少なに目で懇願する。それが、最後のひと押しだった。
「……交渉の席には着いてあげる。雇うと言うからには、それに見合った報酬を期待するけれど」
「そうだな、とりあえずはその脚だ」
スバルはエルザの右脚を指差す。アヴェンジャーの宝具によって『共有の呪い』を受けており、どうあろうと動かすことは叶わない。
「こっちに付けばそれを治してやる。言っとくが、いくら斬って再生

したって無駄だぜ」
「でしょうね。そんな気はしていたわ」
説明がなくとも、感覚的に理解していたと。そんな状態でありながら向かってくる精神性、それこそ彼女が彼女たる所以なのだろう。
「『共有の呪い』だ。あいつの脚が治らない限り、お前の脚も動かねえ」
「呪い……呪術ね。直接触れられた憶えはないのだけれど」
「お前の知ってるそれとは根本から別のもんなんだよ。相手から傷付けられるのが条件だ」
あちらの世界の呪術は、接触が最低条件。しかし、こちらの世界ではそんな縛りは存在しない。名付けですら、ある種の呪的要素を孕んでいる。
「あと、あいつを殺すってのもオススメしない。ウルガルムの食事とはワケが違うからな。そんなことしたら……」
「死も、共有されるのね？」
「……ああ」
ハッタリだ。殺せば解けるかどうかはともかく、死までもが共有されるような、そんなに使い勝手のいいものではない。だが、エルザにとっては未知の術。筋は通っているし、騙し通せても不思議はない。
「――そう。それで、まだ終わりではないのよね？」
「おう。あとは……魔力だな」
「魔力？」
エルザが怪訝そうに眉を顰める。交渉云々以前に、突拍子もないことを言い出したとでも言いたげな表情だ。
「この言い方じゃ伝わりにくいか。えーっと……エルザお前、今んところ本調子じゃないよな？　怪我と脚のことを別にしても、だ」
「……そうね」
「で、こっちにはそれを解決する方法がある。万全とまで行かなくとも、多少はマシになるはずだ。それが二つ目ってところかな」
今思いつくものはこれで全部。あとは、『殺されたくなきゃ従え』みたいな脅迫がせいぜい。だがその話はさっきもう終わったので、本当にこれで打ち止めだ。

これでエルザが納得してくれるか、そうでなければ次の瞬間の自分がなにか思いついてくれるか。
「藤丸！　話は聞こえてただろ？　できるか？」
少し離れた場所にいる彼を呼びつける。交渉でこちらが提示した条件の、そのどちらにも藤丸が重要だ。
「マシュ、一緒に来てくれる？」
「はい。もちろんです、先輩（マスター）」
マシュを伴に引き連れて、スバルの隣、エルザの正面へ。近付けば、彼女の危険な雰囲気をより感じ取れる。
「できるかって言うのは、脚を？　それとも魔力のほう？」
「魔力のほうだ」
「微妙かな。やってみなくちゃわからない」
「それでいい。とりあえずやってみてくれ」
スバルが藤丸に『契約』を促す。さっきまでシャドウサーヴァントの皮を被っていたとは言え、今の彼女は『向こうの世界の住人』だ。
もし、この契約が成立するのであれば――それが一体何を意味するのか。もちろん、スバルもそれをわかった上で提案した。
「正直、先にこっちに相談して欲しかった」
「悪い。あんまり良くない判断だったか？」
「――いや。カルデア好みの展開だ」
藤丸がニッと歯を剥いて笑みを向けると、スバルも笑みを返す。事後承諾ではあったが、スバルとしても藤丸ならばそれを呑むだろうと判断しての事だった。
「……手を」
「こうでいいのかしら？」
差し出された手に、自分の手を重ね合わせる。随分と冷えきった殺戮者の手だ。だが、そんな手には何度も触れてきた。今更怖気付く藤丸ではない。
魔力の経路（パス）を繋ぐ。自分を通じて、彼女に魔力が流れ込んでいくのがわかった。そうして、彼女は変質する。
見た目にこそ変化はないが、体を構成する魔力が――『霊基』が、こ

ちらの魔力へと染まってゆく。
クラス『アサシン』。真名『エルザ・グランヒルテ』。正真正銘のサーヴァントだ。それはきっと構成魔力が違っていただけで、さっきまでもそうだったのだろう。
そしてそれは、『彼女だけが』そうなのだと断ずることは不可能だった。エルザが『そう』ならメイリィも『そう』だろう。
いや、なんなら異世界からの来訪者である彼ら全員、『そう』である可能性は、否定できない。それどころかほぼ確定だと言っていい。
「……スバル」
「何も言わなくていい。何となく、そんな気はしてたんだ」
それよりも、とスバルはエルザに向き直る。今やるべき事に目を向け続けていれば、余計なことは考えずに済む。
「どうだ？　この条件で雇われてくれるか？」
「ええ。いいわ、雇われてあげる」
「だろうな。そう簡単に雇われるようなやつじゃ……今なんて言ったの？」
完全にまだ渋られる体で話を進めようとして、想定と違う答えに躓く。話をちゃんと聴いてないことが露呈して、恥を晒した。
「雇われてあげると、そう言ったわ。まだ出せるものがあるなら、遠慮なく出してくれて構わないのだけど」
「もうねえよ。しかし、随分と簡単に頷くもんだな？」
「そもそもこちらは逆らえない状況、でしょう？　『雇う』だなんて言うから交渉ごっこに興じてみたけれど、交渉以前の問題ね」
「交渉ってのは『交渉のテーブルに着く前にどれだけ準備できるか』だからな。その点、今回は行き当たりばったりでその場にあるもん掻き集めただけだ」
いつかのループでアナスタシアに言われたことだ。その時の経験は確実に活きてはいるが、今回ばかりは別。相手の生殺与奪の権を握った時点で、こちらの意図が通るのは当然だった。
「じゃあ、話がまとまったところでひとつ。まあ、たいしたことじゃないんだが」

「……何かしら？」
「俺たちはこれから行動を共にするわけだろ？　だから、最低限筋を通すべきだ。――襲いかかって来たことについて、『ごめんなさい』してもらうぜ」
　そう言うと、スバルはエミリアと目を合わせて笑みを交換したのだった。
＊
「いやァ、それでこそッだぜ、大将。俺様の時もそうだったが、敵だろォが使えるもンは全部使うってんだかんなァ」
「お前の場合はあの時点ではとっくに敵だとは思ってなかったからな。それより、俺がエルザを味方につけることに文句言わねえのが意外だ」
「あァ、まァ、ロズワールの野郎よりは信用できらァ。それに、俺様が見張ってっから悪さはさせッねェよ」
「ロズワールと比べたらそりゃそうだろ。エルザの依頼人がそもそもあいつだったからな」
　エルザは依頼を受けて、それをこなしただけ。それをさせたのは、依頼人であるロズワールだ。
「野郎、やっぱりあのッ時に噛み千切っとくべきだったぜ」
「ガーフィール？　……どうした？」
　スバルから見える彼の横顔は、怒りが張り付いているように見えた。そして疼いて仕方がないとでもいうように、歯をガチガチと鳴らす。
「居やがった。それで、こっちッ見るなり魔法を撃ち込んできやがってよォ」
「あいつが？　……エミリアも、見たのか？」
　ガーフィールが見たというのなら、彼と共に空間の裂け目に落ちた彼女もそうだろうと視線を向ける。
　エミリアは、その視線に小さく頷きを返した。
「呪印の誓約があったはずだ。なんで、あいつが手出しできる？」
「全部嘘っぱちだった。そういうッことだろォよ」

「……そう考えるしか、ないか」
あるいは誓約に抜け穴があり、それを突いたか。どちらにしても、彼がこちらにとって信用のおけない存在になった。――あるいは『敵』か。
「どっちッでもいい。俺様が頭噛み砕いてやんのァ変わんねェ」
「お、おう。あいつに怒りを募らせてるとこ申し訳ねえんだけど、今はとりあえず別に優先事項があるんだ」
「あァ？　あの野郎ぶっちめる以上に……」
苛立ちを隠さない、怒りの滲み出た声音。その怒りが見当違いな方向に行く前に、感情の矛先を提示する。
「ラムを助けにいく。大兎の餌食になる前にな」
「あァ!?　なんでそれを早く言わねェんだ！　こうしちゃいられッねェ！　どっちだ！」
「方角はあっちだ。とりあえず、走りながら説明する！　そっちで何があったかも聴きたい！」
そう言って走り出そうとするスバル。だが次の瞬間、体が浮くような感覚があった。事実として足は地に着いておらず、膝裏には白くきめ細やかな腕が差し込まれていて、背はその反対の腕で支えられていた。
有り体にいえば、『お姫様抱っこ』だ。
「エ……エミリアたん？　何してんの？」
「え？　スバルって、あんまり足は速くないでしょ？　だから、こっちの方が速いかなって」
「それは間違ってないけども！」
男の子としては見栄を優先したいという気持ちと、ラムを助けるためにはこの方がいいという判断と、それから急にエミリアの顔が近くに来たことで情緒がハチャメチャだ。心臓が破裂しかねない。
「エミリア様。そのお役目、レムに任せてください」
「あ……そう？　だったら、お願いするわね」
エミリアからレムへ、スバルの受け渡しが行われる。レムは腕の中にいるスバルの存在を確かめると柔らかく微笑み――、

「ごちそうさまです」
「何が!?」
「恥ずかしいのかもしれないけど、状況が状況なんでしょ？　羞恥心は捨てないと」
「言ってくれるぜ、藤丸。この感覚は体験したやつにしかわからな……ってお前もかよ!?」
　こちらに歩み寄ってくる藤丸もまた、抱えられている状態だった。と言うよりは、『藤丸を抱えたマシュが歩いてきている』が正しい。
「お前、よくそれでキリッとしてられるな!?」
「嬉し恥ずかし、ってのが無いわけじゃないけど……初めてのことじゃないし、この方が合理的だから。ね、マシュ？」
「は、はい。そうですね、先輩……」
　互いの息がかかるくらいの至近距離。何かの拍子に唇が重なってもおかしくない。なのに藤丸に動揺は見えない。むしろ、その距離で微笑みかけられ、見つめられるマシュの方が顔を赤くする始末。
「図太いメンタルしてやがるぜ、全く」
　そうでなければ、世界を救い取り戻す旅などできないのだろう。それが生来のものなのか、旅の中で身に付けたものなのかは知るところではないが。
「レムがスバルを連れてくなら……そうね、ベアトリスは私がおぶってくわ」
「突然何を言い出しやがるのよ!?」
「あ……ごめんね？　抱っこの方が良かった？」
「そういうことを言ってるんじゃないかしら！　……でも、どうしてもって言うなら、肩車くらいは許してやらんこともないのよ」
　その言葉に、エミリアの表情がパッと明るくなる。張り切ってベアトリスを持ち上げると、そのまま肩に乗せた。
「ンなら、オットー兄ィは俺様がおぶってくッぜ。置いてく訳にも行かねッかんなァ」
「こんなんばっかで申し訳ないやら情けないやらですが、お願いします。正直、息をするだけで辛いので」

炎上汚染都市冬木。常に炎の絶えないこの場所では、当たり前だが空気が清浄であるはずもない。
スバルは、藤丸たちと出会うまでにこの場所で幾度となく死を迎えたが、一度この空気が原因の酸欠で命を落としたこともある。
よほど身体が強くなければ無理は禁物。だから、やはりこの状況こそが適切、合理的だ。
「……うだうだ言ってても仕方ねえ、か。行こう。情報交換は走りながらだ」
＊
並走するレムとマシュ。抱えられるスバルと藤丸が、正面に向かい合う。傍から見ても、当事者としても可笑しい状況だが、それを堪える。
「クリスタルを砕いて、中に閉じ込められたラムを救出する。それは今までと一緒だ。ただ、今回はそこに厄介なやつがいる」
「『大兎』って言ってたね。どんなやつなの？　やっぱり、読んで字のごとく大きい兎？」
「んや、多い兎で多兎。転じて大兎ってな。大きさはむしろちょっと小ぶりで、魔獣だから角が生えてる。常に群れで行動してて、単体が分裂して増えるんだ。一匹でも残せばそっからまた増えて元の数に戻っちまう。だから……」
「全部、いっぺんに？」
藤丸の言葉に、スバルは頷く。雨粒を全て蒸発させるがごとき難行だが、全て滅ぼしてしまえばゼロから増えるようなことは無い。
「幸いと言うべきか、数は多いけど意識は一個。バラバラに行動するような知識は無いらしいから……」
「……待った」
説明を続けようとしたスバルを、藤丸が遮る。その表情はどこか張り詰めていて、顔を向けられるスバルも思わず強ばってしまう。
「それは、おかしい」
「おかしいって、何が」
「見たんだ、その兎。だけど、群れじゃなかった。たった一匹だったん

だよ」

それはつまり何を意味するのか。

「――は？」

群体が一つの意識を共有している、という大兎唯一の弱点らしい弱点。それが無いということは。

――つまり、最悪だ。